

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集

株式会社ニシムタ店舗建設に伴う発掘調査報告書

しん ばん しょ うしろ
新番所後遺跡

平成19年3月
指宿市教育委員会

新番所後遺跡正誤・追加説明表

箇所	誤	正
14頁本文5行目	5月15日～6月26日	5月10日～6月27日
41頁本文3行目	打製石斧10点	打製石斧9点
85頁 本文下から2行分	第12b層	第12層b
86頁 本文上から18行目	第12b層	第12層b
91頁 写真37中の石器No	36	38
86頁で報告した312・88・1444・1448・321・800・906・954・1016・694・308の石器は未掲載。		

例　　言

1. 本書は、平成 18 年 5 月 10 日から平成 18 年 6 月 27 日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する新番所後遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、株式会社ニシムタと指宿市において委託契約を締結し、指宿市教育委員会で実施した。

調査は中摩浩太郎・渡部徹也が担当し、鎌田洋昭の協力を得た。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	教育長	林 賢一郎
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教育部長	増元順一
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	社会教育課長	岩崎三千夫
		社会教育係長	川路潔
		社会教育係主査	東中川睦子
		社会教育係主事	岩松友美
		社会教育係主査	官地主税
		社会教育係主事	野元暢治
		文化係長	西野実
		文化係主事	吹留義輝
		文化財係長	下玉利泉
発掘調査・報告書作成担当		文化財主査	中摩浩太郎
		同上	渡部徹也
		同上	鎌田洋昭

発掘調査・整理作業員 林 美加子、堂蘭眞弓、馬場シズ子、堀口ツユ子、篠崎秀夫、上玉利孝志、片平健一、下玉利郁代、増田未治、坂田 恵、久留須利恵、田井村浩三、松尾優子、吉元鈴子、東川達也、安永美穂、吉元 妙、清 秀子、竹下珠代、松元かおり、富宿富美子

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は、中摩浩太郎・渡部徹也・鎌田洋昭が分担し行った。

4. 調査、及び報告書作成に要した経費は㈱ニシムタが全額負担した。

5. 本報告書のレベルは、全て絶対高である。図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。

6. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、「橋牟礼川遺跡Ⅲ」(1992、指宿市教育委員会)と『水迫遺跡Ⅰ』(2000、指宿市教育委員会)に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。

土器の混和剤【力:角閃石、セ:石英、ウ:雲母、金:金雲母、白:白色粒、黒:黑色粒、赤:赤色粒】

土器部位・法量【口:口縁部、口縁部径、肩:肩部、肩部最大径、胴:胴部、胴部最大径、底:底部、底部径】

調整【内:内面、外:外面、口唇:口唇部、突:突帯部、底:底面、脚内:脚台内面、脚端:脚台接地面】

色調【内:内面、外:外面、肉:器肉】※地層・遺物のマンセル値は、土色計 SCR-1 を使用し測色した。

7. 調査にあたり、森脇 広氏(鹿児島大学法文学部教授)、東 和幸氏(鹿児島県歴史資料センター黎明館)に指導・助言をいただいた。また、石材認定については、桑水流 淳二氏(鹿児島県立博物館)に指導・助言をいただいた。記して感謝したい。

8. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館 C O C C O はしむれで保管し、活用する。

本文目次

新番所後遺跡確認調査編

第1章 経緯と調査概要	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 確認調査に至る経緯と調査の概要	1
第2章 遺跡の層序	4
第3章 調査の成果	4

新番所後遺跡本調査編

第1章 調査区の設定と調査の概要	14
第2章 調査区の成果	14
第1節 古墳時代	14
第2節 弥生時代	36
第3章 まとめ	85

挿図目次

第1図 調査地点図①	1	第24図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図②	24	第47図 弥生時代出土遺物実測図⑥	52
第2図 調査地点図②	2	第25図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図③	25	第48図 弥生時代出土遺物実測図⑦	53
第3図 トレンチ位置図①	3	第26図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図④	26	第49図 弥生時代出土遺物実測図⑧	54
第4図 層位模式柱状図	4	第27図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑨	27	第50図 弥生時代出土遺物実測図⑩	56
第5図 トレンチ位置図②	5	第28図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑩	28	第51図 弥生時代出土遺物実測図⑪	57
第6図 2トレンチ完掘状況図	6	第29図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑫	29	第52図 弥生時代出土遺物実測図⑬	58
第7図 2トレンチ層位断面図	7	第30図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑭	30	第53図 弥生時代出土遺物実測図⑮	59
第8図 3トレンチ完掘状況図及び断面図	8	第31図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑯	31	第54図 弥生時代出土遺物実測図⑯	60
第9図 4トレンチ完掘状況図及び断面図	9	第32図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑰	32	第55図 弥生時代出土遺物実測図⑲	61
第10図 4トレンチ出土遺物実測図	9	第33図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑳	33	第56図 弥生時代出土遺物実測図⑳	62
第11図 8トレンチ完掘状況図及び断面図	10	第34図 弥生時代ビット被出状況図	36	第57図 弥生時代出土遺物実測図㉑	63
第12図 8トレンチ出土遺物実測図	11	第35図 弥生時代ビット平・断面図①	37	第58図 弥生時代出土遺物実測図㉒	64
第13図 木構造地層層位断面図	12・13	第36図 弥生時代ビット平・断面図②	38	第59図 弥生時代出土遺物実測図㉓	65
第14図 古墳時代竪穴式住居戸内骨頭	14	第37図 弥生時代ビット平・断面図③	39	第60図 弥生時代出土遺物実測図㉔	66
第15図 古墳時代竪穴式生活遺物出土状況図	15	第38図 弥生時代ビット平・断面図④	40	第61図 弥生時代出土遺物実測図㉕	67
第16図 古墳時代竪穴式住居遺物出土状況図	16	第39図 弥生時代遺物出土状況図	41	第62図 弥生時代出土遺物実測図㉖	68
第17図 古墳時代竪穴式住居遺物出土状況図	17	第40図 弥生時代出土遺物実測図①	42	第63図 弥生時代出土遺物実測図㉗	69
第18図 柱穴埋土中遺物出土状況図	18	第41図 弥生時代出土遺物実測図②	44	第64図 弥生時代出土遺物実測図㉘	70
第19図 古墳時代竪穴式住居平・断面図	19	第42図 弥生時代出土遺物実測図③	46	第65図 弥生時代出土遺物実測図㉙	71
第20図 古墳時代竪穴式住居平・断面図	20	第43図 弥生時代出土遺物実測図④	48	第66図 弥生時代出土遺物実測図㉚	72
第21図 古墳時代遺物出土状況図	21	第44図 弥生時代出土遺物実測図⑤	49	第67図 弥生時代出土遺物実測図㉛	73
第22図 古墳時代出土遺物実測図	22	第45図 弥生時代出土遺物実測図⑥	50	第68図 弥生時代出土遺物実測図㉜	74
第23図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図	23	第46図 弥生時代出土遺物実測図⑦	51	第69図 弥生時代出土遺物実測図㉝	75

写真目次

写真1 指定市全般	87	写真36 磁石製岩偶出土状況	91	写真71 ピット34	94
写真2 1トレンド掘削状況	87	写真37 磁石製形器品出土状況	91	写真72 ピット35	94
写真3 2トレンド掘削状況	87	写真38 ピット1	92	写真73 ピット36	94
写真4 3トレンド掘削状況	87	写真39 ピット2	92	写真74 ピット37	94
写真5 4トレンド掘削状況	87	写真40 ピット3	92	写真75 ピット38	94
写真6 4トレンド縄文地層ピット断面	88	写真41 ピット4	92	写真76 ピット39	94
写真7 5トレンド掘削状況	88	写真42 ピット5	92	写真77 ピット40	94
写真8 6トレンド掘削状況	88	写真43 ピット6	92	写真78 ピット41	94
写真9 7トレンド掘削状況	88	写真44 ピット7	92	写真79 ピット42	94
写真10 8トレンド掘削状況	88	写真45 ピット8	92	写真80 ピット43	94
写真11 8トレンド遺物出土状況	88	写真46 ピット9	92	写真81 ピット44	94
写真12 9トレンド掘削状況	88	写真47 ピット10	92	写真82 ピット45	94
写真13 调査区全照(12層a直下の地底)	88	写真48 ピット11	92	写真83 ピット46	95
写真14 作業状況1	89	写真49 ピット12	92	写真84 ピット47	95
写真15 調査区東壁層位(10トレンド)	89	写真50 ピット13	92	写真85 ピット48	95
写真16 調査区北壁層位(10トレンド)	89	写真51 ピット14	92	写真86 ピット49	95
写真17 調査区南壁層位1	89	写真52 ピット15	92	写真87 ピット50	95
写真18 調査区南壁層位2	89	写真53 ピット16	93	写真88 ピット51	95
写真19 古墳時代竪穴住居跡状況	89	写真54 ピット17	93	写真89 ピット52	95
写真20 墓土遺物出土状況1	89	写真55 ピット18	93	写真90 ピット53	95
写真21 墓土遺物出土状況2	89	写真56 ピット19	93	写真91 出土遺物写真1	95
写真22 墓土除去状況	90	写真57 ピット20	93	写真92 出土遺物写真2	96
写真23 古墳時代竪穴住居跡状況	90	写真58 ピット21	93	写真93 出土遺物写真3	97
写真24 炭の集中部	90	写真59 ピット22	93	写真94 出土遺物写真4	98
写真25 土坑型	90	写真60 ピット23	93	写真95 出土遺物写真5	99
写真26 付帯土坑(完掘状況)	90	写真61 ピット24	93	写真96 出土遺物写真6	100
写真27 付帯土坑(横呑状況)	90	写真62 ピット25	93	写真97 出土遺物写真7	101
写真28 主柱穴A(埋納遺物除去跡)	90	写真63 ピット26	93	写真98 出土遺物写真8	102
写真29 主柱穴A(完掘状況)	90	写真64 ピット27	93	写真99 出土遺物写真9	103
写真30 主柱穴B	91	写真65 ピット28	93	写真100 出土遺物写真10	104
写真31 漆形罐状況	91	写真66 ピット29	93	写真101 出土遺物写真11	105
写真32 弥生時代遺物出土状況遺景1	91	写真67 ピット30	93		
写真33 弥生時代遺物出土状況遺景2	91	写真68 ピット31	94		
写真34 土器出土状況1	91	写真69 ピット32	94		
写真35 土器出土状況2	91	写真70 ピット33	94		

表 目 次

表1 確認調査結果一覧	2	表6 弥生時代遺物觀察表2	77	表11 弥生時代遺物觀察表7	82
表2 古墳時代遺物觀察表1	34	表7 弥生時代遺物觀察表3	78	表12 弥生時代遺物觀察表8	83
表3 古墳時代遺物觀察表2	35	表8 弥生時代遺物觀察表4	79	表13 4・8トレンド出土遺物觀察表	84
表4 弥生時代ピット法星表	40	表9 弥生時代遺物觀察表5	80		
表5 弥生時代遺物觀察表1	76	表10 弥生時代遺物觀察表6	81		

■新番所後遺跡確認調査編■

第1章 経緯と調査概要

第1節 遺跡の位置と環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置する。地形的には、山地、台地、平野、湖沼の4つに大別される。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖は、約5,500年前に噴火し、その噴出物は、厚く指宿地方を覆い、本市の地形形成の大きな要因となっている。

また、南西にある開聞岳も縄文後期に活動を開始して以来、噴火を繰り返していた。指宿市内の各地で、黄コラ（縄文時代後期）、暗紫コラ（弥生時代中期）、青コラ（7世紀第4四半期）、紫コラ（西暦874年3月25日）などの噴出物が確認され、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は紫コラによる火山災害遺跡としても知られている。

新番所後遺跡は、指宿市十二町字尻垂ノ上に位置する。遺跡は、西方にある鰐池マールの外壁をなす標高約280mの山から緩やかに下りてきた山裾、標高32m前後の緩傾斜地に立地し、付近には、橋牟礼川や山王川などの小河川が流れている。北方約0.5Kmには、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡が、南方約1Kmの地点には成川遺跡があるなど周辺にも多くの遺跡が確認されている。

昭和49年に鹿児島県によって行われた指宿養護学校建設に伴い初めて発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土した⁽¹⁾。その後、平成4年に行われた指宿国立病院職員官舎建設工事に伴う発掘調査では、縄文時代晚期から古墳時代にかけての遺物が出土している⁽²⁾。縄文時代晚期の遺物には、上加世田式、入佐式、黒川式、刻目突帯文などの数時期の土器をはじめ、扁平打製石斧、石皿、叩石等良好な資料が得られている。

（文責 渡部）

（1）『新番所後遺跡』鹿児島県教育委員会 1985

（2）『新番所後遺跡II』鹿児島県教育委員会 1992

第2節 確認調査に至る経緯と調査の概要

平成18年2月2日、株式会社ニシムタより、指宿市十二町42224番地をはじめとする付近一帯の範囲での新店舗の建設計画に伴い、「周知の遺跡地における土木工事等の届出」(93条)の提出があり、遺跡の有無についての照会があった。鹿児島県文化財課の指導に基づき、遺跡の有無とその詳細を把握するために、工事予定地について9ヶ所のトレーンチを設け確認調査を実施した。調査の概要は、下記のとおりである。

- 確認調査期間 平成18年2月23日～28日、3月14日～17日
- 調査面積 のべ90m²
- 調査担当 鎌田洋昭

層序	層名	出土遺物	遺構	1T	2T	3T	4T	5T	6T	7T	8T	9T
第1層	耕作土	磁器・陶器	イモ穴	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2層	褐色土層	無遺物層				○						
第4層a	中黒褐色帶	無遺物層			○	○					○	
第4層b	褐色土層	無遺物層				○					○	
第5層	紫コラ			○	○	○				○	○	
第6層	暗褐色土層	無遺物層		○	○	○				○	○	
第7層	青コラ			○	○	○			○	○	○	
第8層	黒褐色土層	無遺物層		○	○				○	○	○	
第9層	スコリア混在	成川式土器		◎	◎	○				○	○	◎
第11層	暗紫コラ			○	○			○			○	
第12層	褐色土層			○	○	○		○			○	
第13層	黒色土層	御文土器・石斧	ピット	◎	○	◎	○	◎	○	◎	◎	
第14層	茶褐色土層			○	○	○					○	
第17層	黄コラ			○	○	○	○	○	○	○	○	
第18層a	黒色土層	無遺物層		○	○	○	○					
第18層b	茶褐色土層	無遺物層		○	○	○	○	○	○			
第19層	シラス (池田カルデラ噴出物)			○	○		○	○	○	○	○	

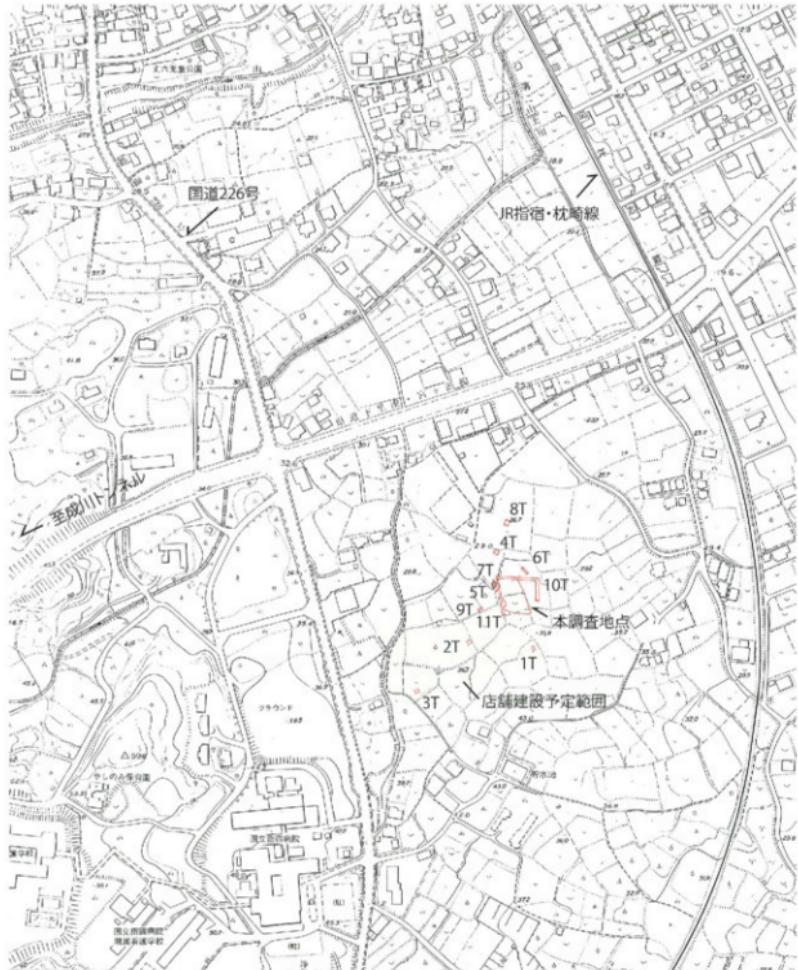
表1 確認調査結果一覧



第2図 調査地点図2 (S=1/100,000)

確認調査の結果、2・3・4・6・8・9トレンチにおいて、地表面から約1mから2mの範囲で遺物包含層を確認した。2・3・9トレンチでは古墳時代の遺物が若干出土、4・8トレンチでは縄文時代晚期の遺物が出土した。1・5・7トレンチでは、遺物・遺構は見られなかった。なお、6、9トレンチ出土の遺物は、いずれも細片で摩滅が激しく、周辺から流れ込んできたものと考えられる。1・5・6・7・9トレンチの状況については、表1、及び写真2～12を参照いただきたい。2・3・4・8トレンチの状況については、第3章で後述する。

(文責 渡部)



第3図 トレント位置図1 (S=1/1,250)

第2章 遺跡の層序

新番所後遺跡の層序は、開聞岳火山灰が鍵層となっている。基本的な堆積状況は、近接する橋牟礼川遺跡と同様であることから、橋牟礼川遺跡の基本層序に對比する形で層名を決定した。以下に今回の調査で確認した層について、橋牟礼川遺跡の基本層序と對比しながら記述する。



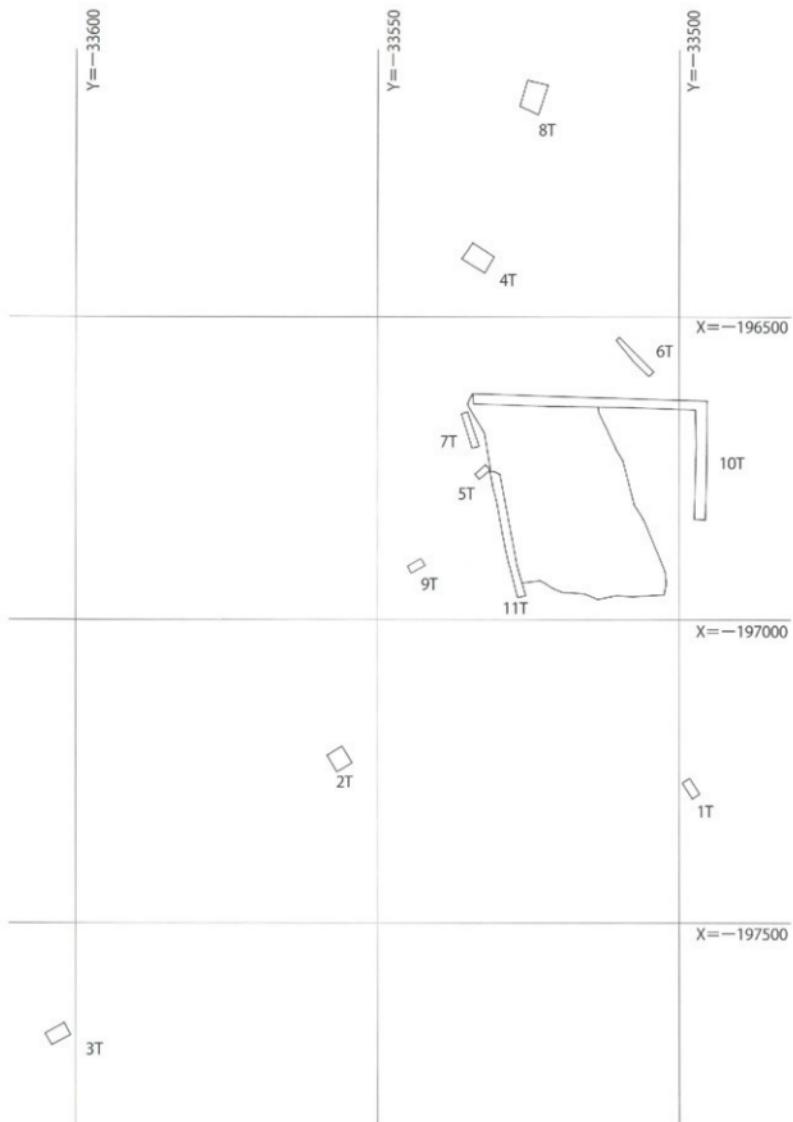
第4図 層位模式柱状図

第3章 調査の成果

第1節 2・3・4・8トレントの概要

1. 2トレント

1トレントから北西へ約60mの地点に4×5.5mの範囲で2トレントを設定し掘削した。表層から約1m掘削したところで、第5層を確認、以下、7層、11層、12層aの開聞岳火山灰を挟みながら、第9層、第13層より遺物の出土が見られた。第9層出土の成川式土器は、いずれも細片で摩滅しており、トレント周辺から流れ込んできたものと考えられる。また、13層出土の土器も頸部の細片で形式は特定できなかった。遺物の分布状況は第6図のとおりである。現地表より約2mのところで池田湖火山灰に達したため、その時点での調査を終えた。



第5図 トレンチ位置図2 ($S=1/800$)

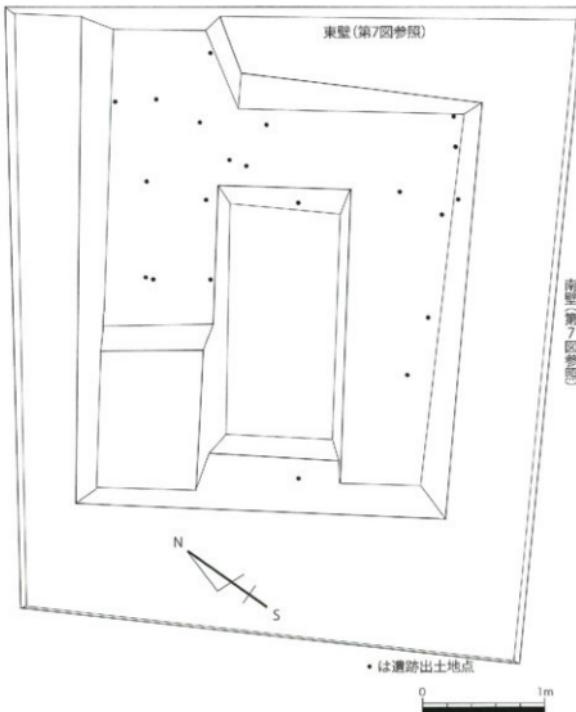
2. 3トレンチ

2トレンチから南西へ約60mの地点に $4 \times 5.5\text{m}$ の範囲で3トレンチを設定し掘削した。表層から約2m掘削したところで、第5層を確認、以下、2トレンチ同様に7層、11層、12層 a'の間開岳火山灰を挟みながら、包含層を確認した。第9層より2点の成川式土器の出土を見たが、いずれも細片で摩滅が激しい。トレンチ周辺から流れ込んできたものと考えられる。現地表より約3mのところで第13層を確認したが、第9層以外の包含層からは、遺物の出土はなかった。

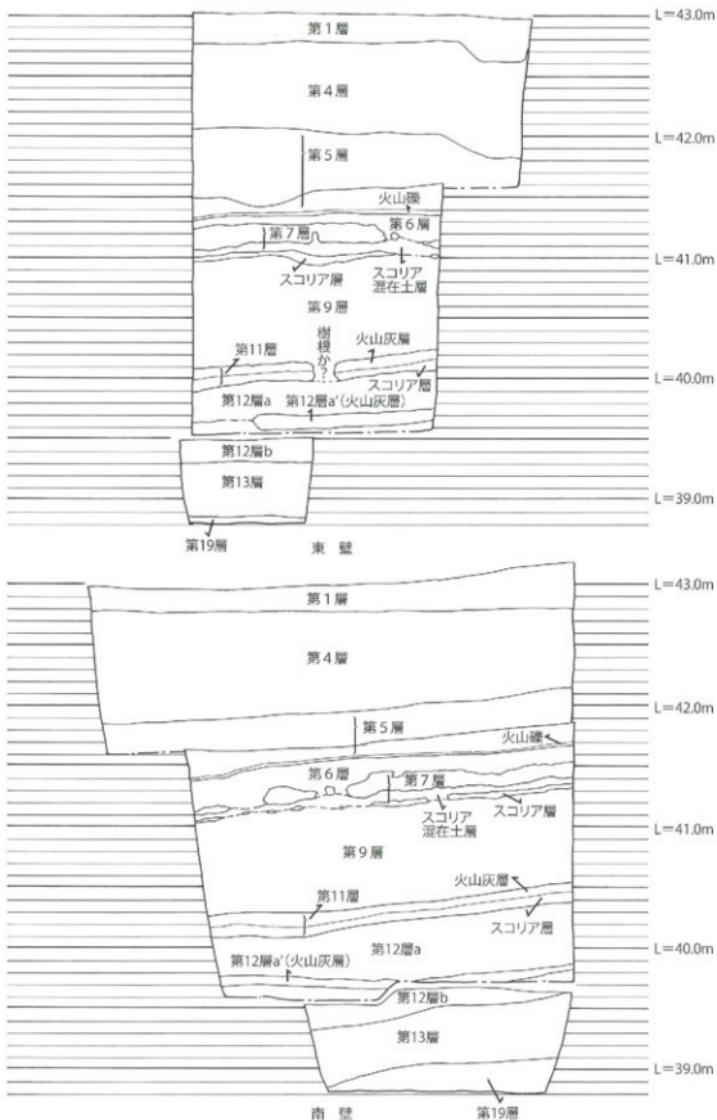
3. 4トレンチ

3トレンチから北東へ約170mの地点に $3 \times 4.5\text{m}$ の範囲で4トレンチを設定し掘削した。表層から約40cm掘削したところで、第5層を確認、以下、5層、7層、17層、19層の開岳火山灰を確認、第13層より土器片及び打製石斧の出土が見られた。また、13層を埋土とするピット2基を確認した(第9図参照)。ピット1は、13層の中程から約90cm掘り込まれ、底面は第19層に達していた。

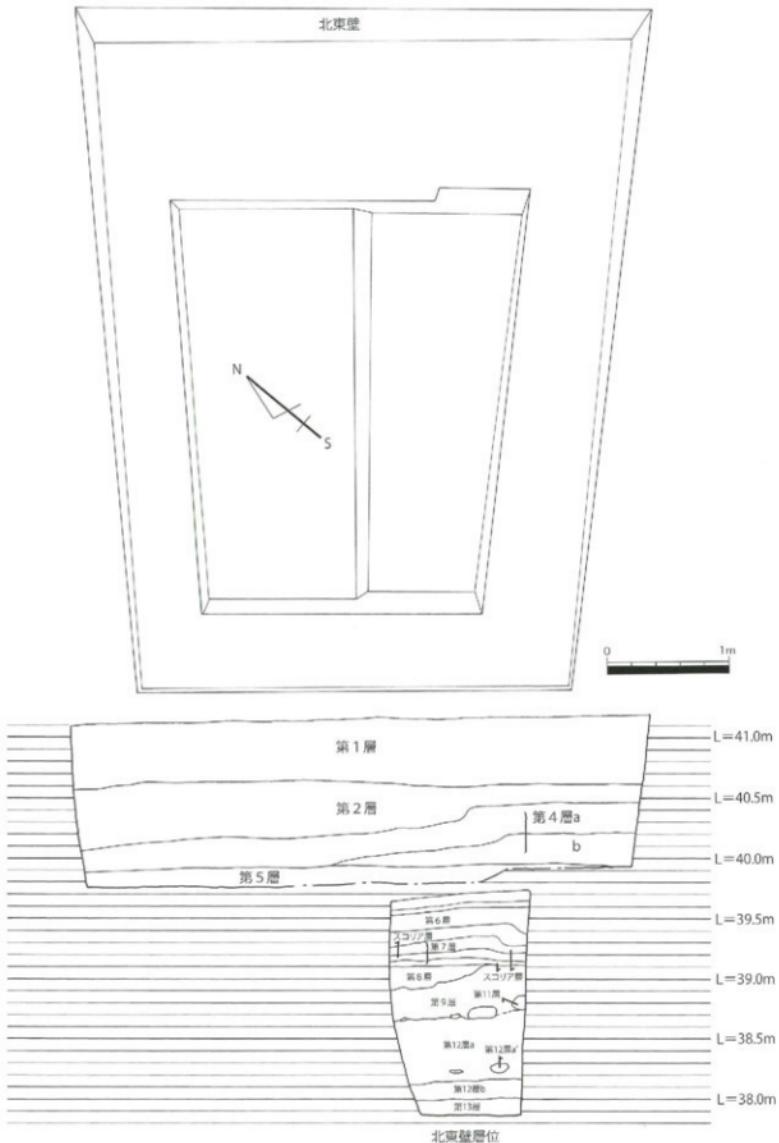
第10図No.1は、流紋岩製の扁平打製石斧である。両肩部に抉りが認められる形態を呈している。b面中央部には、素材剥片のボジ面が大きく残されている。刃部はやや尖頭状を呈し、使用による摩滅が認められる。



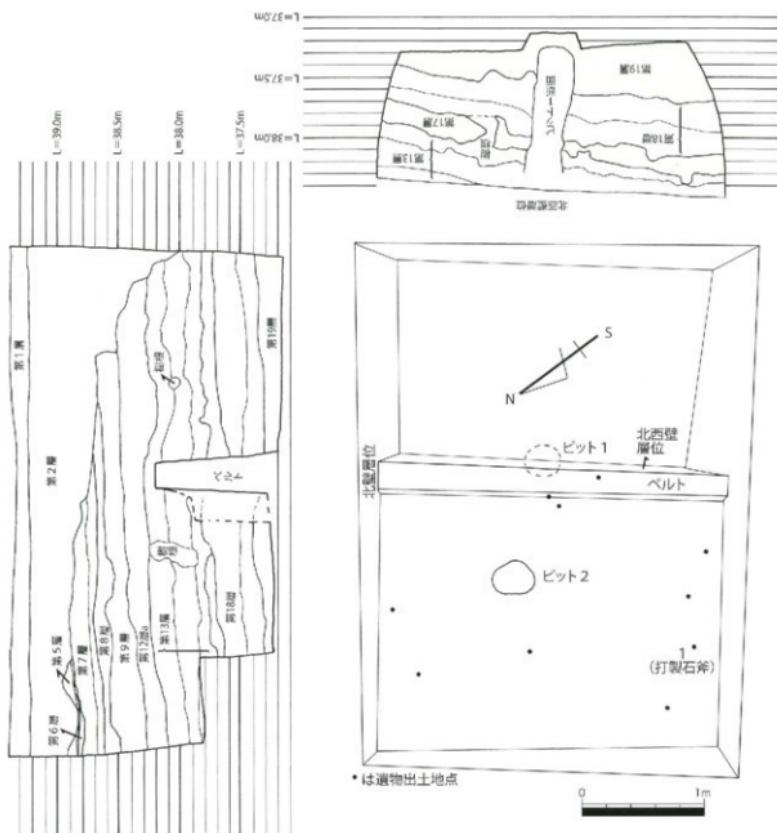
第6図 2トレンチ完掘状況図(S=1/40)



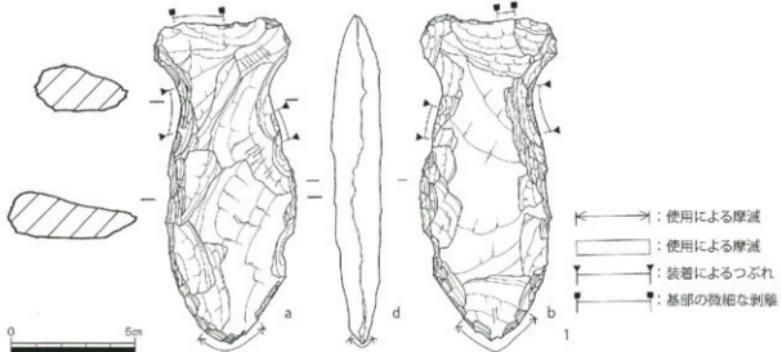
第7図 2トレンチ層位断面図(S=1/40)



第8図 3トレンチ完掘状況図及び層位断面図(S=1/40)



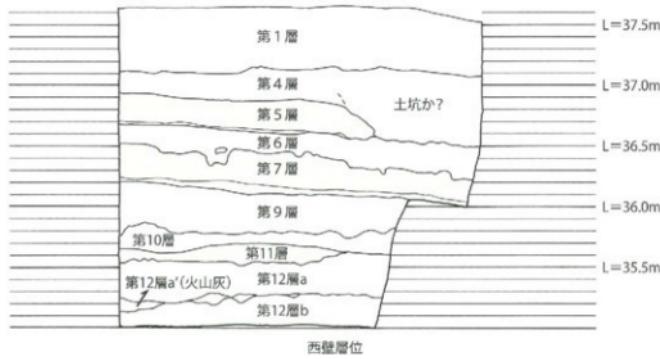
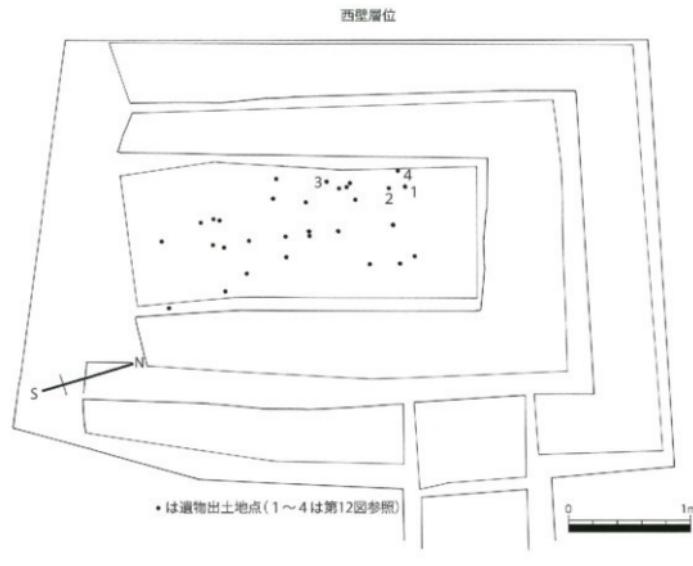
第9図 4トレンチ完全掘状況図及び層位断面図(S=1/40)



第10図 4トレンチ出土遺物実測図(S=1/2)

4. 8トレンチ

4トレンチから北東へ約24mの地点に $5 \times 3.5\text{m}$ の範囲で8トレンチを設定し掘削した。表層から約80cm掘削したところで、第5層を確認、以下、7層、11層、12層aの開聞岳火山灰を挟みながら、第13層より土器片の出土が見られた。層位、遺物の出土状況は第11図を参照されたい。以下に図化した4点を記す。



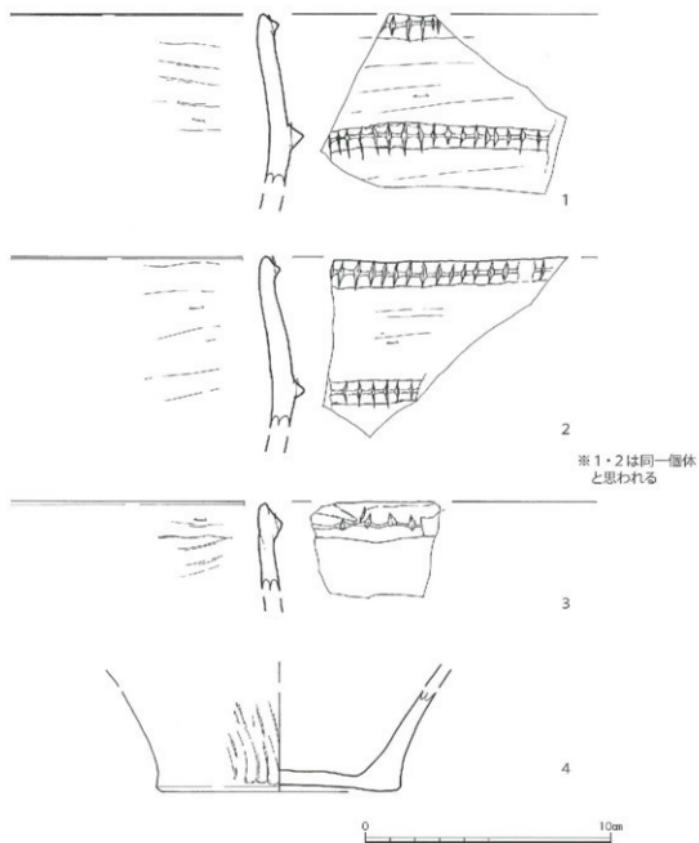
第11図 8トレンチ完掘状況図及び層位断面図(S=1/40)

第12図No. 1、2は、刻目突帯文上器の一群に属する深鉢の口縁部～突帯部の破片である。口唇部端部は丸みを帯びる。器形は、口縁部が直立からやや内傾するものと思われる。突帯部の刻み目は、幅の狭い板状の工具で鋭く施されている。接合はしないが、器形、色調、焼成の状況、刻み日の類似から同一固体と推測される。

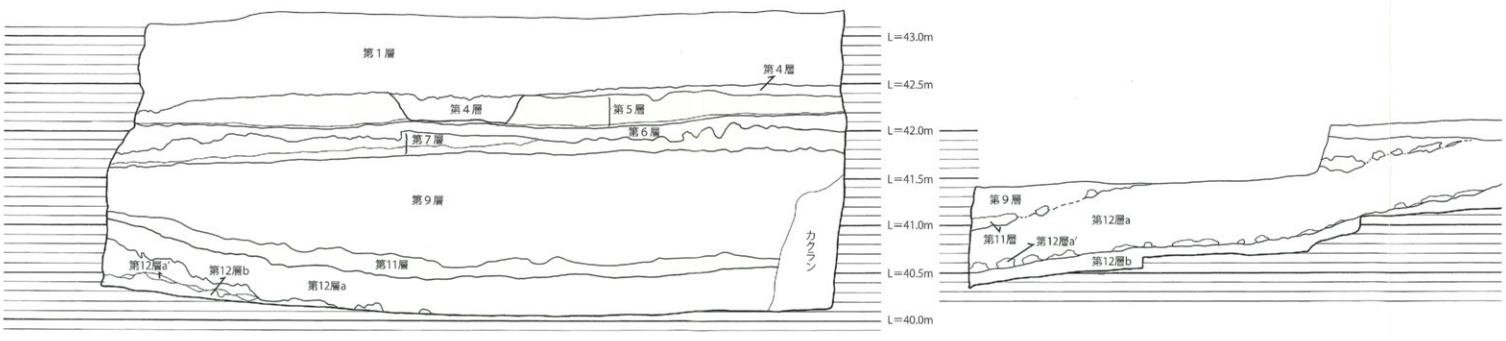
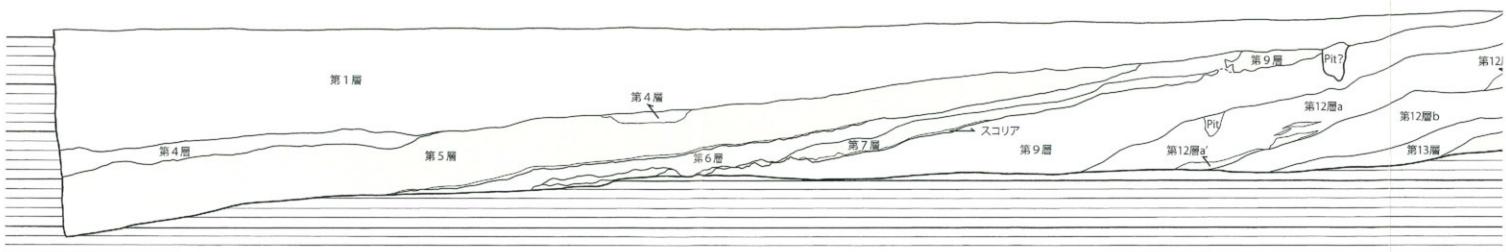
第12図No. 3は、刻目突帯文土器の一群に属する深鉢の口縁部の破片である。口唇部端部は丸みを帯びる。器形は、口縁部が直立からやや内傾するものと思われるが、破片が小さく判然としない。口縁部上位の内面には接合痕が残る。No. 1、2の刻み目と比べると、刻みが鈍く小さい、爪状の痕跡をみせるもので、指刻みを想起させる。

第12図No. 4は、深鉢の底部の破片である。底面は、わずかに上げ底状を呈し、やや開き気味に胴部へと続く。器壁は、5 mm前後と薄い。

(文責 渡部)



第12図 8トレンチ出土遺物実測図(5=1/2)



第13図 本調査地点層位断面図 (S=1/40)

■新番所後遺跡本調査編■

第1章 調査区の設定と調査の概要

確認調査の結果を受け、株式会社ニシムタと協議を行い、可能な限りの建設位置の変更を依頼した。当初計画より、建物の建設位置を変更するなど、遺跡地の保存を図るために協力をいただいたが、4・8トレーニングに近い建設予定範囲の北東隅部分については、工事によって破壊されるため本調査を実施することになった。

当初は調査面積を550m²で計画していたが、包含層の広がりに伴い最終的な調査面積は、約750m²となった。

■調査期間 平成18年5月15日～平成18年6月26日

■調査面積 約750m²

■調査担当 中摩浩太郎・渡部徹也

調査に当たり、まずは旧地形の状況を把握するために、本調査範囲の外辺に沿って10トレーニング、11トレーニングを設定し、重機により掘削した。その結果、旧地形は概ね南東から北西に向かって傾斜しており、かつ、調査区内には、丘陵部に入り込んだU字の谷地形が埋没している可能性がつかめた。

第12層bまで掘削した段階で、南西側丘陵上から弥生時代中期の土器が大量に廃棄された状況が見られた。谷地形に沿うような形で弥生中期に属するピット群を検出した。また、調査区北西部から、第12層bの上面で第9層を埋土とする古墳時代に属する竪穴式住居一軒を検出した。

(文責 渡部)

第2章 調査区の成果

第1節 古墳時代

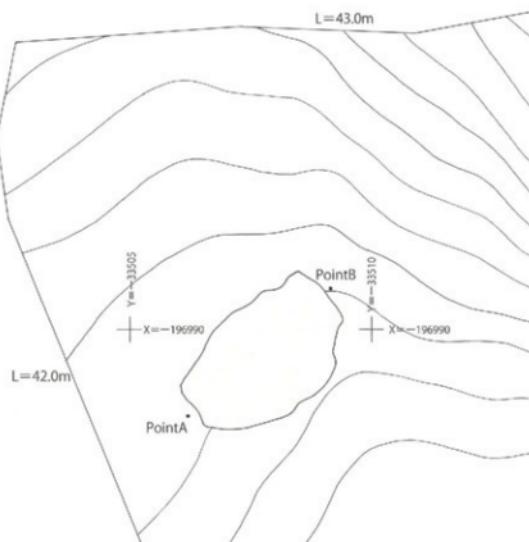
1. 造構について

竪穴住居跡(S K01)

9層中で検出した。北西に向かって傾斜するU字形の谷地形の東側斜面に立地するもので、調査区内ではこの1基のみが発見された。

長軸を略東西にとり、長軸3.5m、短軸2.35mの不整長楕円形を呈する竪穴に、主柱穴2(A,B)を有する。竪穴の深さは、検出面から30cm程度である。当初の掘り方に平均12cm程度の埋め土をし、床面を整形したものである。主柱穴は、斜面下側の壁面に接して設けられる。柱間は95.5cmである。

柱穴の間に、幅65cm・奥行き1



第14図 古墳時代竪穴式住居検出位置図(S=1/100)

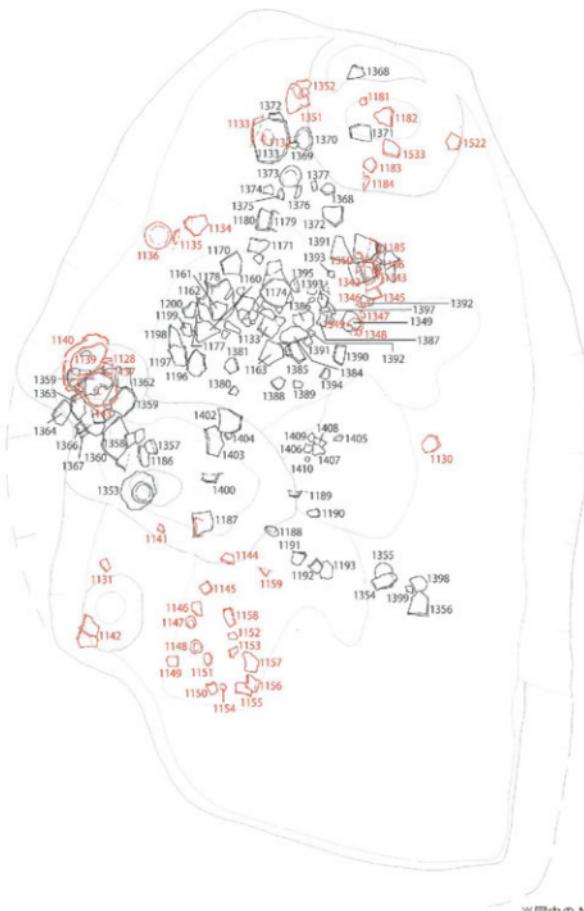
mの土坑炉が設けられる。叩き締められた炉面は、緩やかに壁面に向かって下っていき、最大で深さ18 cm程度となる。検出時に底部が赤変していた。炉床には、小ピットが1穴検出された。

炉の南隣には、深さ12 cm程度の浅い三角形の土坑が接して設けられている。埋土は灰混じりの土壤で



第15図 古墳時代竪穴式住居遺物出土状況図1 (S=1/20)

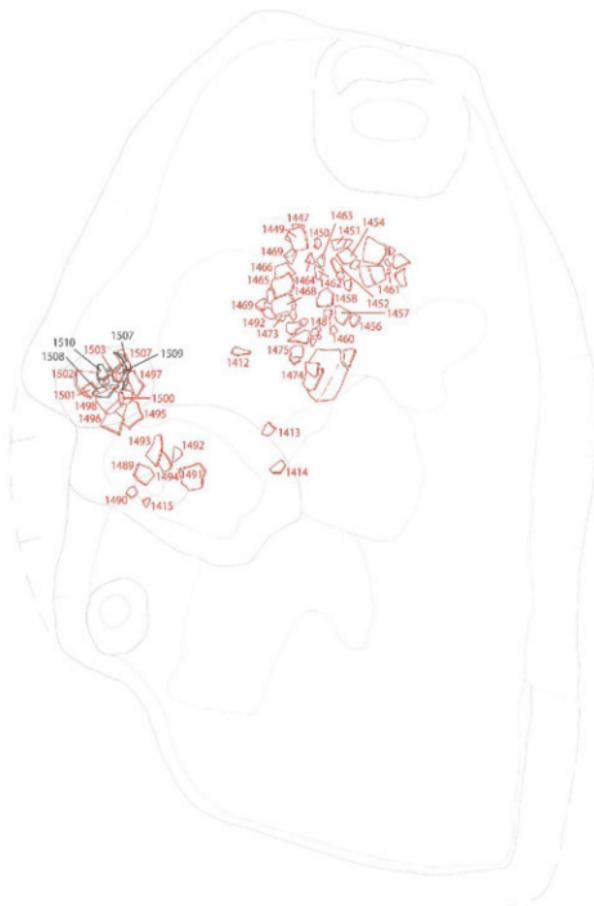
あり、「灰溜め穴」と見られる。土坑炉と灰溜め穴の東西の床面には貼り床が施されている。断面観察では径1 cm未満の小礫が9層土と12層土を合わせた土壤に混ぜ込まれ、叩き締められた貼り床層が1 cm程度見られた。床面の東隅には幅65 cm・奥行き63 cm・深さ37 cmの隅丸方形の土坑が設けられている。



※図中の No. は取り上げ No.

第16図 古墳時代竪穴式住居遺物出土状況図 2 (S=1/20)

さて、竪穴の形状は斜面上側の長辺が直線状であり、斜面下側の長辺は主柱穴に対して収斂されるような不整形な形状となる。平面形と柱配置から、この住居は傾斜を利用した片屋根の構造であったことが想定される。主柱穴は深さが、A 約 75 cm、B 約 35 cm と不揃いである。埋土は、傾斜上からの斜堆積であり、埋



※図中の No. は取り上げ No.

第17図 古墳時代竪穴式住居遺物出土状況図3 (S=1/20)

土中遺物は、埋土2中が多く、床面直上のものもある。埋土中遺物の帰属時期は、口縁が外反気味に直立する筐貫式の時期に比定できる。なお、埋土中出土遺物と後述する土器埋納遺構中の遺物の中に、受熱により変色したものがいくつか含まれていることに注意したい。

土器埋納遺構

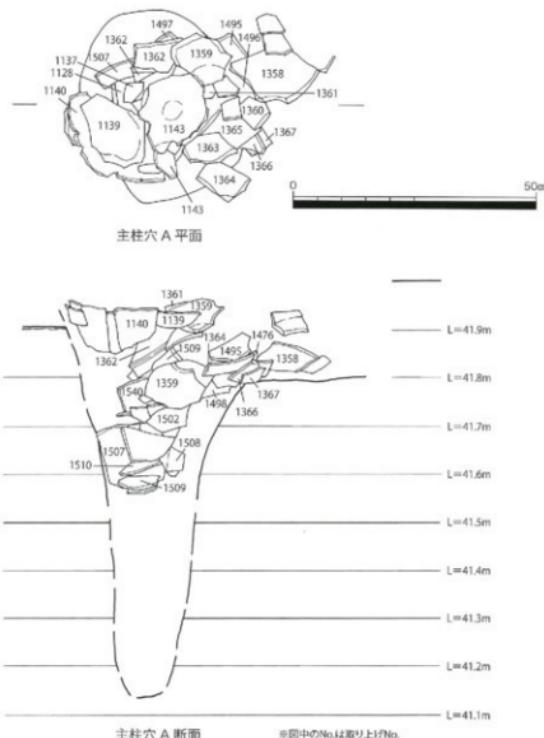
主柱穴には、土器埋納が行われている。埋納された遺物は、壺2(掲載番号18・33)・壺4(28・29・30・31)・高杯1(33)・碟1である。埋納方法は、例えば高杯33は、脚部を取り除き、杯部を口縁部と杯部に分割した上で、口縁部を土坑の底部に埋納、杯を土坑上部に逆位に置いている。壺は底部のみを埋納し、壺については、分割した底部を土坑最下部に正位に置いているものがあるとともに、胴部破片を土坑内に詰め込むような埋納方法をとっている。その後に、最上位に碟(取り上げNo.1139)を載せて埋納を完了している。

古墳時代における埋納遺構の例は、市内では向吉遺跡の事例があり、住居内の埋納の例として、姶良町の萩原遺跡の事例がある。これら

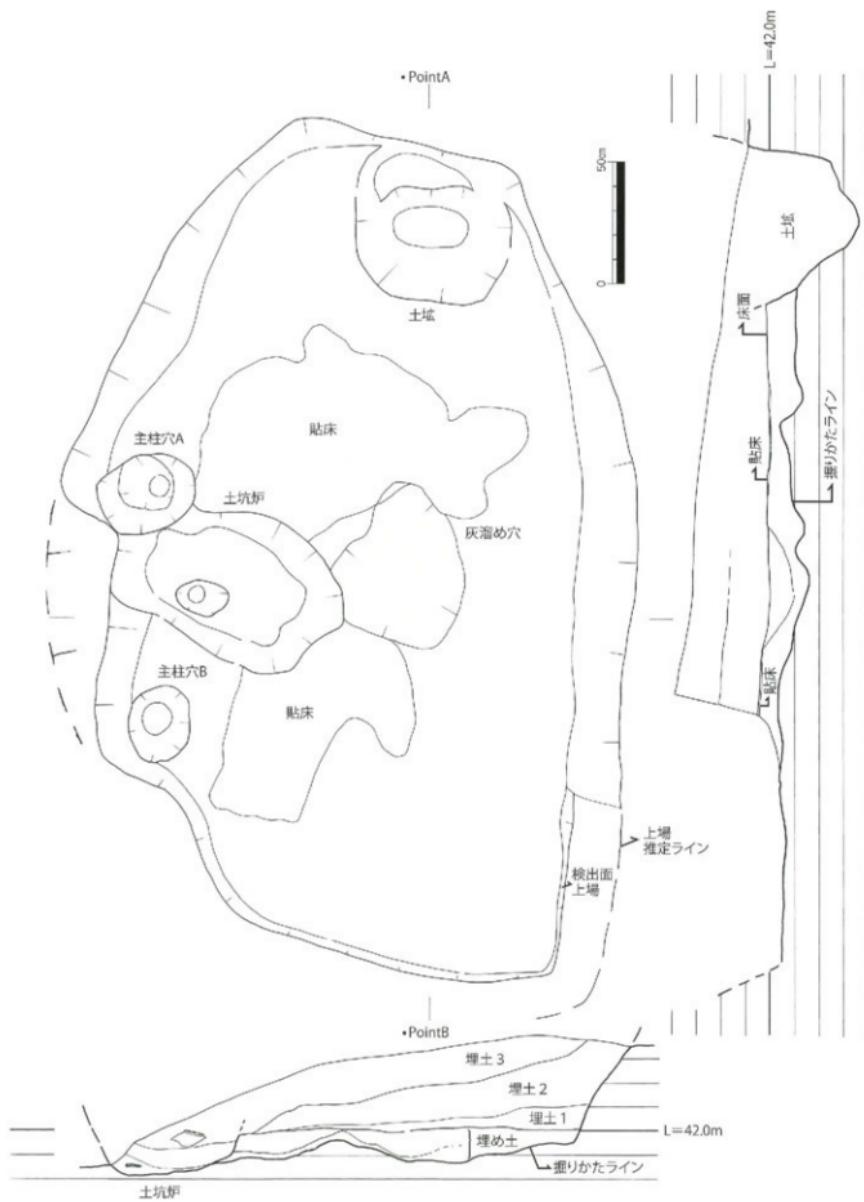
は土器を「四段重ね」状態で埋納しており、本例と異なっている。一方、向吉遺跡では、高杯の脚部をはずし、杯部のみを逆位に置く。萩原遺跡では壺形土器の底部のみを埋納するなど、土器本来の形状を壊した上で埋納している。今例でも共通している。ただ、埋納の最終段階で碟を設置する例は、他の事例では見られない。向吉遺跡においては、自然石等を円弧状に配列した中に埋納遺構が含まれている。よって、埋納祭祀が自然碟を用いた祭祀の一端を担ったことが起想される。今回の事例もこの延長上にあるものと言えるかもしれない。

さて、検出状況からは、埋土3が被覆する段階において埋納が行われたことが伺える。また、壺形土器は、筐貫式の形態を残しながら、口縁部が伸びており、住居内遺物よりやや時期的に下る可能性がある。

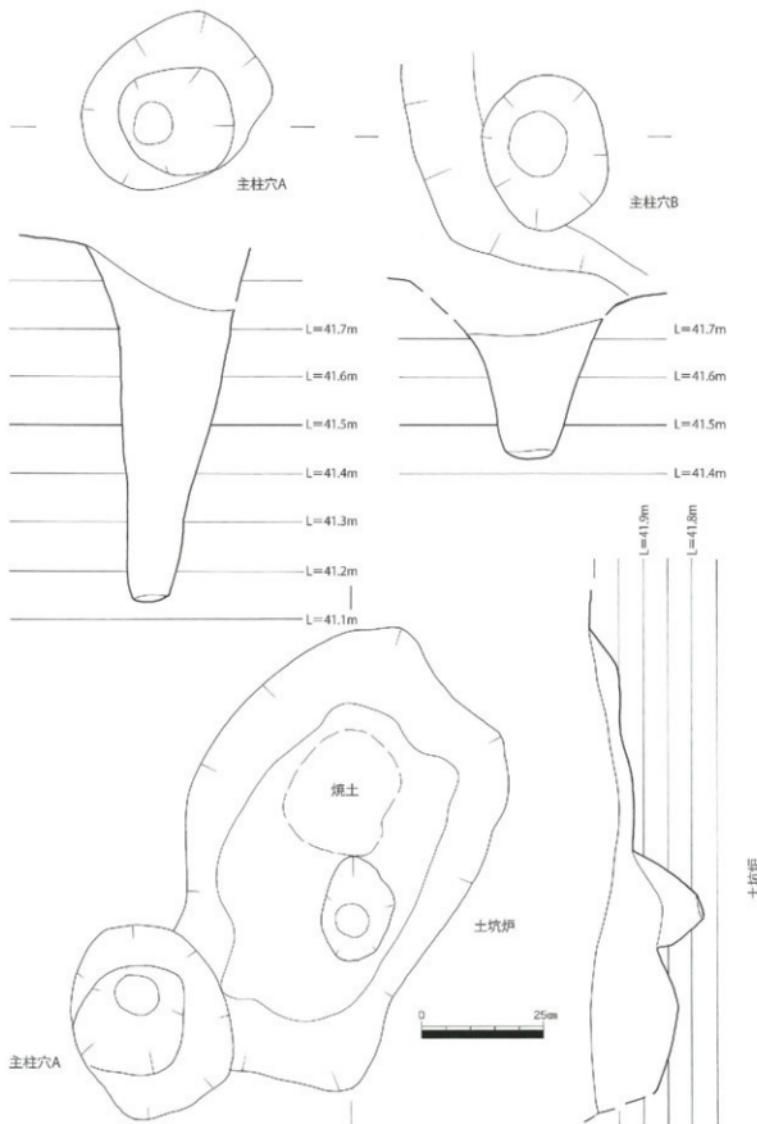
(文責 中摩)



第18図 主柱穴A内遺物埋納状況図(S=1/10)



第19図 古墳時代竪穴式住居平・断面図 ($S=1/20$)



第20図 古墳時代竪穴式住居主柱穴、及び土坑炉平・断面図(S=1/10)

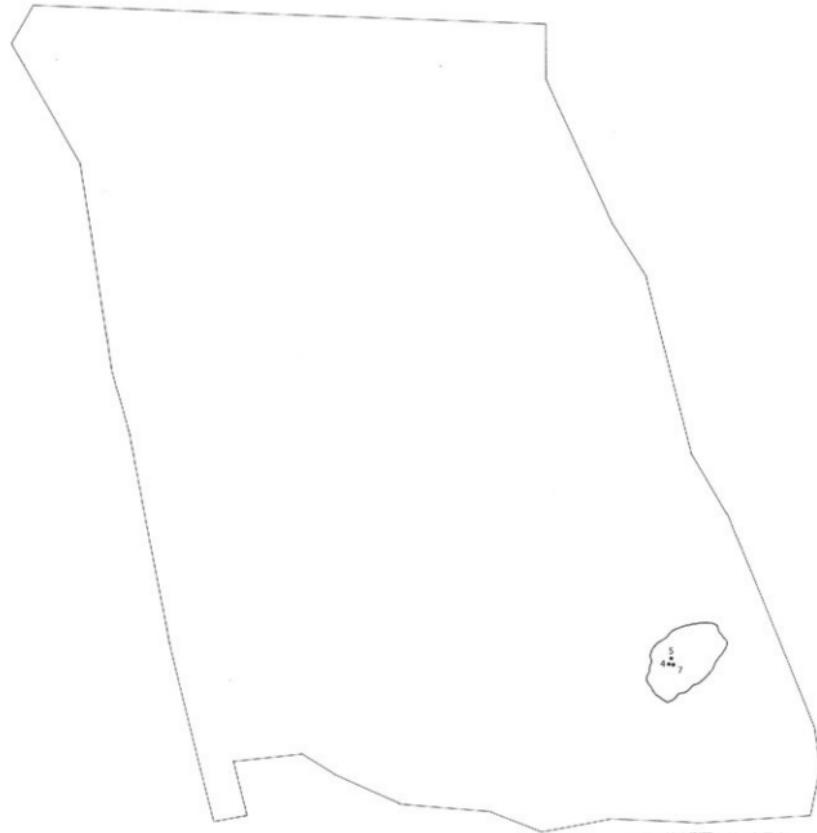
2. 遺物について

第9層は、成川式土器を主体とする包含層で、甕、壺、咲、高杯などが認められる。遺構埋土中からも多量の遺物が出土したが、残存部位や破片の大きさ、遺物の特徴を考慮し、34点を図化した。以下、包含層中出土遺物と埋土中出土遺物とに分けて記述する。

包含層中出土遺物

No. 1は、甕形土器の底部の破片である。底部は上げ底となる。

No. 2は、鉢形土器の底部の破片である。復元底径は、11.1 cmを測る。底部は平底で、器壁が厚く胴部に向かいラッパ状に開く。



※No. は実測値の No. を示す

第21図 古墳時代遺物出土状況(S=1/200)

No. 3は、鉢形土器の底部～胴部の破片である。復元底径は、7.6 cmを測る。底部は平底で、胴部に向かいラッパ状に開く。

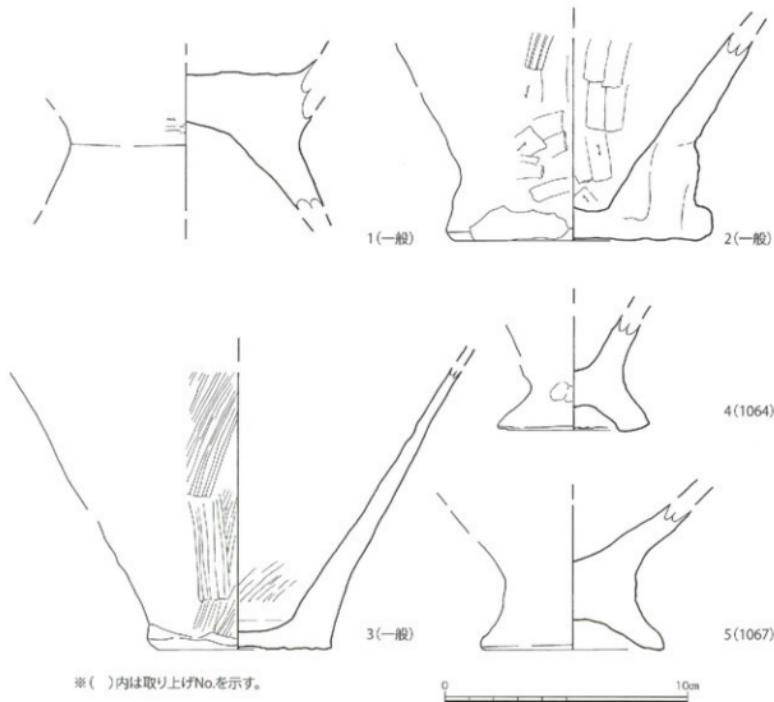
No. 4は、鉢形土器の底部の破片である。復元底径は、6.3 cmを測る。底部は上げ底で、見込み部の断面はカマボコ状を呈する。

No. 5は、鉢形土器の底部の破片である。復元底径は、7.7 cmを測る。底部は上げ底で、見込み部の断面はマウンド状を呈する。

竪穴式住居跡埋土出土遺物

No. 6は、菱形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は、30.1 cmを測る。口縁部はやや外反し、口唇部は、舌状をなす。口縁部下に一条の絡状突帯がめぐり、突帯の両端は、片方の端部が下に垂れて接しない。

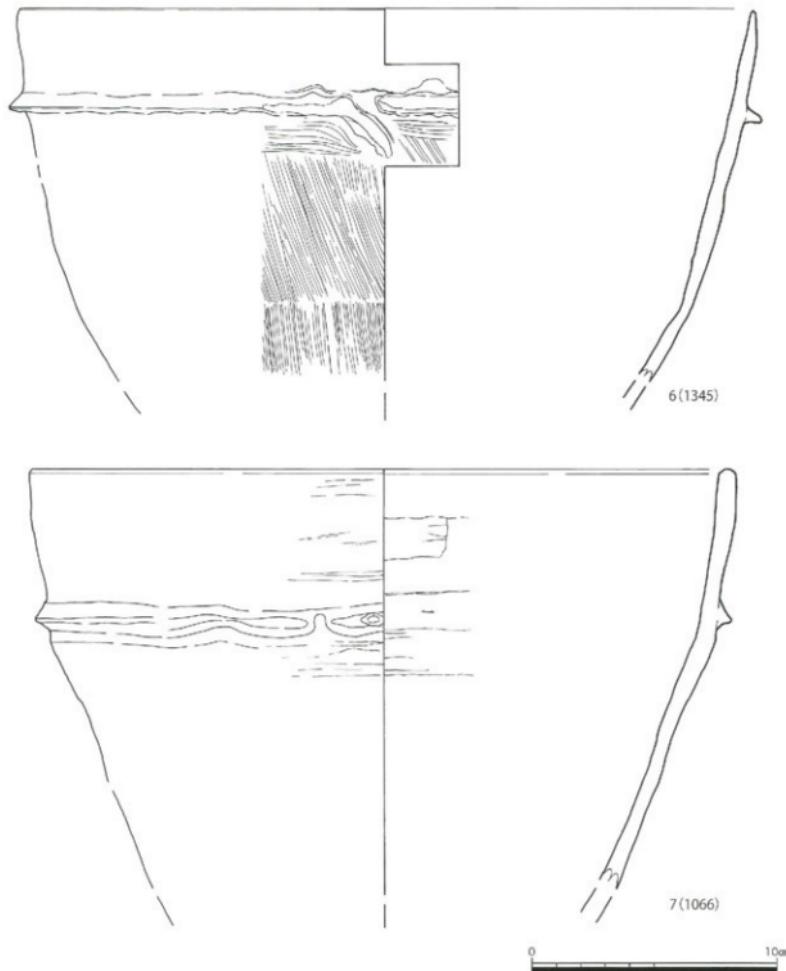
No. 7は、菱形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は、28.8 cmを測る。口縁部はほぼ直行する。口唇部付近は肥厚し、端部は丸みを帯びる。口縁部下に一条の絡状突帯がめぐり、一部途切れるところがある。



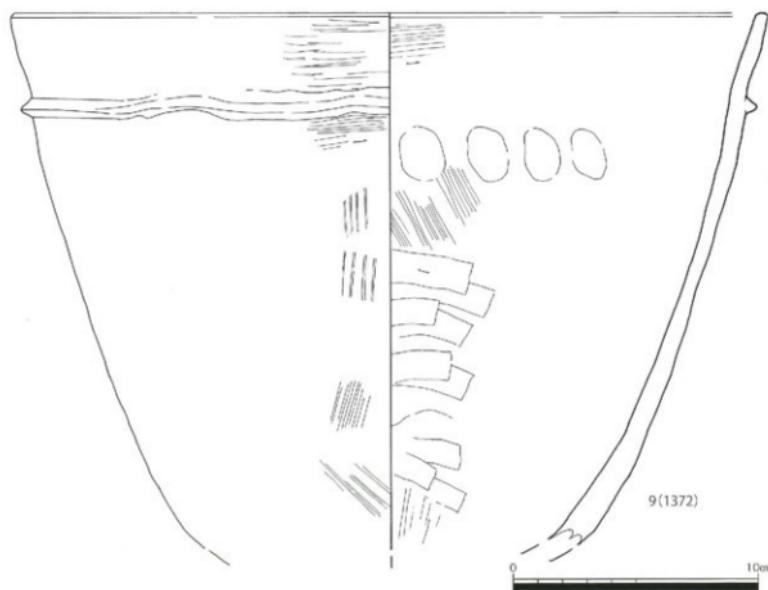
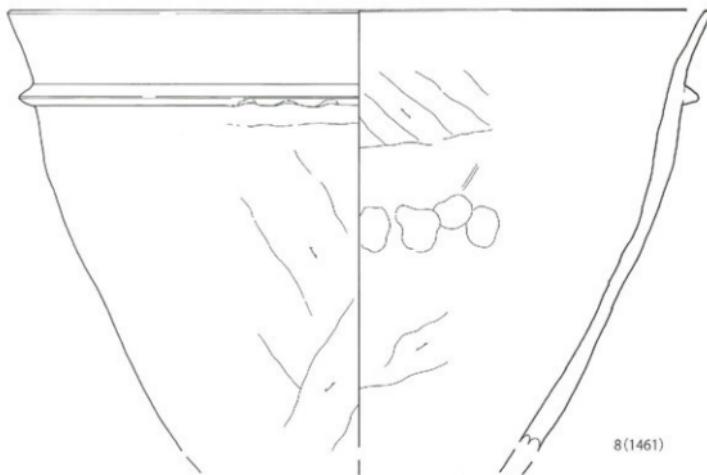
第22図 古墳時代出土遺物実測図(S=1/2)

No. 8 は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は、29 cmを測る。口縁部は外反し、口唇部は丸みを帯びる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。

No. 9 は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は30.8 cmを測る。口縁部は外反し、口唇部はやや丸みを帯びる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。受熱によるとと思われる変色が見られる。



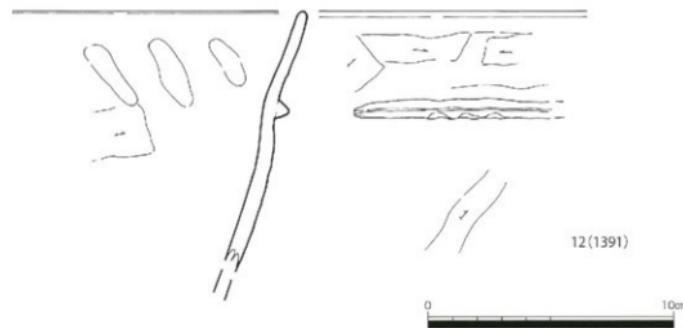
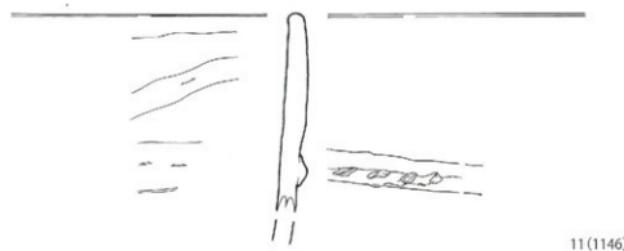
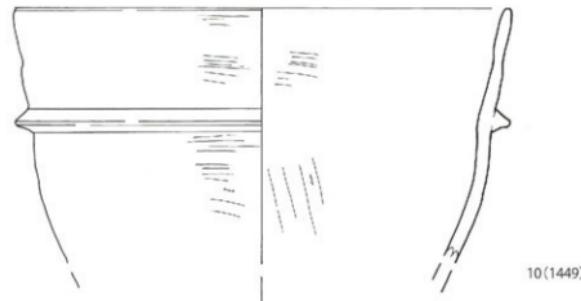
第23図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図①(S=1/2)



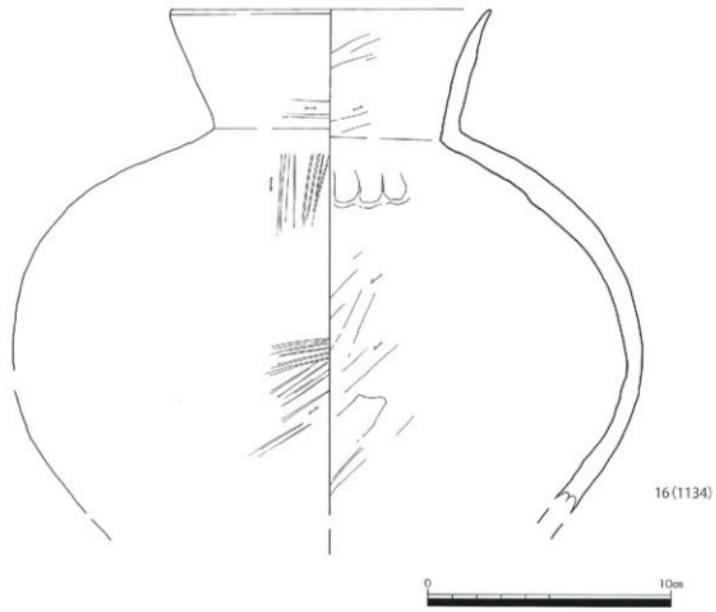
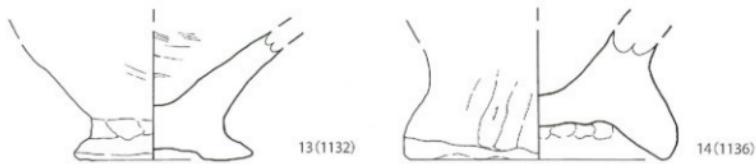
第24図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図②(S=1/2)

No.10は、甕形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は20.2 cmを測る。口縁部は小さく屈曲しながら外反し、口唇部はやや平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。受熱によると思われる変色が見られる。

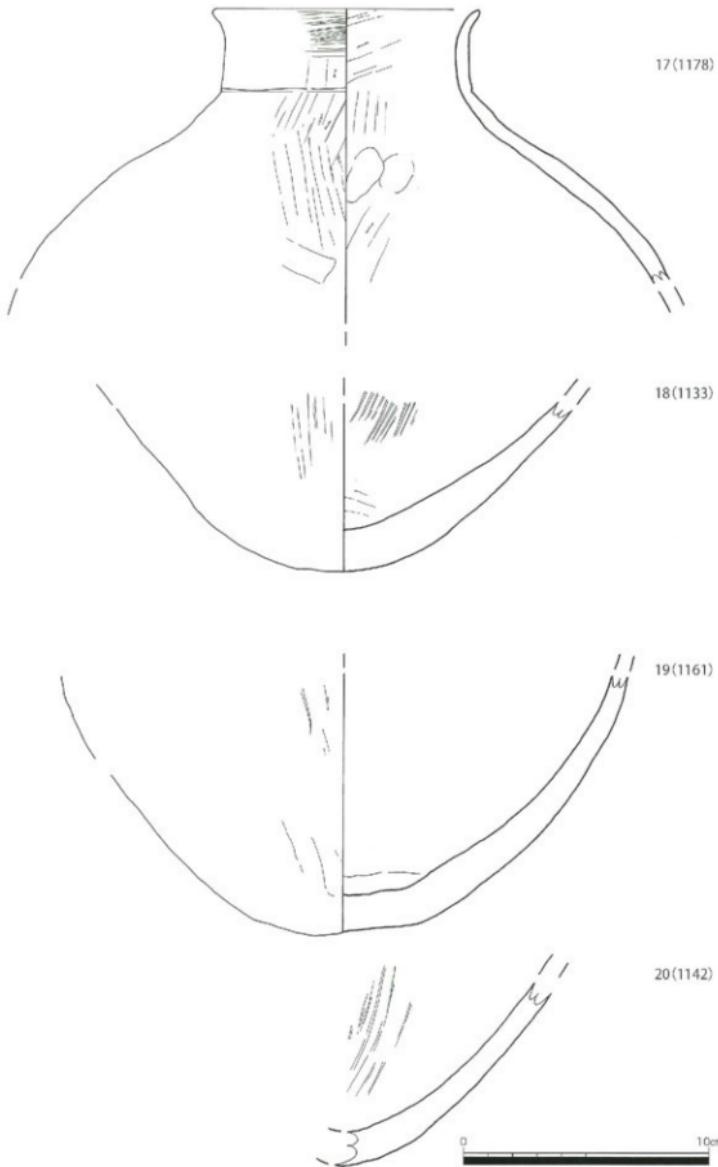
No.11は、甕形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はやや肥厚しながら直行し、口唇部は平坦となる。突帯にはキザミが施されている。



第25図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図③(S=1/2)



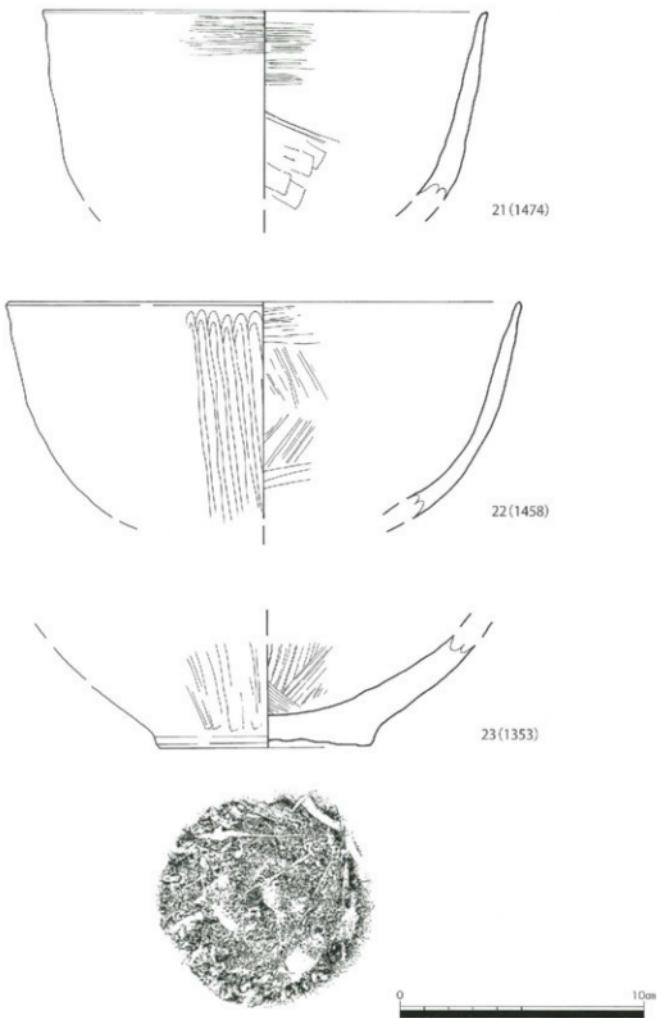
第26図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図④(S=1/2)



第27図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑤($S=1/2$)

No.12は、壺形土器の口縁部～突帯の破片である。口縁部は外反し、口唇部はやや丸みを帯びる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。

No.13は、壺形土器の底部の破片である。復元底径は、7.4 cmを測る。底部は浅い上げ底で、見込み部の断面は台形を呈する。



第28図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑥(S=1/2)

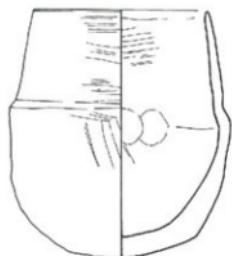
No.14は、壺形土器の底部の破片である。復元底径は、11.2 cmを測る。底部は浅い上げ底で、見込み部の断面は台形を呈する。

No.15は、壺形土器の底部の破片である。復元底径は、10.8 cmを測る。底部は平底で、見込み部の断面は台形を呈する。

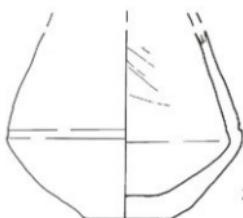
No.16は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は13.1 cmを測る。口縁部は外反し、口唇部は舌状となる。肩部はなだらかで、胴部が球形に膨らむ。

No.17は、壺形土器の口縁部～肩部の破片である。復元口径は10.9 cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部は舌状となる。短い頸部から屈曲してなだらかな肩部へと続く。

No.18は、壺形土器の胴部下半分から底部の破片である。底部は丸底で、胴部に向かい大きく膨らむものと推定される。



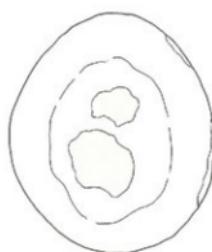
24(1354)



25(1344)



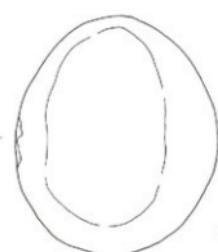
26(1411)



-



-



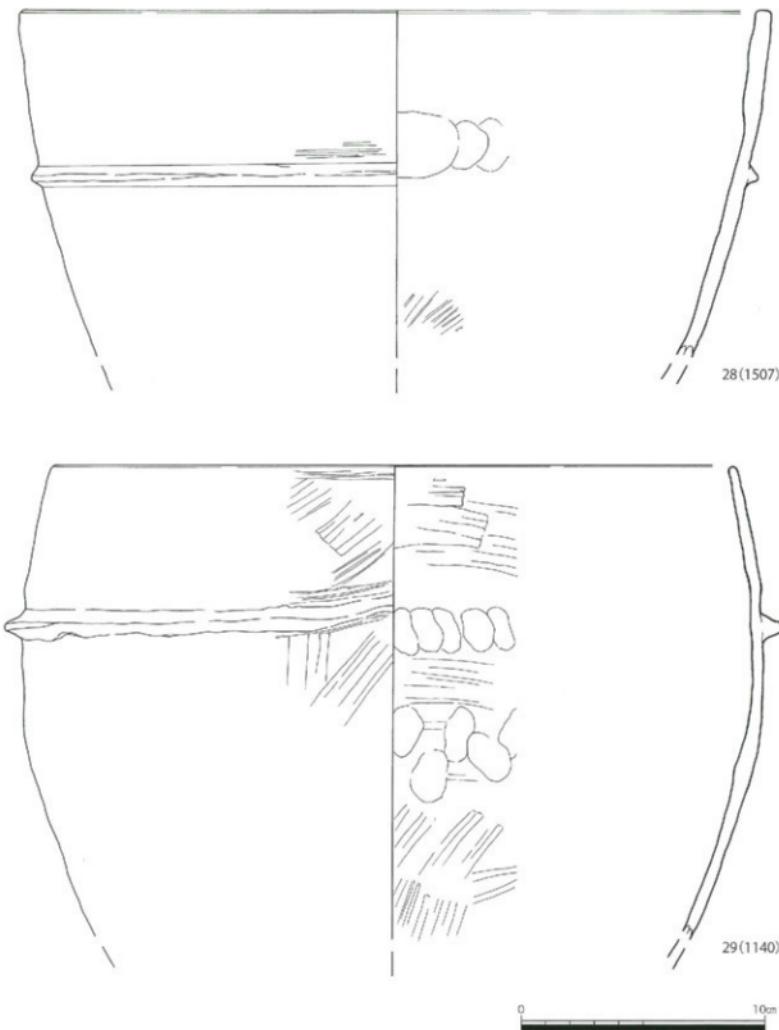
27(1373)



第29図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑦(S=1/2)

No.19は、壺形土器の胴部下半分から底部の破片である。底部は丸底だが、ゆがみがあり一部に平坦面をもつ。

No.20は、壺形土器の胴部下半分から底部の破片である。底部は丸底になるものと思われ、接地面はやや摩滅している。



第30図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑧(S=1/2)

No.21は、鉢形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は18.3 cmを測る。胴部から口縁部にかけて緩やかに開き、椀のような器形をなす。口唇部は舌状となる。

No.22は、鉢形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は21.2 cmを測る。胴部から口縁部にかけて緩やかに開き、椀のような器形をなす。口唇部は舌状となる。

No.23は、鉢形土器の底部の破片である。復元底径は、8.7 cmを測る。底部は浅い上げ底で、底面には植物圧痕が残る。

No.24は、埴形土器の略完形品である。口径7.2 cm、高さ10.2 cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は舌状となる。胴部に緩い屈曲が見られる。

No.25は、埴形土器の胴部～底部の破片である。復元底径は3.5 cm、胴部最大径は9.5 cmを測る。胴部は「く」の字に屈曲し、器形は、そろばん玉状になる。

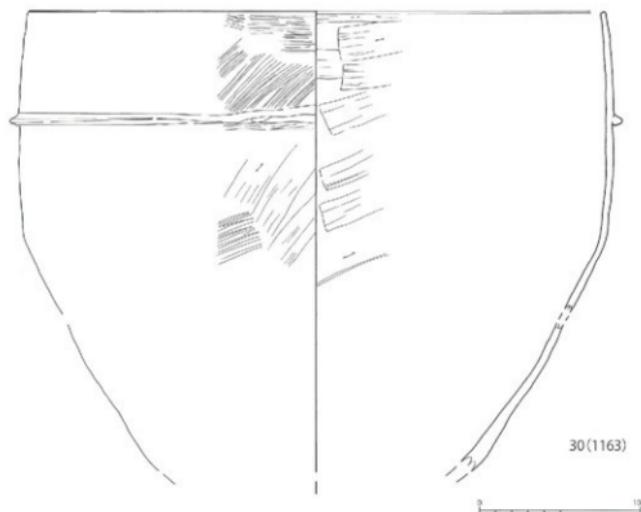
No.26は、高环形上器の環部と脚部の破片である。ミニチュア土器と思われ、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

No.27は、円礫を転用した磨石である。B面に磨面をもち、A面と側面には敲打痕が残る。長径9.8 cm、短径7.3 cm、厚さ5.2 cm、重さ600 gを測る。石材は安山岩である。

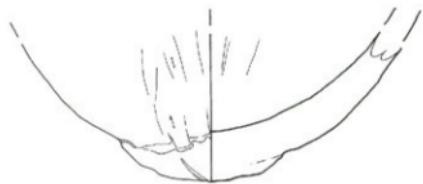
竪穴式住居跡付帯遺構埋土出土遺物

No.28は、張形土器の口縁部～突帯部の破片である。復元口径は、31 cmを測る。口縁部はほぼ直行し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の突帯がめぐる。

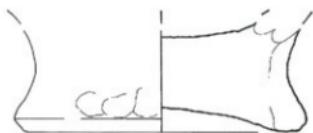
No.29は、張形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は28.3 cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の絶状突帯がめぐる。器壁が薄く仕上げられている。



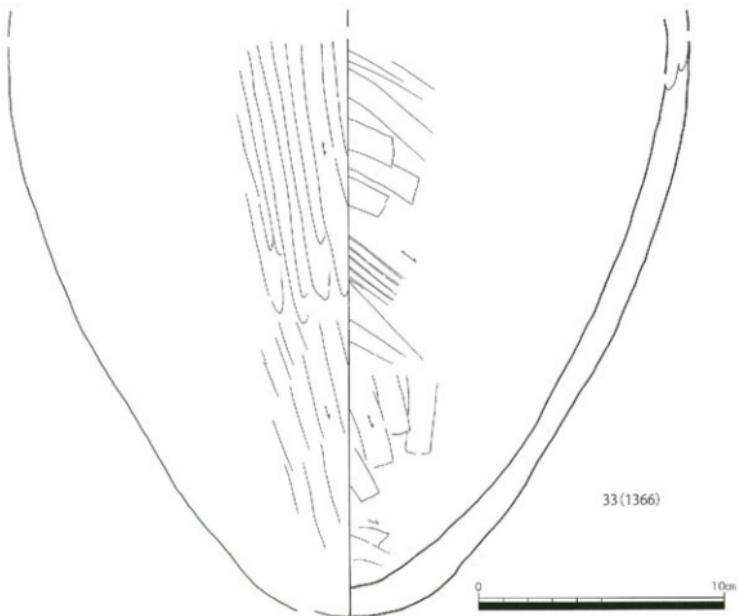
第31図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑨(S=1/3)



31(1147)



32(1509)



33(1366)

第32図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図⑩ (S=1/2)

No.30は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は36cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は平坦となる。口縁部下に一条の絶状突帯がめぐる。器壁が薄く仕上げられている。

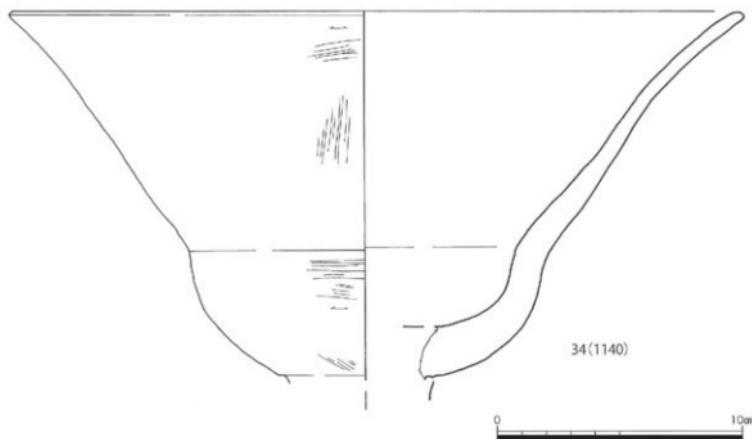
No.31は、壺形土器の底部の破片である。底部には粘土が貼り付けられ厚みが持たされている。

No.32は、壺形土器の底部の破片である。復元底径は、12cmを測る。底部は上げ底で、見込み部の断面はマウンド状を呈する。内外面ともに風化が著しい。

No.33は、壺形土器の胴部～底部の破片である。底部は丸底である。胴部は、大きく膨らまず、卵形を呈する。胴部最大径は、約28cmと推定される。

No.34は、高杯形土器の杯部の破片である。復元口径は、29cmを測る。杯部は丸みを帯びた楕形で外側に屈曲して大きくラッパ状に開く口縁部へと続く。内外面に受熱によると思われる変色が見られる。

(文責 渡部)



第33図 古墳時代竪穴式住居出土遺物実測図①(S=1/2)

品目	区分	品名	規格	単位	数量	原産地	販路	取扱店	販路	取扱店
1 一般	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	2,318/3 3,325/2 1,018/2 箱	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・ナフ 内・ヨウナフ	内・ナフ 内・ヨウナフ	内・ナフ	内・ナフ
3 一般	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	7,316/2 1,018/2 7,316/2 箱	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
2 一般	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	3,193/4 2,105/2 1,018/2 箱	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
4 1061	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	7,024/2 7,024/2 7,024/2 箱	新規取扱い 7,024/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
5 1067	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	3,194/2 3,325/2 1,018/2 箱	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
6 1315	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	1,018/2 7,024/2 1,018/2 箱	新規取扱い 7,024/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
7 1556	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	2,318/2 3,325/2 1,018/2 3,325/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・ナフ 内・ナフ 内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
8 1611	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	2,105/2 3,325/2 1,018/2 2,105/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
9 1372	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	7,318/2 7,318/2 1,018/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
10 1149	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	0,955 1,018/2 1,018/2 7,024/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・ナフ 内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
11 1166	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	0,955/1 1,018/2 1,018/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
12 1301	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	3,324/3 3,325/2 1,018/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
13 1370	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	0,955 1,018/2 1,018/2 2,105/2	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
14 1136	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	0,954/2 1,018/2 1,018/2 7,024/2	新規取扱い 7,024/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
15 1199	便所用具 （洗面用具）	鏡片	通常	7,316/2 7,318/2 1,018/2 箱	新規取扱い 100/2/3	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
16 1134	便所用具 （洗面用具） 手洗	鏡片	通常	1,018/2 1,018/2 1,018/2 3,325/2	新規取扱い 100/2/3 13,325/2 13,325/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
17 1178	便所用具 （洗面用具） 手洗	鏡片	通常	2,318/4 1,018/2 1,018/2 3,325/2	新規取扱い 100/2/3 3,325/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
18 1133	便所用具 （洗面用具） 手洗	鏡片	通常	2,318/4 2,318/4 1,018/2 2,318/2	新規取扱い 100/2/2 3,325/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
19 1181	便所用具 （洗面用具） 手洗	鏡片	通常	2,318/4 2,318/4 1,018/2 2,318/2	新規取扱い 2,318/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ
20 1142	便所用具 （洗面用具） 手洗	鏡片	通常	3,324/4 2,318/4 1,018/2 3,325/2	新規取扱い 100/2/3 3,325/2	セ・ナ ロ・ヨウ	内・エトシによるナフのナナフ 内・エトシによるナフナフ	内・ナフ	内・ナフ	内・ナフ

表2 古墳時代遺物觀察表1

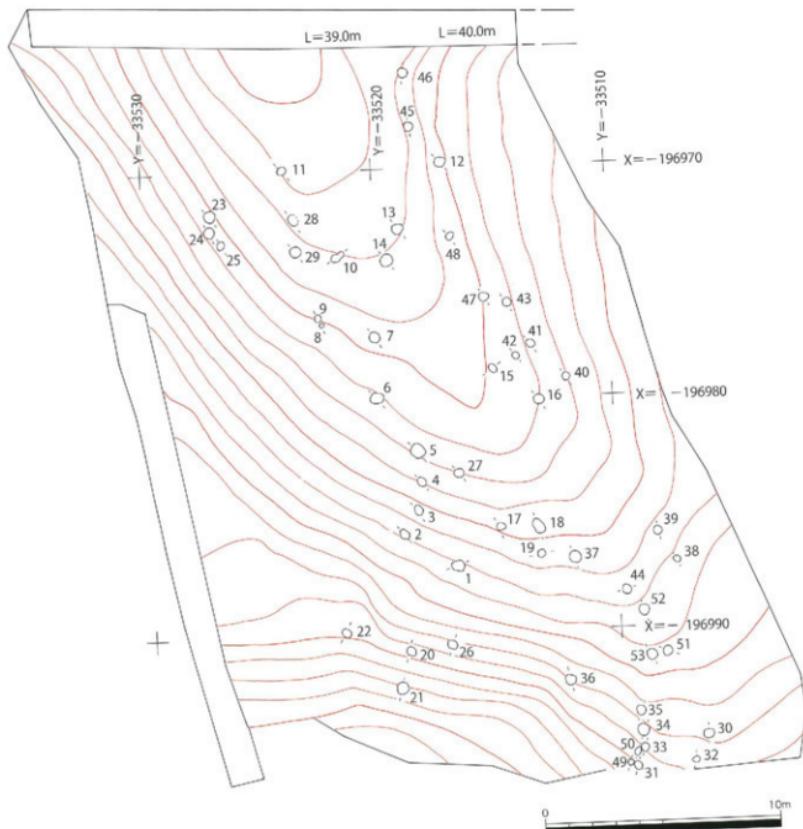
品目	区分	保存状態(良)	区分	区分	区分	区分	区分	区分	区分	区分	区分	区分	区分	区分
21 1474 鋼製土器 (底・内)	底片 1/1残存	口縁部 一側破	1985/4	1985/5	1.3984/2	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・コロナ 工具は1.6ミリのもの 内・コロナ ナ・ナ	良好	300(馬上)					
22 1488 鋼製土器 (底・内)	底片 1/1残存	口縁部 一側破	1985/4	1985/4	1.3984/1	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・コロナ 工具は1.5ミリのもの 内・コロナ ナ・ナ	良好	146(馬上)	146(馬上)	146(馬上)	146(馬上)	146(馬上)	
23 1553 鋼製土器 (底・内)	底片 底/1残存	底	1986/1	1986/4	1.4010/3	底 鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ハマナ 内・ハマナ・コロナ 底・鋸歯状合のもの	良好	300(馬上)					
24 1554 鋼製土器	底片 1/1残存	口縁部 一側破	1985/4	1987/6	1.3935/4	内 1985/5	形狀不規 合・底脚 鋸歯状	セ・セ・白 内・工具によるナガのもの 内・ビニールシート 工具によるナガのもの ナ・ナ	良好	138(馬上)	138(馬上)	138(馬上)	138(馬上)	138(馬上)
25 1549 鋼製土器	底片 1/1残存	口縁部 底	1.3984/2	1985/1	1.4010/3	底 2.075/1	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ	良好	300(馬上)				
26 1411 フコサツ 土器 高脚土器 (底・内)	底片 底/1残存	底	1980/3	2.353/2	1.3985/2	2.3535/2	底 鋸歯状合	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ	良好	300(馬上)				
■1. P(馬) 純錫 重(kg) 通量 (ml) 量(g)														
27 1373 脊冠 長: 9.4cm 幅: 3.2cm 厚: 3.2cm														300(馬上)
■2. J(馬) 純錫 重(kg) 通量 (ml) 量(g)														
28 1567 鋼製土器 (底・内)	底片 1/1残存 ~破片	1985/1 ~破片	1985/1	1984/2	1.3987/3	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ	良好	147(馬上)	147(馬上)	147(馬上)	147(馬上)	147(馬上)	147(馬上)
29 1110 鋼製土器 (底・内)	底片 1/1残存 ~破片	1.3845 ~破片	1984/2	2.4335/6	2.4335/5	2.4335/6	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ	良好	114(馬上)	114(馬上)	114(馬上)	114(馬上)	114(馬上)
30 1163 鋼製土器 (底・内)	底片 1/1残存 ~破片	2.3355/1	2.3355/4	2.3355/4	2.3355/4	2.3355/4	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・工具によるナガのもの 内・ナダ 工具によるナダのもの 内・ナダ 内・ナダ	良好	113(馬上)	113(馬上)	113(馬上)	113(馬上)	113(馬上)
31 1141 鋼製土器 (底・内)	底片 1/1残存 ~破片	1985/3	2.3355/4	2.3355/2	底 2.3355/2	1985/2	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・工具によるナガのもの 内・ナダ 内・工具によるナダのもの 内・ナダ 底付付属品	良好	114(馬上)	114(馬上)	114(馬上)	114(馬上)	114(馬上)
32 1559 鋼製土器 底片 1/1残存 ~破片	底片 1/1残存 ~破片	1984/2	2.3355/4	2.3355/7	底 2.3355/7	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ	不良 底付	300					
33 1396 鋼製土器 底片 1/1残存 ~破片	底片 1/1残存 ~破片	2.3355/1	2.3355/4	2.3355/7	底 1.3985/2	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ	良好	300	148(馬上)	148(馬上)	148(馬上)	148(馬上)	148(馬上)
34 1140 高脚土器 (底・内)	底片 1/1残存 ~破片	1985/4	1985/4	1.3987/3	鋸歯状合 せ	セ・セ・白 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ 内・ナダ	良好	144(馬上)	144(馬上)	144(馬上)	144(馬上)	144(馬上)	144(馬上)	

表3 古墳時代遺物観察表2

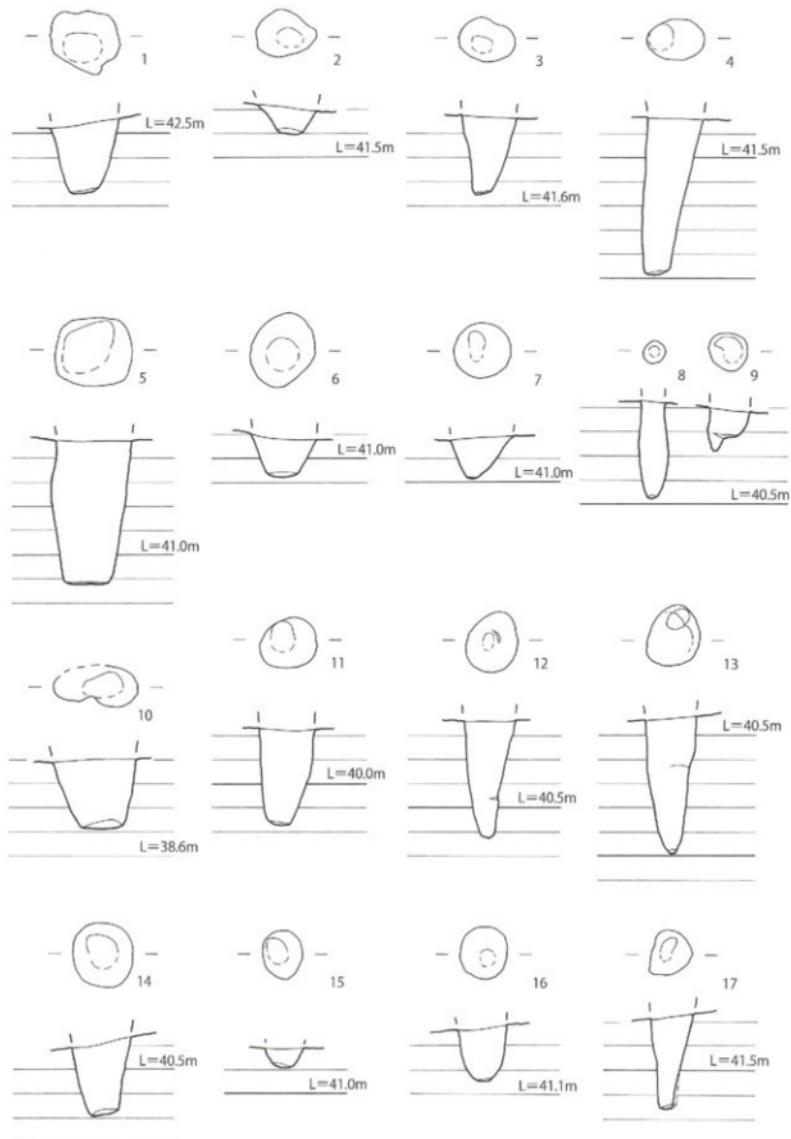
第2節 弥生時代

1. 遺構について

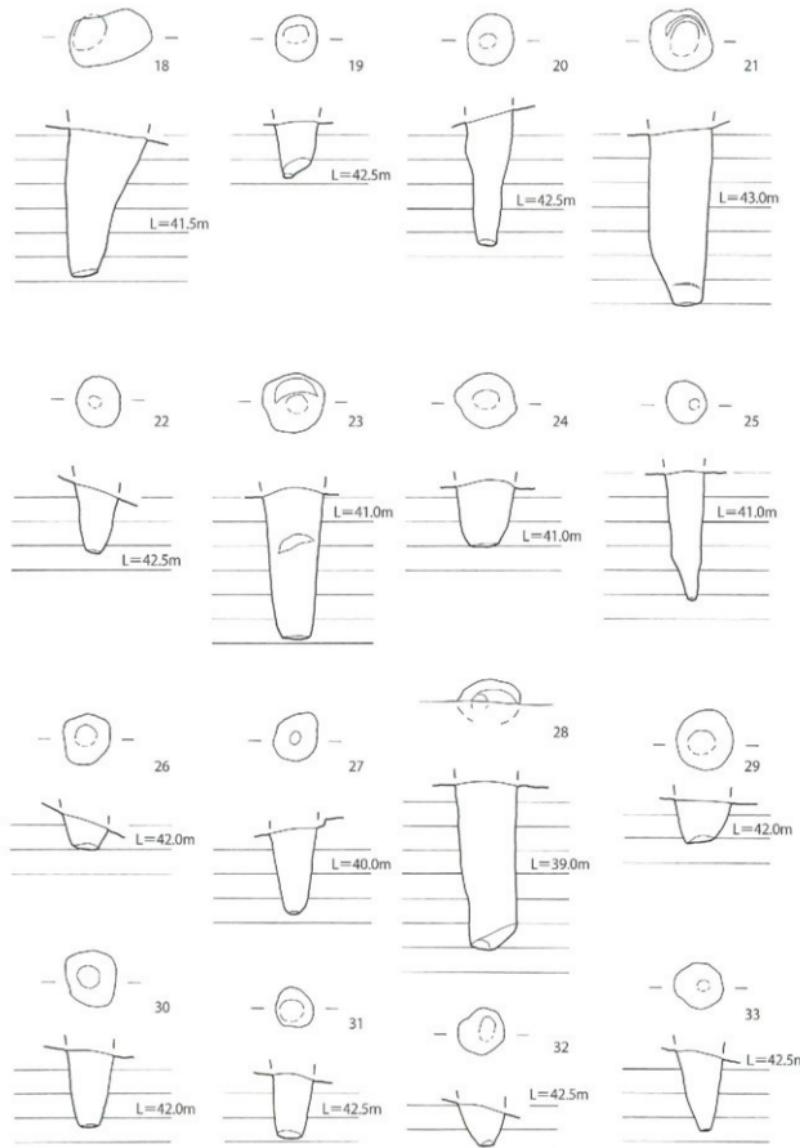
第12層b、並びに第13層まで掘り下げた時点で、上面で第12層aを埋土とするピット53基を確認した。ピットは、谷の中心部分を挟みおよそ2列に並ぶように見受けられ、これが丘陵部に近づくにつれ、西側にずれる傾向も看取される。例えば、谷の中心を挟んだ西側を見ると、調査区北側から、No11—No28—No29—No10—No9—No8—No7—No6—No5—No4—No3—No2の列を想定できる。また、反対の東側



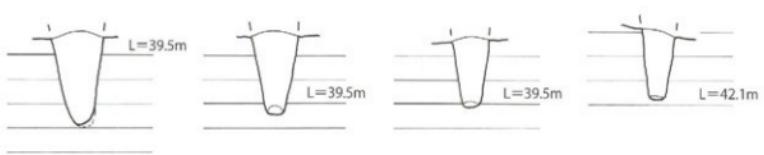
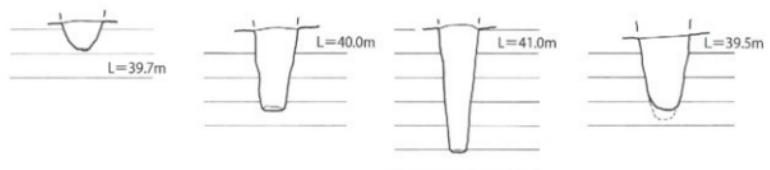
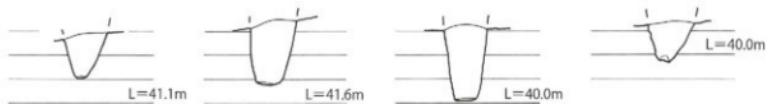
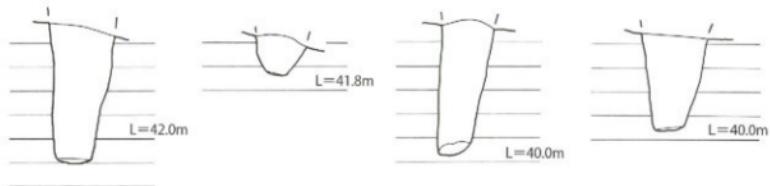
第34図 弥生時代ピット検出状況図 (S=1/200)



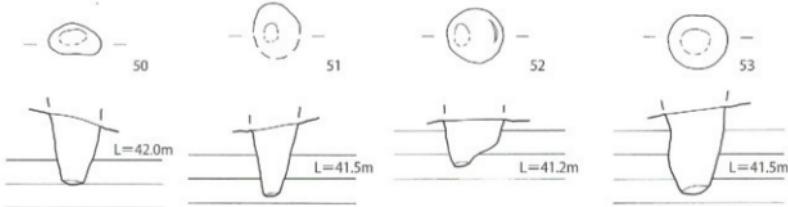
第35図 弥生時代ピット平・断面図① (S=1/20)



第36図 弥生時代ピット平・断面図②(S=1/20)



第37図 弥生時代ピット平・断面図③(S=1/20)



第38図 弥生時代ピット平・断面図④(S=1/20)

No	長(cm)	幅(cm)	深(cm)
1	3 0+α	2 6+α	2 8+α
2	2 5+α	1 9+α	1 0+α
3	2 3+α	1 8+α	3 2+α
4	2 4+α	1 7+α	6 5+α
5	3 3+α	3 1+α	5 9+α
6	3 1+α	2 6+α	1 6+α
7	2 3+α	2 3+α	1 7+α
8	1 0+α	9+α	4 0+α
9	1 8+α	1 5+α	1 8+α
10	3 5+α	1 3+α	2 9+α
11	2 3+α	1 2+α	3 9+α
12	2 6+α	2 1+α	4 8+α
13	2 6+α	2 1+α	5 6+α
14	2 8+α	2 5+α	2 9+α
15	2 0+α	1 6+α	8+α
16	2 2+α	2 0+α	2 2+α
17	2 0+α	1 5+α	3 7+α
18	3 4+α	2 0+α	6 1+α

No	長(cm)	幅(cm)	深(cm)
19	1 9+α	1 7+α	2 3+α
20	2 1+α	1 9+α	5 3+α
21	2 8+α	2 6+α	7 2+α
22	2 1+α	1 8+α	2 6+α
23	2 6+α	2 6+α	6 2+α
24	2 6+α	2 2+α	2 7+α
25	1 8+α	1 6+α	5 3+α
26	2 2+α	2 0+α	1 1+α
27	2 2+α	1 8+α	3 5+α
28	2 5+α	1 9+α	6 9+α
29	2 5+α	2 3+α	1 7+α
30	2 5+α	2 2+α	3 2+α
31	1 7+α	1 5+α	2 6+α
32	1 9+α	1 9+α	1 6+α
33	2 0+α	1 9+α	3 2+α
34	2 7+α	2 5+α	5 7+α
35	2 3+α	2 0+α	1 6+α
36	2 3+α	2 2+α	5 5+α

No	長(cm)	幅(cm)	深(cm)
37	2 8+α	2 6+α	4 0+α
38	1 7+α	1 5+α	1 9+α
39	2 0+α	1 8+α	2 6+α
40	1 8+α	1 8+α	3 1+α
41	2 1+α	1 6+α	1 7+α
42	1 6+α	1 5+α	1 2+α
43	2 0+α	1 7+α	3 5+α
44	2 2+α	1 7+α	5 3+α
45	2 1+α	2 0+α	3 0+α
46	2 2+α	2 1+α	3 9+α
47	2 1+α	2 1+α	3 5+α
48	2 0+α	1 6+α	2 9+α
49	1 6+α	1 3+α	2 9+α
50	2 1+α	1 3+α	2 8+α
51	2 3+α	1 9+α	2 8+α
52	2 3+α	2 2+α	1 9+α
53	2 4+α	2 4+α	3 5+α

表4 弥生時代ピット法量表

では、No46-No45-No12-No48-No47-No42-No16の列を想定できる。さらには、調査区南側においては、例えば、No21-No20-No1-No17-No18-No37-No44-No52-No53-No35-No34-No33-No31のように弧状に巡る列も想定しうる。谷地形で検出されたピット群であり、規格性が認められるプランをなすと判断しうる状況もないため、建物に伴う柱穴の可能性は低いと思われる。

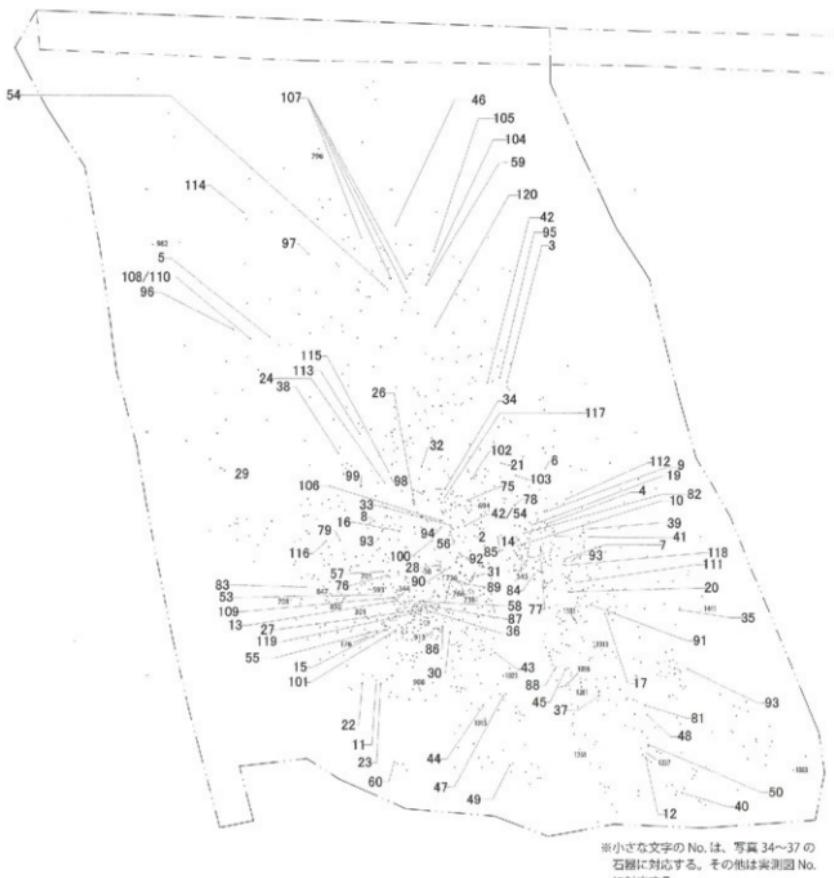
遺物の出土状況を見ると、調査区南西から谷部に向けて廃棄あるいは流れ込んだ状況を呈しており、住居跡等の集落の中心は、調査区南側のヒルトップに営まれていたのではないかと想像される。仮にそうであれば、この谷部に形成されたピットの並びは、谷の底面部分を通路と仮定した場合、集落へ向かうゲートの両側に何らかの境界、あるいは、目印として設けられた可能性も考えられよう。なお、ピットには、検出面から50cmを越える深いものと、20cm程度の浅いものがある。個別の形状については、第34図～38図、表4を参照されたい。

(文責 渡部)

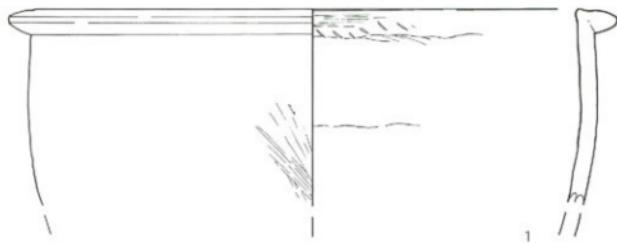
2. 遺物について

第12層中からは多量の土器片が出土した。専ら入来Ⅱ式の時期に帰属するものがほとんどであるが、高橋式土器も1点出土している。出土した土器片は、ナンバーリングなしで取上げた細片も含めると千数百点にのぼるが、土器以外にも、大陸系磨製石器の扁平片・刃石斧が1点、打製石斧10点、石鎌2点、軽石製加工品が数点出土している。軽石製加工品には、獸形のもの、岩偶状のもの、舟形(未製品)のものなどがある。

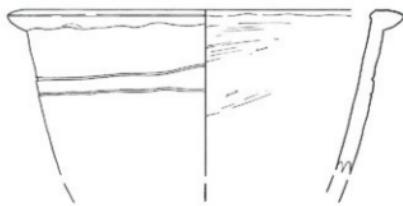
遺物は、調査区南側のヒルトップに近いところから、谷部に向て流れ込んでおり、調査区南側半分に集中する傾向がある。ローリングを受けている遺物も多く、土器については、すべて破片資料であった。残存部位や破片の大きさ、遺物の特徴を考慮し、出土した遺物のうち153点を図化した。



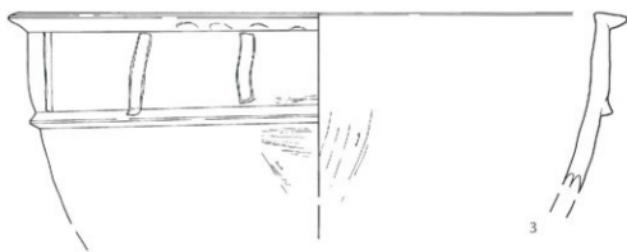
第39図 弥生時代遺物出土状況図(S=1/200)



1



2



3



4



第40図 弥生時代出土遺物実測図①(S=1/2)

(1) 土器

甕形土器

No. 1は、甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は、25.2cmを測る。口唇部は短くやや丸みを帯び、上面はわずかに下がる。口縁部内面の接合痕がうっすらと残る部分には、ユビオサエ時についた爪痕が残る。胴部はわずかに膨らみながら底部へ続るものと思われる。

No. 2は、甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は、16.5cmを測る。口唇部は短く断面は三角形を呈し、上面はほぼ水平である。胴部には二条の沈線が巡る。胴部は膨らみをもたず直線的に底部にのびる。

No. 3は、甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は、25.5cmを測る。口唇部は短く断面は三角形を呈し、上面はわずかに下がる。胴部には1条の突帯が巡り、突帯の上位には、縦に装飾文が施されている。

No. 4は、甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は、30.8cmを測る。口唇部は短く断面は舌状を呈し、上面はほぼ水平である。口唇部端部にはキザミが施されている。胴部には1条の突帯が巡り、胴部最大径は口径より若干大きくなる程に膨らみをもつ。

No. 5は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部は短く断面は舌状を呈し、上面はわずかに丸みを帯びる。口唇部端部にはキザミが施されている。No. 4と同様に胴部が若干膨らむものと想定させる。

No. 6は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。口唇部は短く断面は三角形を呈し、上面はわずかに下がる。口唇部端部にはキザミが施されている。胴部には2条の突帯が巡る。

No. 7は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。口唇部は短く断面は舌状を呈し、上面はわずかに丸みを帯びる。胴部には1条の突帯が残存する。

No. 8は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。口唇部は短く断面は三角形を呈し、上面はほぼ水平である。胴部には1条の突帯が残存する。

No. 9は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。復元口径は、24.6cmを測る。口唇部は短く断面は三角形を呈し、上面はわずかに丸みを帯びる。胴部には1条の突帯が残存する。

No. 10は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。復元口径は、22.8cmを測る。口唇部は短く断面は三角形を呈し、上面はわずかに丸みを帯びる。No. 4と同様に胴部が若干膨らむものと想定させる。胴部には1条の突帯が巡り、突帯には鈍いキザミが施されている。

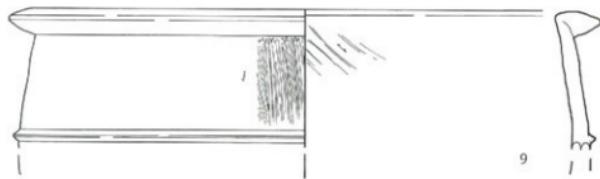
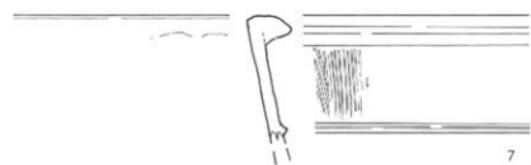
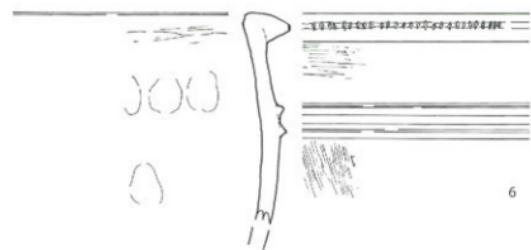
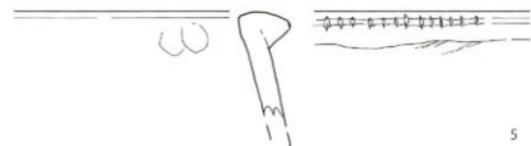
No. 11は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はわずかに下がる。胴部には2条の突帯が巡る。

No. 12は、甕形土器の口縁部から突帯部の破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はわずかに上がる。口唇部端部にはキザミが施されている。胴部には2条の突帯が巡る。

No. 13は、甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口唇部は断面は三角形を呈し、上面が凸になり稜を形成する。胴部は「く」の字に屈曲する。

No. 14は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、34.8cmを測る。口唇部断面は三角形を呈す。上面はわずかに下がる。胴部には2条の突帯が残存する。胴部最大径が口径より若干大きくなる程に膨らみをもつ。

No. 15は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、48.8cmを測る。口唇部断面は舌状を呈し、上面はわずかに下がる。胴部には2条の突帯が巡る。



第41図 弥生時代出土遺物実測図②($S=1/2$)

No.16は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、32.4cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部にはキザミが施されている。胴部には1条の突帯が巡り、突帯にもキザミが施されている。

No.17は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、31.0cmを測る。口唇部断面は三角形を呈し、内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。端部にはキザミが施され、胴部には2条の突帯が巡る。

No.18は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。上面はかすかに窪む。端部には刻みが施され、胴部には2条の突帯が巡る。

No.19は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、36.8cmを測る。口唇部断面は三角形を呈し、端部にはキザミが施される。胴部には1条の突帯が巡る。

No.20は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は三角形を呈し、上面はほぼ水平である。端部にはキザミが施される。胴部には1条の突帯が巡り、胴部はやや膨らみを帶びる。

No.21は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は三角形を呈し、上面はほぼ水平である。内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。端部にはキザミが施され、胴部には2条の突帯が巡る。

No.22は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は三角形を呈し、上面はほぼ水平である。内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。端部にはキザミが施され、胴部には1条の突帯が巡る。

No.23は、斐形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。上面はわずかに丸みを帶びる。胴部は膨らみ、外面に接合痕が残る。

No.24は、斐形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部は短く、断面は台形を呈す。端部は窪む。胴部はわずかに膨らみをもつ。

No.25は、斐形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部は、ゆるく「く」の字上に屈曲する。

No.26は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、26.3cmを測る。口唇部は短く、断面は台形を呈し、端部は窪む。上面は丸みを帶びる。胴部には1条の突帯が残存する。

No.27は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、26.2cmを測る。口唇部は短く、断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部は膨らみ、2条の突帯が巡る。

No.28は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、27.4cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部に1条の突帯が残存する。

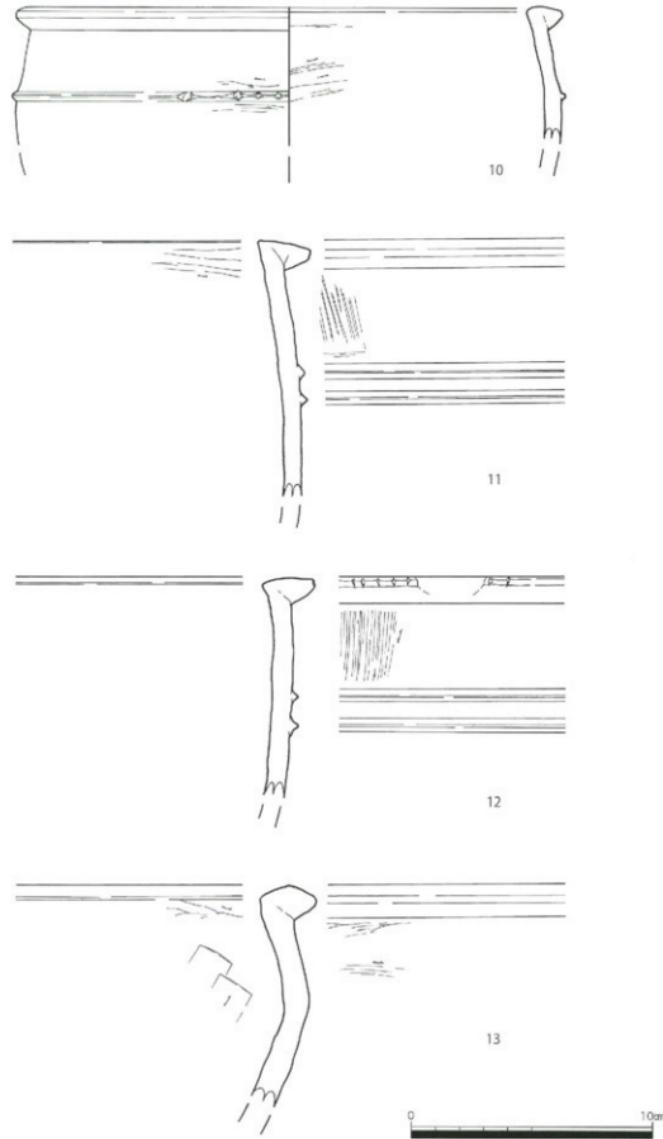
No.29は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、32.4cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部はやや膨らみ、3条の突帯が巡る。

No.30は、斐形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部には1条の沈線が巡る。

No.31は、斐形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は、18.4cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部は丸みを帶び、2条の沈線が巡る。

No.32は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部には2条の突帯が残存する。

No.33は、斐形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。



第42図 弥生時代出土遺物実測図③ (S=1/2)

端部にはキザミが施される。胴部には2条の突帯が巡るが、水平を保っていない。

No.34は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪み、キザミが施される。胴部には4条の突帯が巡り、突帯の上位には、縦に粘土紐状の装飾文が付加される。

No.35は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部には3条の突帯が巡る。

No.36は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はわずかに上がる。端部は窪む。胴部には2条の突帯が残存する。

No.37は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。胴部には2条の突帯が残存する。突帯の上位には、縦に3条の沈線が施されている。

No.38は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部にはキザミが施される。胴部には1条の突帯が巡る。

No.39は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部にはキザミが施される。胴部には1条の突帯が巡る。

No.40は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部にはキザミが施される。胴部には1条の突帯が巡る。

No.41は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部にはキザミが施される。端部は窪む。

No.42は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、47.0cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪み、キザミが施される。胴部には4条の突帯が巡り、突帯の上位には、縦に3条の粘土紐状の装飾文が付加される。

No.43は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部の下方にキザミが施される。上面はほぼ水平で、内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。胴部には1条の突帯が残存する。

No.44は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、32.2cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部の下方にキザミが施される。上面はほぼ水平で、内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。

No.45は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はほぼ水平である。内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。胴部には3条の突帯が巡る。

No.46は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はほぼ水平である。内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。胴部には1条の突帯が残存する。

No.47は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はやや丸みを帯びる。内面にはわずかに突起状に出る部分が看取される。胴部には1条の突帯が残存する。

No.48は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面は中央がかすかに膨らむ。口唇部の厚さは一定しておらず、ユビオサエの痕跡が残る。

No.49は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はほぼ水平である。胴部には2条の突帯が巡るが、上位のものは断面が潰れていて明瞭でない。

No.50は、甕形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はほぼ水平である。

No.51は、壺形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、上面はほぼ水平である。胴部には3条の突帯が巡る。

No.52は、壺形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。復元口径は、36.8cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、上面はやや跳ね上がる。胴部には2条の突帯が残存する。

No.53は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は、14.4cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。上面はやや跳ね上がる。胴部はやや膨らむ。

No.54は、壺形土器の口縁部から突帯部にかけての破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部は窪む。上面はやや跳ね上がる。胴部には2条の突帯が残存する。

No.55は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部断面は舌状を呈し、上面はやや跳ね上がる。内面に突起状に出る部分が看取され、「T」字状をなす。

No.56は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇部断面は舌状を呈し、上面はやや跳ね上がる。内面に突起状に出る部分が看取され、「T」字状をなす。口唇部外面にはユビオサエの痕跡が残る。

No.57は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇部断面は台形を呈し、端部が窪む。上面はやや跳ね上がる。内面に突起状に出る部分が看取され、「T」字状をなす。胴部には2条の突帯が残存する。

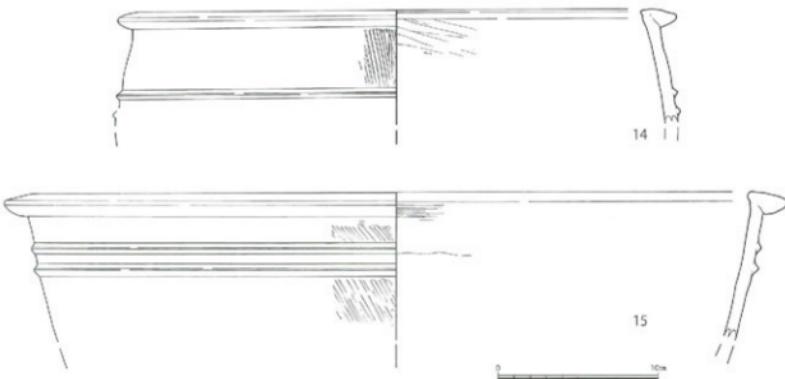
No.58は、壺形土器の口縁部から胴部の破片である。復元口径は、26.8cmを測る。口唇部断面は台形を呈し、端部は丸みを帯びる。上面はやや跳ね上がる。内面に突起状に出る部分が看取され、「T」字状をなす。

No.59は、壺形土器の口縁部から突帯部の破片である。口唇部断面は舌状を呈し、端部にはキザミが施される。窪む。上面は中央がわずかに窪みやや跳ね上がる。内面に突起状に出る部分が看取され、「T」字状をなす。胴部には1条の絡状突帯が残存する。

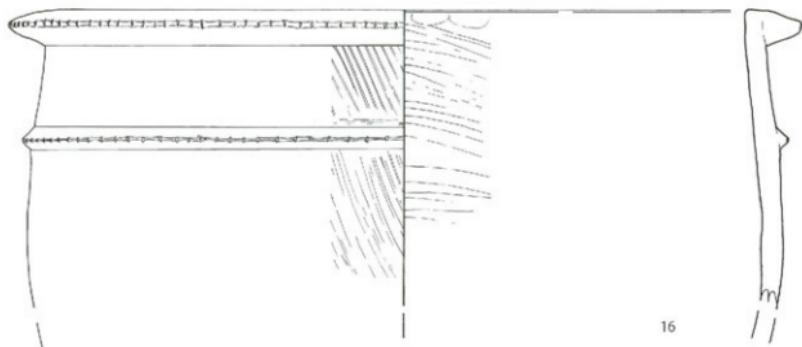
No.60は、壺形土器の底部の破片である。平底である。いわゆる「充実した脚台」といわれるものに比べると脚の部分が短い。底部外面の裾がわずかに外に広がる。底径は7.6cmを測る。

No.61は、壺形土器の底部の破片である。平底である。No.60と同様に脚の部分が短い。底部外面の裾は広がらない。底径は7.9cmを測る。

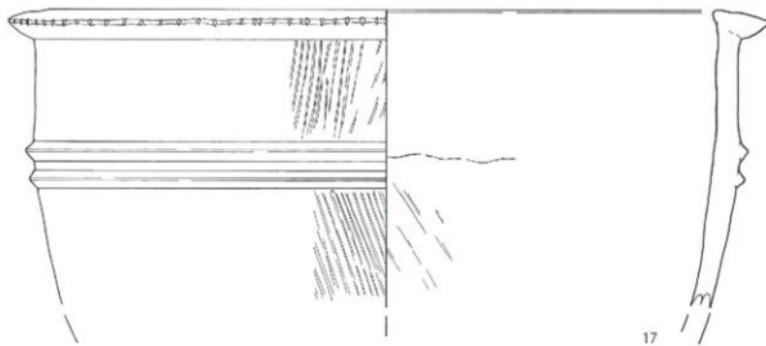
No.62は、壺形土器の胴部から底部の破片である。平底である。No.60、61と同様に脚の部分が短い。胴部外面から底部にかけてミガキが施される。底部外面の裾は広がらない。底径は7.9cmを測る。



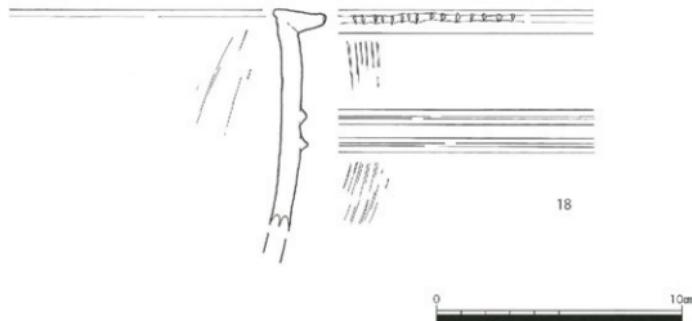
第43図 弥生時代出土遺物実測図④(S=1/3)



16



17



18

0 10cm

第44図 弥生時代出土遺物実測図⑤($S=1/2$)

No.63は、斐形土器の底部の破片である。平底である。No.60～62と同様に脚の部分が短い。底部外面の裾は広がらない。底径は7.3 cmを測る。

No.64は、斐形土器の底部の破片である。平底であるが、かすかに中央部があがる。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾は広がらない。底径は7.9 cmを測る。

No.65は、斐形土器の底部の破片である。平底である。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾がわずかに外に広がる。底径は7.7 cmを測る。

No.66は、斐形土器の底部の破片である。平底である。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾がわずかに外に広がる。底径は7.5 cmを測る。

No.67は、斐形土器の底部の破片である。平底である。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾がわずかに外に広がり、端部は丸みを帯びる。底径は6.8 cmを測る。

No.68は、斐形土器の底部の破片である。平底である。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がる。底径は7.3 cmを測る。

No.69は、斐形土器の底部の破片である。平底である。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がる。底径は8 cmを測る。

No.70は、斐形土器の底部の破片である。平底である。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がる。底径は6.9 cmを測る。

No.71は、斐形土器の底部の破片である。平底であるが、かすかに中央部があがる。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がり、端部は窪む。底径は7.6 cmを測る。

No.72は、斐形土器の底部の破片である。わずかに上げ底になる。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がる。底径は7.6 cmを測る。

No.73は、斐形土器の底部の破片である。わずかに上げ底になる。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がる。底径は7.6 cmを測る。

No.74は、斐形土器の底部の破片である。上げ底を呈す。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がり、端部が窪む。底径は6.8 cmを測る。

No.75は、斐形土器の底部の破片である。上げ底を呈す。「充実した脚台」と表現される底部に比べると脚部が短い。底部外面の裾がわずかに外に広がる。底径は7.4 cmを測る。

No.76は、斐形土器の底部の破片である。上げ底を呈す。「充実した脚台」と表現される底部である。底部外面の裾が外に広がり、端部が窪む。底径は8.3 cmを測る。

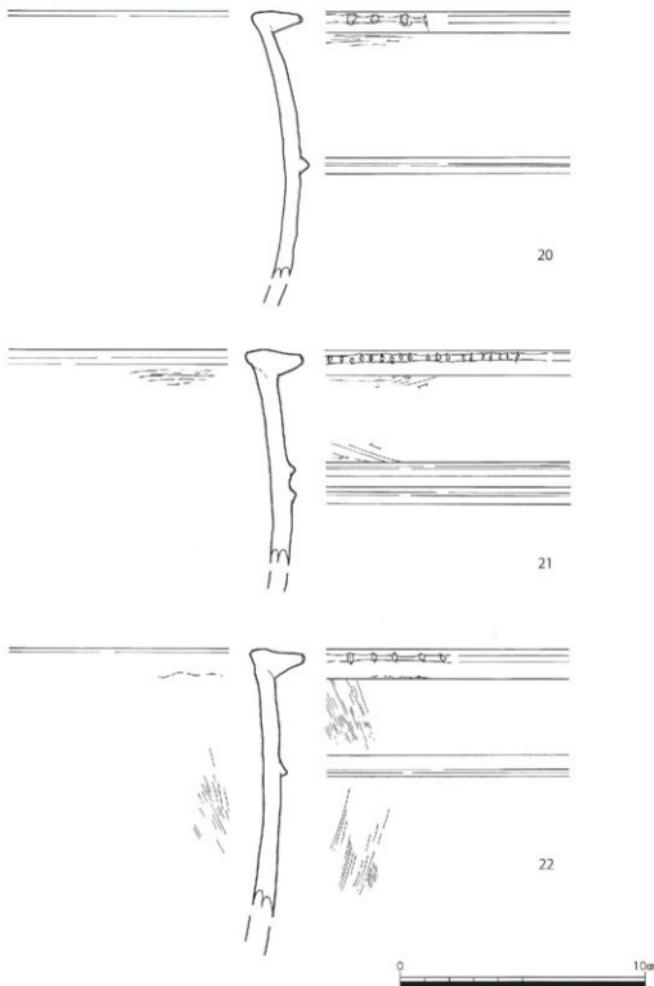


第45図 弥生時代出土遺物実測図⑥(S=1/3)

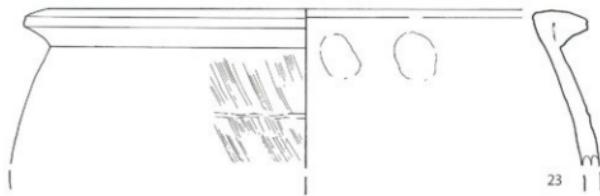
壺形土器

No.77は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は10.8 cmを測る。口縁部は外反する。口唇端部は平坦で外面に稜を形成する。内外面ともにミカギが施される。

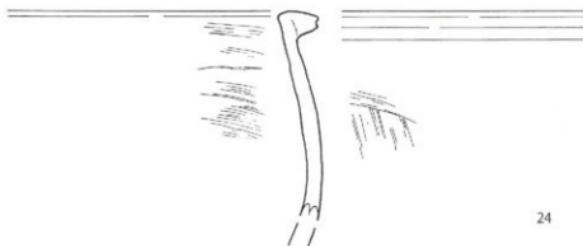
No.78は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は14.3 cmを測る。口縁部は外反する。口



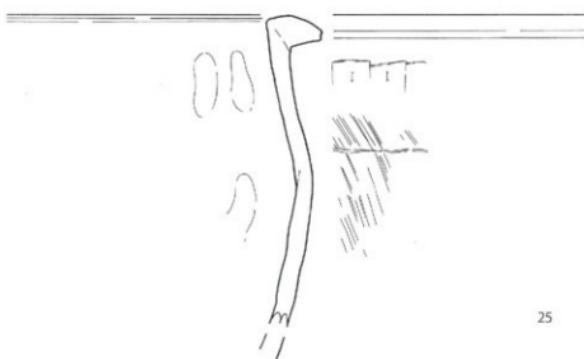
第46図 弥生時代出土遺物実測図⑦($S=1/2$)



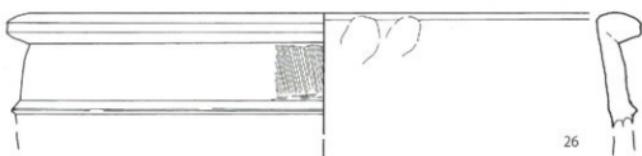
23



24



25



26

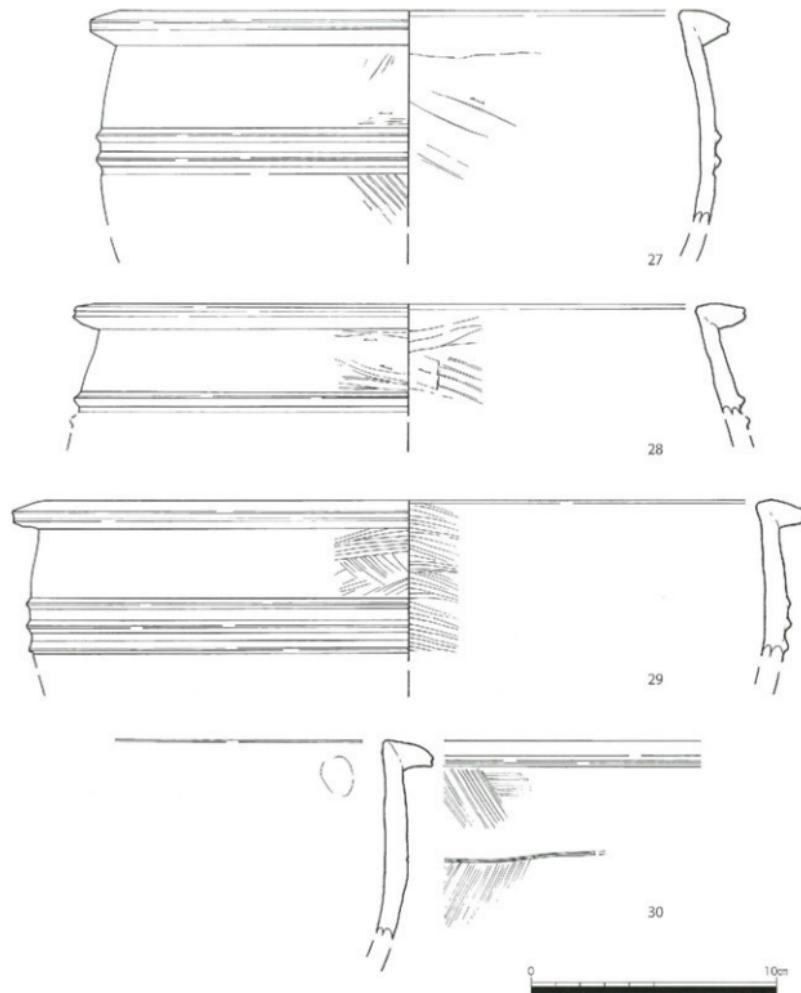


第47図 弥生時代出土遺物実測図⑧(S=1/2)

唇部は丸みを帯びる。

No.79は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反する。口唇端部はほぼ平坦である。

No.80は、壺形土器の壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は18.0 cmを測る。口縁部は外反する。口唇端部はたまむち状を呈し、内面に稜を形成する。



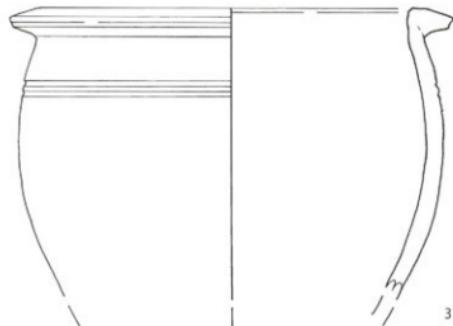
第48図 弥生時代出土遺物実測図⑨(S=1/2)

No.81は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は19.5 cmを測る。口縁部は外反する。口唇端部は丸みを帯びる。

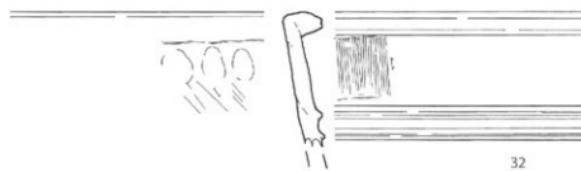
No.82は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は15.4 cmを測る。口縁部は外反する。口唇端部はかすかに窪む。

No.83は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反する。口唇端部は窪む。

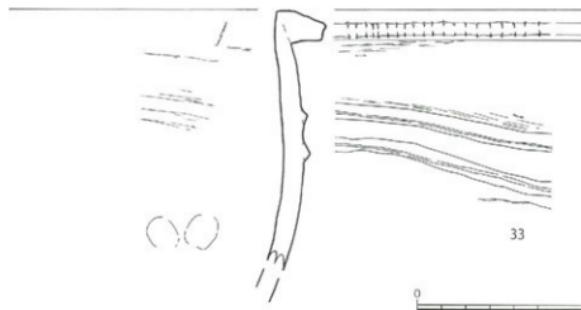
No.84は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反する。口唇端部は窪む。



31



32



33



第49図 弥生時代出土遺物実測図⑩(S=1/2)

No.85は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は18.8 cmを測る。口縁部は外反する。口唇端部は窪み、外面に明瞭な稜を形成する。内外面ともにミカギが施される。

No.86は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。口縁部は外反する。口唇端部は窪み、外面に明瞭な稜を形成する。内外面ともにミカギが施される。

No.87は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は20.2 cmを測る。口縁部は外反し、逆「L」字を呈し下方に垂れる。口唇端部は窪み、キザミが施される。口縁部内面には2条の凸帯が巡る。

No.88は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は20.0 cmを測る。口縁部は外反し、逆「L」字を呈し下方に垂れる。口唇端部は窪む。

No.89は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。口縁部は外反し、逆「L」字を呈し下方に垂れる。口縁部内面には2条の凸帯が巡る。

No.90は、壺形土器の口縁部から頸部の破片である。復元口径は21.0 cmを測る。口縁部は外反し、逆「L」字を呈す。口唇端部は窪み、上面には刺突文が施されている。

No.91は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反し、逆「L」字を呈す。口唇端部は欠損している。口縁部内面には1条の凸帯が巡り、その上位に刺突文が施されている。

No.92は、壺形土器の肩部から胴部の破片である。肩部から胴部にかけてなだらかにカーブし、肩部には3条の突帯が巡る。

No.93は、壺形土器の肩部の破片である。胴部が大きく膨らむもので、肩部には3条の突帯が巡る。

No.94は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は6.4 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

No.95は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は6.3 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

No.96は、壺形土器の底部の破片である。わずかに上げ底となる。底径は7.3 cmを測る。

No.97は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は6.3 cmを測る。

No.98は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は4.8 cmを測る。

No.99は、壺形土器の底部の破片である。底部中央部分がわずかに上げ底となる。底径は8.4 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

No.100は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は7.2 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

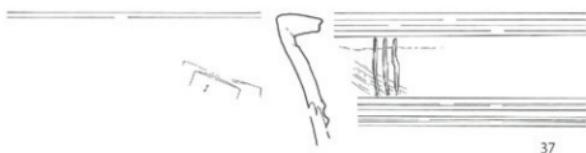
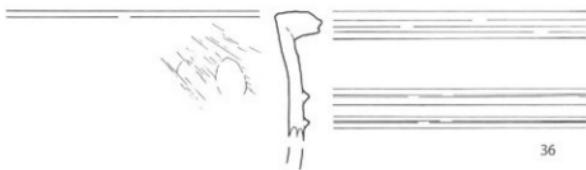
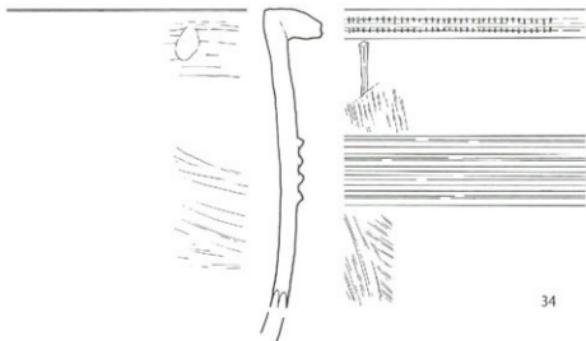
No.101は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は8.4 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

No.102は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は9.0 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

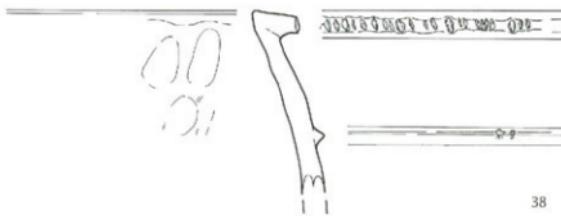
No.103は、壺形土器の底部の破片である。平底である。底径は7.4 cmを測る。底部から胴部に向けて大きく開く。

鉢形土器

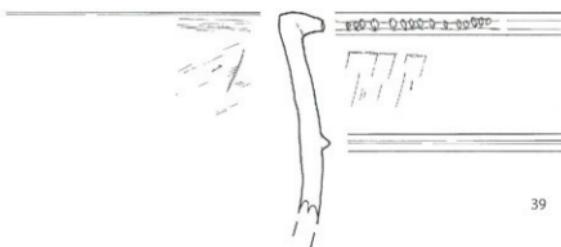
No.104は、鉢形土器の底部、口縁部から胴部の破片である。ポール状の器形を呈する。復元口径は、21.4cmを測る。口縁部は胴部から屈曲しほぼ垂直に立ち上がり、屈曲部分外面には稜を形成する。底部は平底である。底径は6.6 cmを測る。外面はミガキによって仕上げられている。



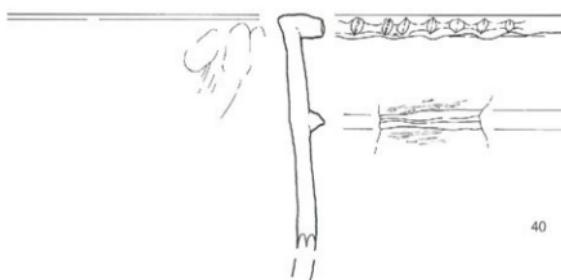
第50図 弥生時代出土遺物実測図①(S=1/2)



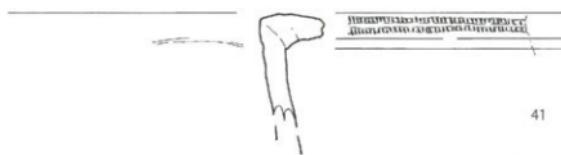
38



39



40



41



第51図 弥生時代出土遺物実測図⑫(S=1/2)

高杯

No.105は、高杯の底部から脚部の破片である。底径は12.5cm、脚部の高さは11.4cmを測る。底部の端部は「レ」の字状をなす。内面の見込みが大きい。

No.106は、高杯の脚部の破片である。脚部は直線的に伸び、底部は伏せた皿状に大きく広がるものである。

その他の器種

No.107は、コップ形を呈する上器の底部から胴部の破片である。復元底径は9.7cmを測る。やや丸みを帯びた底部からわずかに内傾しながら胴部へと繋がる。底部から5cm程上位の胴部外面には2条の沈線が巡り、さらに5cm程上位にも2条の沈線が巡る。脚部の高さは11.4cmを測る。底部の端部は「レ」の字状をなす。横位に巡った沈線の間には、2条の沈線が斜めに施され鋸歯状をなす。

高橋I式土器

No.108は、刻目突帯文土器の系譜を引く高橋I式土器と思われる。口縁部はわずかに内傾する。口唇部はわずかに肥厚し、外面にはキザミが施される。胴部への屈曲部にも突帯がめぐり、キザミが施される。

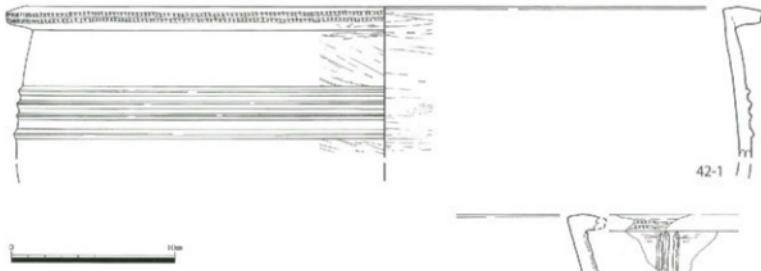
(文責 渡部)

石器

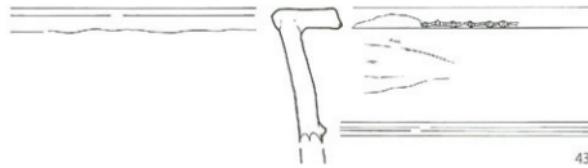
No.109は、流紋岩製の磨製片刃石斧である。いわゆる大陸系磨製石器の一群をなす片刃石斧である。基部は欠損しているため、本来の法量は不明である。使用による欠損の剥離痕以外は、全ての面が丁寧に研磨されており、素材を調整する段階の剥離痕は認められない。研磨については、肉眼観察で認められた研磨痕を図示しているが、拡大レンズでの観察では、図示以外の方向の研磨も認められる。刃部には、微細な使用痕が認められる。また、b面刃部端部には、線状痕が顕著に認められる。b面刃部左端の使用痕の剥離痕内にも線状痕が認められることから、推測の域を出ないものの刃部の研ぎ直しが行われた可能性も考えられる。基部側の欠損面の観察によると、基部はb面側からの加撃によって欠損したことが考えられる。

No.110は、流紋岩製の打製石斧である。長さに対して幅が狭い短冊形をしているものの、両肩部に若干の抉りが認められる。周辺の調整は大まかであり、a面基部側では極端な剥離が連続的に認められる。a面の両側縁の調整は、b面と比較して剥離角が急であるため、断面形状がD字を呈している。刃部はやや直線的な斜刃であり、使用による摩滅が認められる。

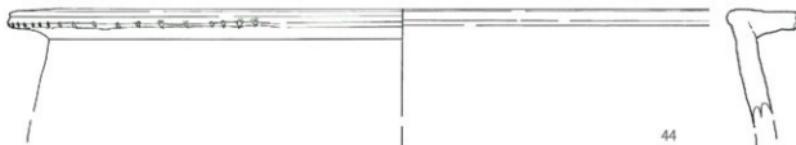
No.111は、流紋岩製の打製石斧である。両肩部に抉りが認められる。b面中央部の剥離は、素材の主要剥離面であるが、打瘤や貝殻状裂痕の状態から比較的大きな素材と類推することができる。刃部は丸み帶



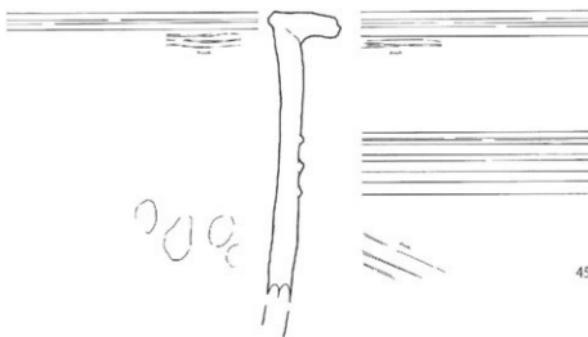
第52図 弥生時代出土遺物実測図⑩(5=1/3)



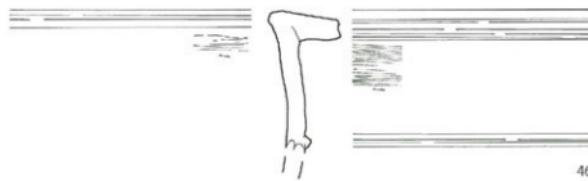
43



44



45



46

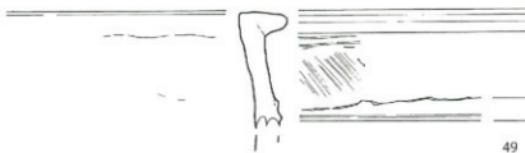


47

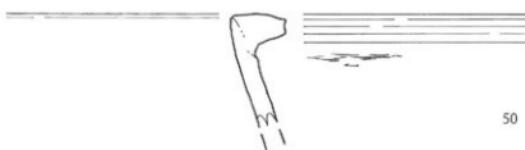
第53図 弥生時代出土遺物実測図⑭(S=1/2)



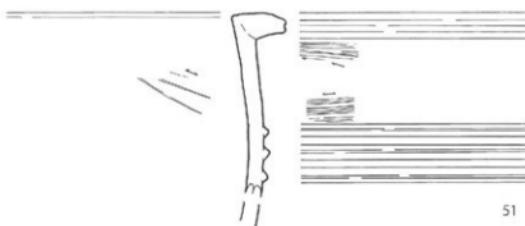
48



49



50



51

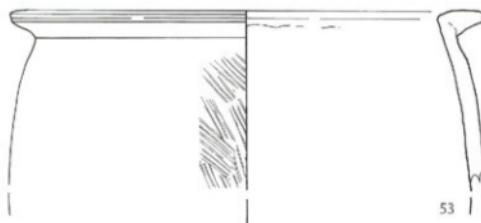
0 10cm



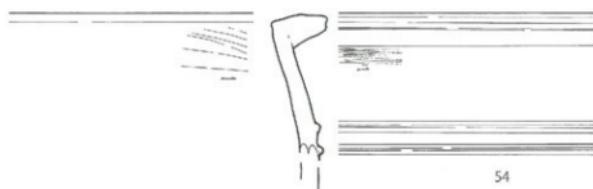
52

0 10cm

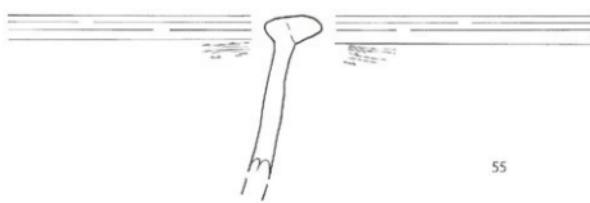
第54図 弥生時代出土遺物実測図⑮(48~51はS=1/2、52はS=1/3)



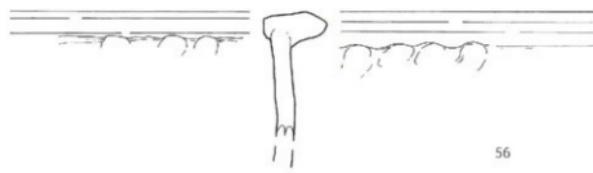
53



54



55



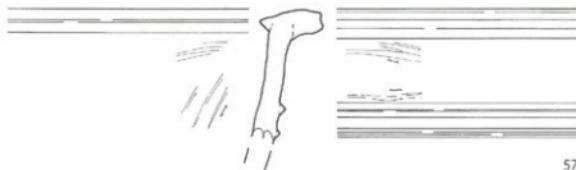
56



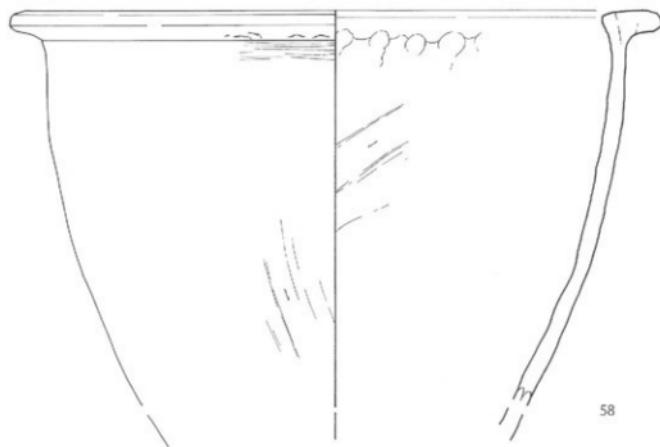
第55図 弥生時代出土遺物実測図⑯ (S=1/2)

びており、その端部には使用による摩滅が認められる。また、a面中央付近並びにb面肩部付近には、装着によるものと推測できる摩滅が認められる。両側縁の調整は、大まかな剥離であり階段状剥離を呈している。基部端部には、摩滅と微細な剥離痕が認められる。

No.112は、流紋岩製の横刃形石器である。平面形状は不整形な三角形を呈している。b面中央部には、素材剥片の主要剥離面が認められる。また、打面の一部がb面右側面に残されている。a面下端部と左側縁は、a面・b面の両面側からの調整によって整形されている。刃部は、素材剥片の打瘤及び打面を両面側からの調整によって除去することで形成されている。f面の観察によると、刃部調整が大まかなるため刃部は直線的ではない。刃部には微細な使用痕と摩滅が認められる。



57



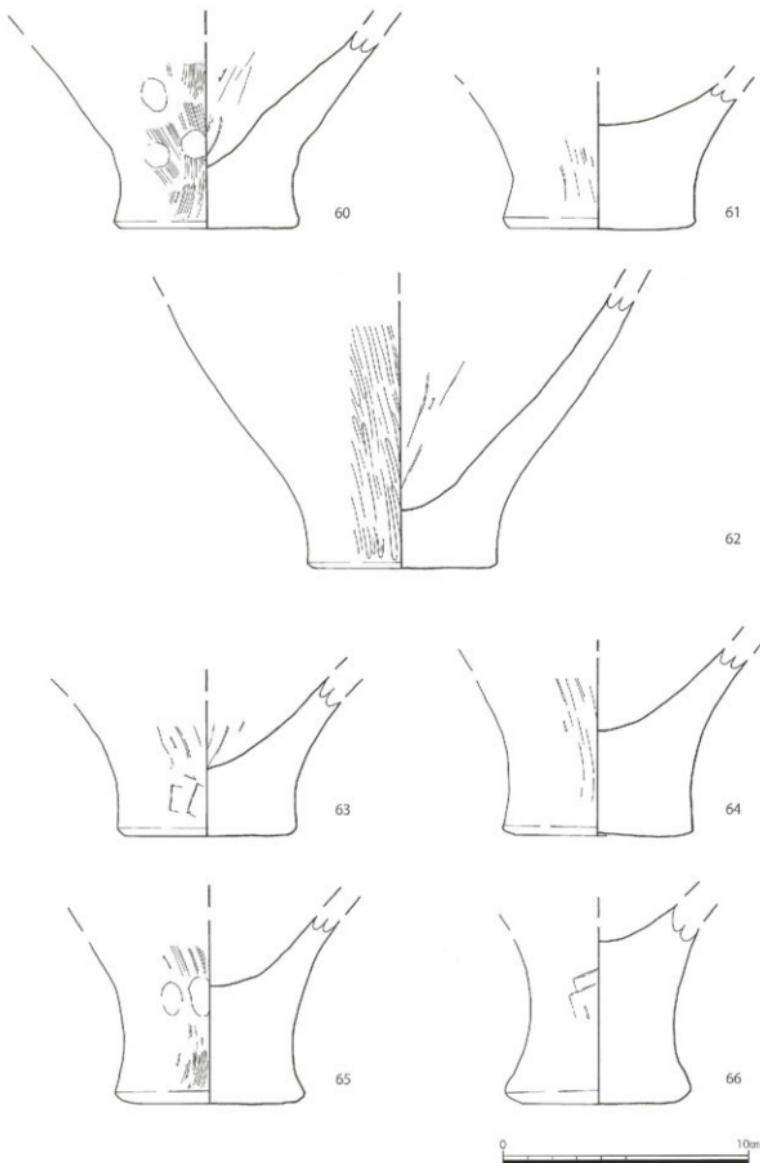
58



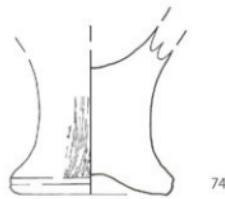
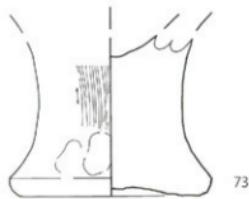
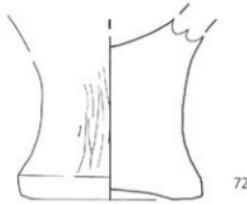
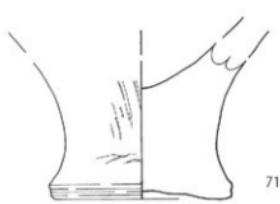
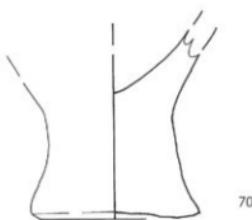
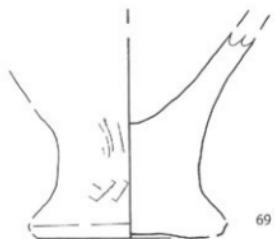
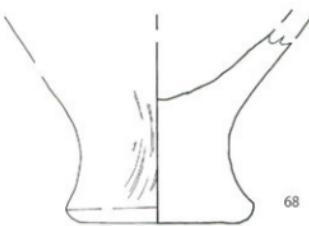
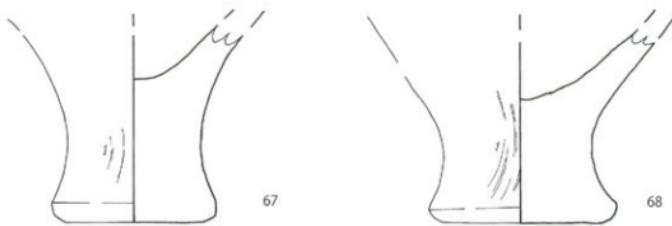
59



第56図 弥生時代出土遺物実測図⑦(S=1/2)



第57図 弥生時代出土遺物実測図⑧($S=1/2$)



第58図 弥生時代出土遺物実測図⑩(S=1/2)

No.113は、安山岩製の打製石鎌である。いわゆる三角鎌に分類されるものである。基部はほぼ平坦であるものの、a面右脚が左脚よりやや長い。調整はa面・b面の両面側から施されており、特に、先端部と基部は薄い。調整の剥離痕の切合いから、a面→b面の順番で調整が施されていることが窺える。石鎌の最大厚が、中央部より基部側に位置しているため、d面の観察では不整形な菱形を呈している。

No.114は、砂岩製の磨製石鎌である。先端部と基部が欠損しているものの、長身鎌に分類される磨製石鎌である。残存する長さは4.9cmを測るが、欠損部分を考慮すると本来は5.5cm以上を測るものであったと推測できる。a面とb面ともに比較的丁寧に研磨されているものの、a面左側面下部と中央部、さらにb面中部付近には研磨段階以前の調整段階の剥離痕が残存している。研磨方向は、大部分は長軸方向のものと斜め方向のものが認められる、若干、短軸方向の研磨も求められる。a面・b面には、研磨による稜が一条、あるいは二条形成されているめ、断面形状はきれいなレンズ状を呈していない。a面・b面の両側縁には、使用によるものと考えられる微細な使用痕が認められる。b面右側面下部の剥離痕は、基部が欠損した際に、剥落したものと考えられる。

No.115は、安山岩製の凹石である。ほぼ円形を呈した凹石であり、a面・b面中央部に凹面が顕著に認められる。四面の深さは、a面・b面とも概ね2mm程度の深さである。また、a面右側面には敲打痕が認められる。a面・b面中央部の平坦面は、他の自然面と比較して滑らかであることから、磨石として利用されていたことも推測できる。

No.116は、安山岩製の凹石である。梢円形を呈した凹石であり、a面中央部に凹面が顕著に認められる。四面の深さは約5mmを測り、先述したNo.115と比較して深い。a面右側部には敲打痕が認められる。さらに、b面中央部の平坦面は、他の自然面と比較して若干滑らかであることから、磨石として利用されていたことも推測できる。

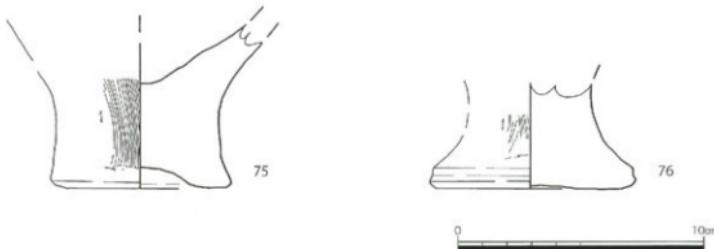
No.117は、岩偶状の軽石製加工品である。扁平な梢円形の軽石の両端部を削り出し、頭部のような突起を作り出している。

No.118は、舟形状の軽石製加工品である。扁平な梢円形の軽石の片面中央付近が浅く窪む。

No.119は、獸形の軽石製加工品である。扁平な梢円形の軽石の側面にキザミを施し連続する凹凸を作り出している。また、四肢を表現したような加工も看取される。

No.120は、陰石状の軽石製加工品である。扁平な梢円形の軽石の片面中央に穿孔を施したものと思われるが半分が欠損している。

(文責 鎌田[No.109~116]・渡部[No.117~120])

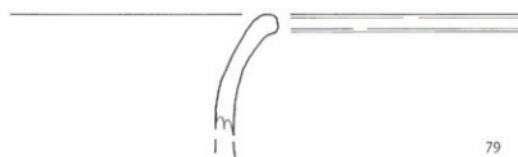


第59図 弥生時代出土遺物実測図②(S=1/2)



77

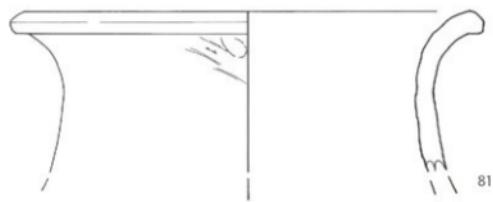
78



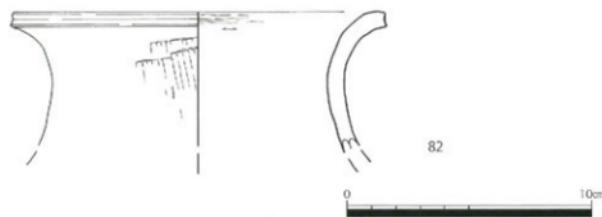
79



80

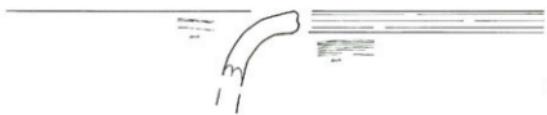


81



0 10cm

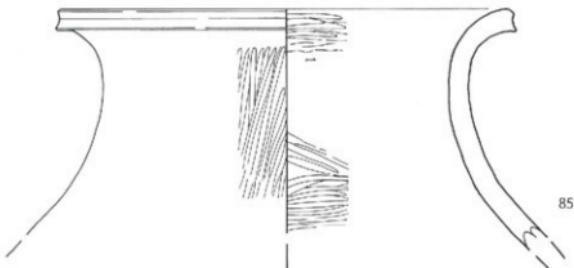
第60図 弥生時代出土遺物実測図②(S=1/2)



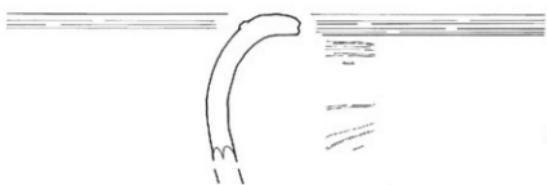
83



84



85



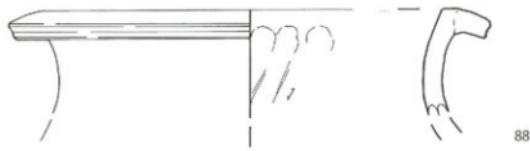
86



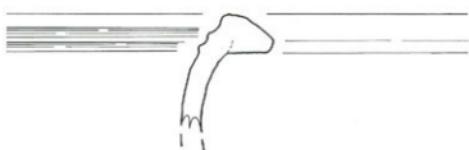
87



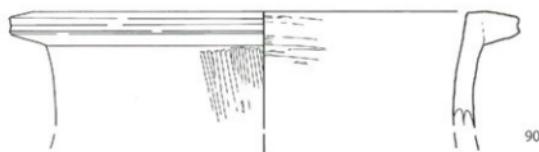
第61図 弥生時代出土遺物実測図②(S=1/2)



88



89



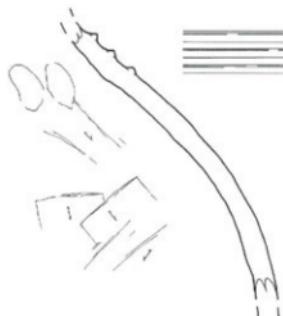
90



第62図 弥生時代出土遺物実測図②(S=1/2)



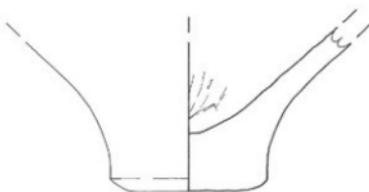
91



92



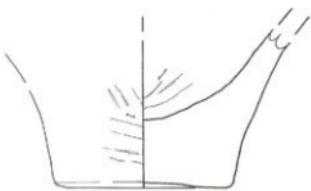
93



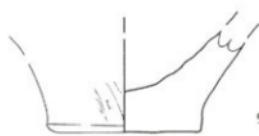
94



95



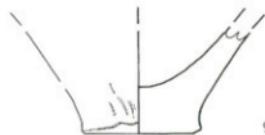
96



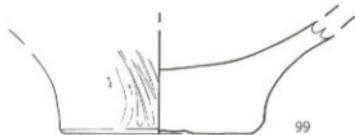
97



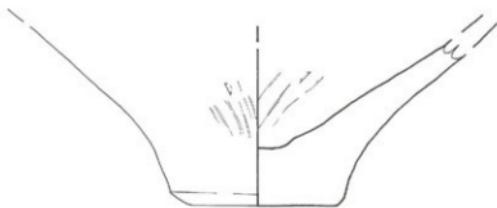
第63図 弥生時代出土遺物実測図② ($S=1/2$)



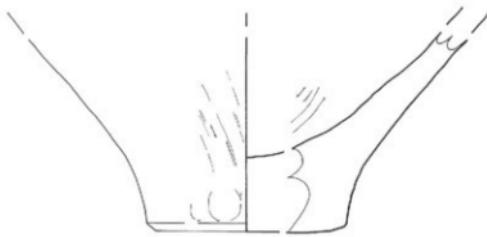
98



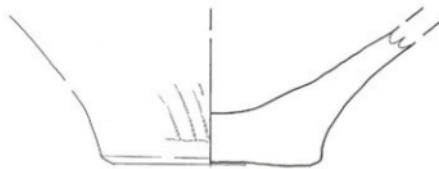
99



100



101



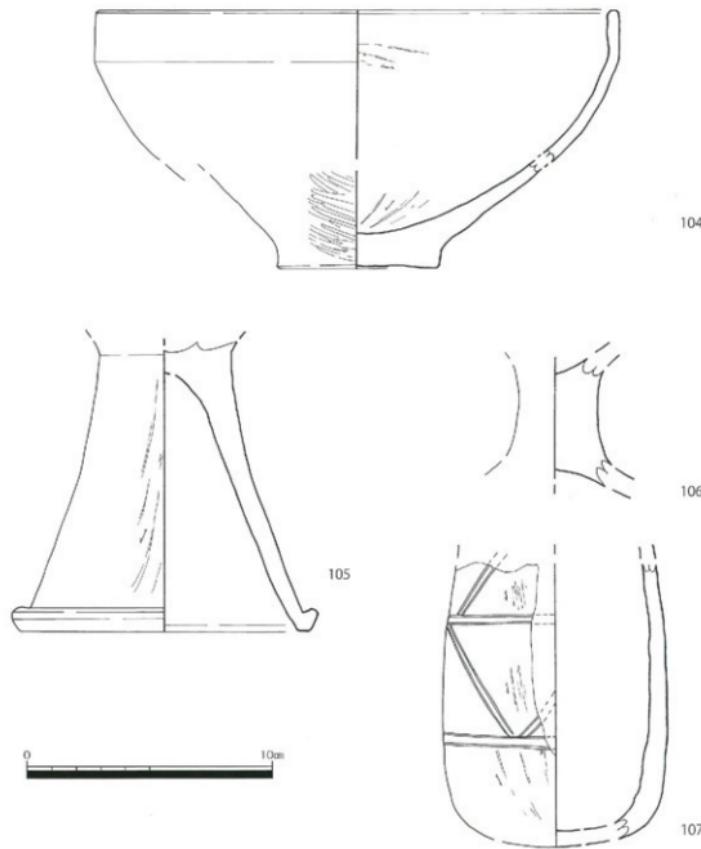
102



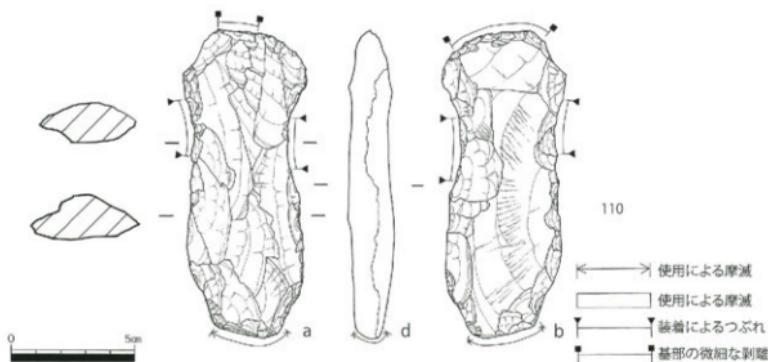
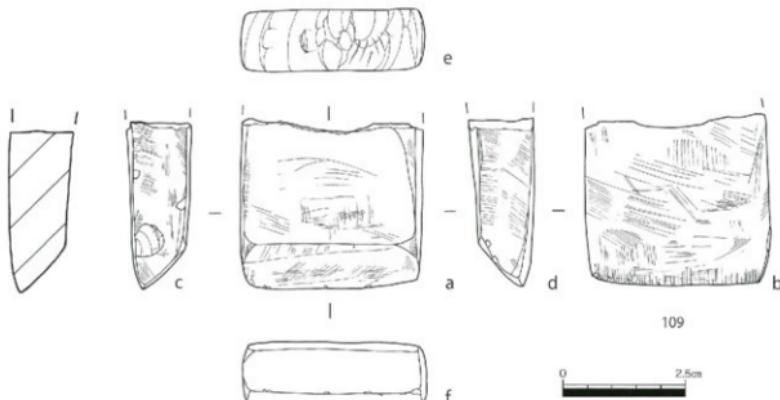
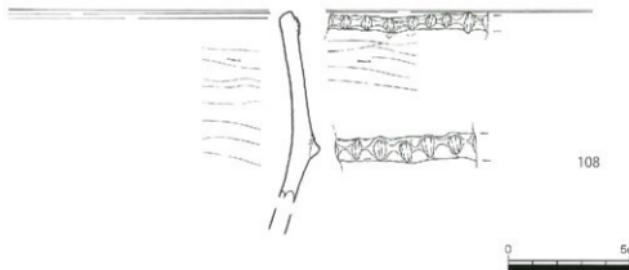
103



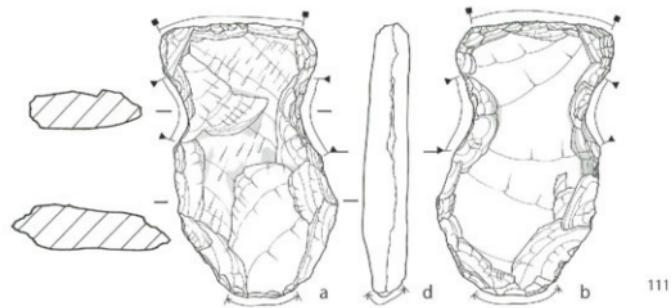
第64図 弥生時代出土遺物実測図②(S=1/2)



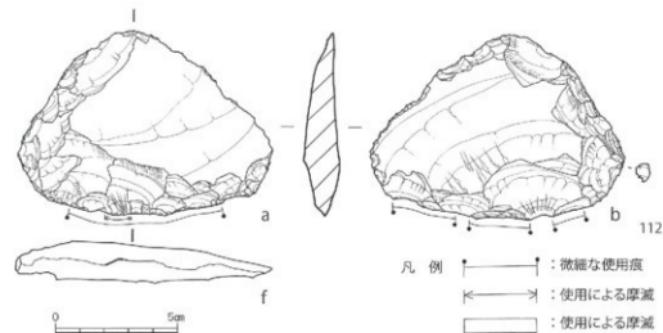
第65図 弥生時代出土遺物実測図⑧($S=1/2$)



第66図 弥生時代出土遺物実測図⑦(108・110はS=1/2、109はS=1/1)



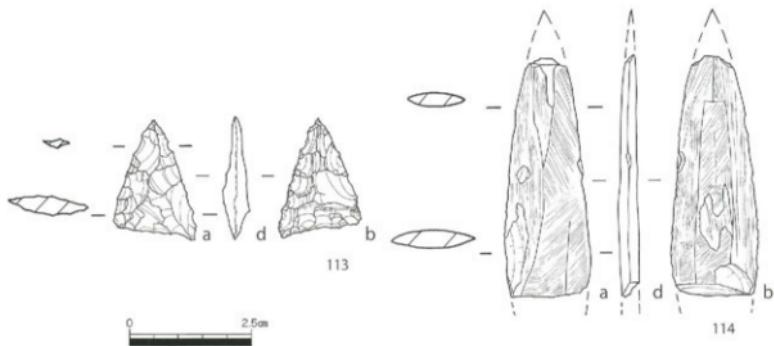
111



112

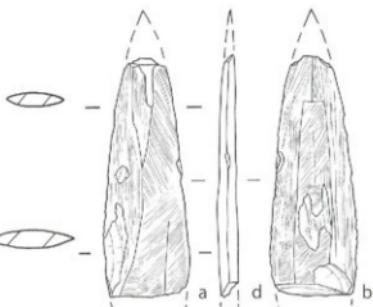
凡例

- ↑ → : 微細な使用痕
- ↖ ↗ : 使用による摩滅
- : 使用による摩滅
- ▨ : 装着による摩滅
- ↑ ↓ : 装着によるつぶれ
- ↔ : 基部の微細な剥離



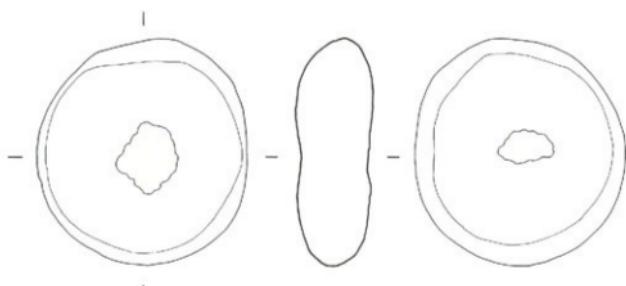
113

0 2.5cm

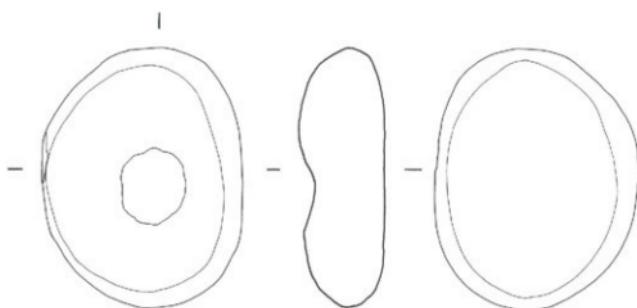


114

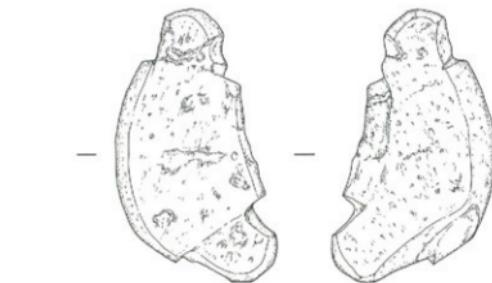
第67図 弥生時代出土遺物実測図②(111・112はS=1/2、113・114はS=1/1)



115



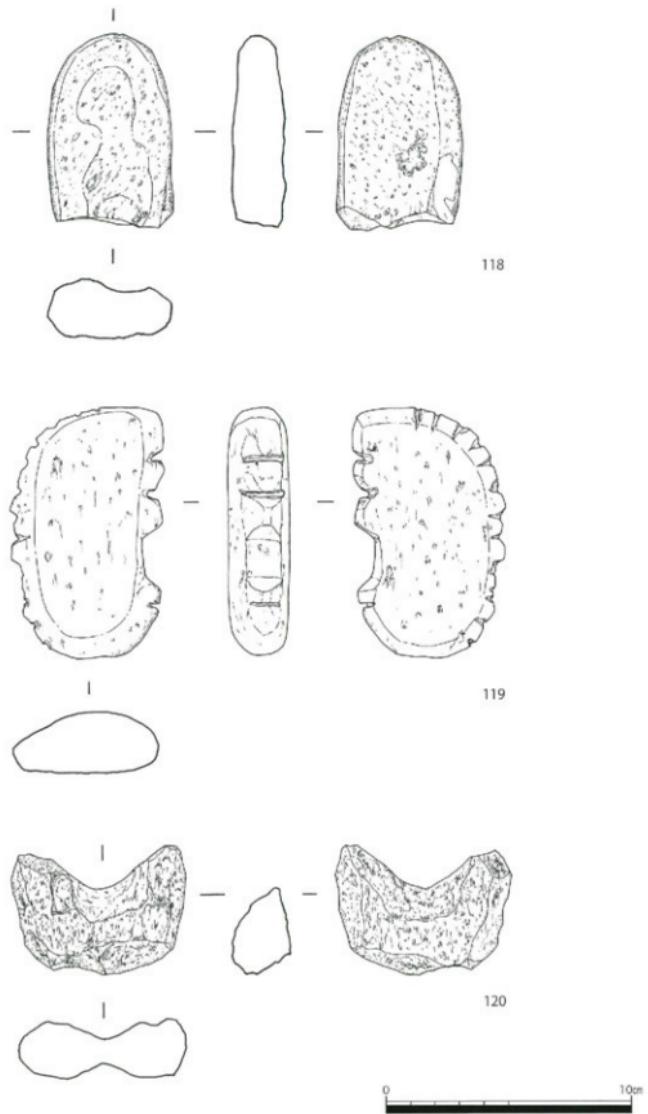
116



117



第68図 弥生時代出土遺物実測図②(S=1/2)



第69図 弥生時代出土遺物実測図⑩(S=1/2)

表5 弥生時代遺物觀察表1

番号	種類	現存状態(cm)	出所	色	陶	白	青	黒	緑	釉	施工法	出所調	箇所	その他	説明
19	154	實形土器 板片 1/2残存 復元:135.8cm 実物	破片 口縁部~ 底面	7.5YR6/3	7.5YR4/1	10YR6/3	砂利をわずかに含む 白・黒・ 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 赤・黒	内・ハケメのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 工具によるキ サギ 突・ヨコナダ	良好	12b				
20	482	實形土器 板片 1/2残存 剥離	破片 口縁部~ 底面	10YR6/1	10YR5/3	10YR6/1	加熱焼を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 黒・黒	内・ナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 工具によるキ サギ 突・ヨコナダ	良好	12b	485	513		
21	262	實形土器 板片	口縁部~ 実物	7.5YR5/3	7.5YR5/2	10YR4/2	加熱焼を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 黒・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 工具によるキ サギ 突・ヨコナダ	良好	12b				
22	919	實形土器 板片	口縁部~ 実物	7.5YR6/3	7.5YR5/4	7.5YR4/3	加熱焼を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 工具によるキ サギ 突・ヨコナダ	良好	12b				
23	914	實形土器 板片	口縁部~ 剥離	7.5YR5/2	7.5YR5/3	7YR4/3	加熱焼を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・ニビヤサエのちナダ 外・ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ	良好	12b				
24	11	實形土器 板片 1/2残存 剥離	口縁部~ 7.5YR6/3	7.5YR5/4	10YR4/2	加熱焼を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・ニビヤサエのちナダ 外・ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ	良好	12b					
25	一般	實形土器 板片	口縁部~ 剥離	7.5YR6/2	10YR4/2	10YR4/2	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・ニビヤサエのちナダ 外・ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ	良好	12b				
26	652	實形土器 板片 1/2残存 復元:125.3cm	口縁部~ 実物	10YR6/1	7.5YR5/4	10YR5/2	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ	良好	12b	725			
27	370	實形土器 板片 1/2残存 復元:125.2cm	口縁部~ 実物	5YR6/3	5YR4/4	7.5YR6/3	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 金・黒 赤・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 突・ヨコナダ	良好	12b	385	725		
28	78	實形土器 板片 1/2残存 実物	口縁部~ 復元:137.4cm	5YR6/2	2.5YR6/4	7.5YR4/3	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 金・黒 赤・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 突・ヨコナダ	良好	12b	314	513		
29	91	實形土器 板片 1/2残存 復元:132.4cm	口縁部~ 7.5YR6/1	7.5YR4/4	7.5YR4/3	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・ハケメのちマツメ 外・マツメのちナダ 口唇・ヨコナダ 突・ヨコナダ	良好	12b					
30	912	實形土器 板片 1/2残存 剥離	口縁部~ 7.5YR6/2	7.5YR4/3	7.5YR4/2	加熱焼を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・ニビヤサエ 外・ハケメ ハケメのちナダ 沈泡 口唇・ヨコナダ	良好	12b					
31	111	實形土器 板片 1/2残存 剥離	口縁部~ 復元:118.4cm	7.5YR6/2	7.5YR4/4	7.5YR3/2	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 金・黒 赤・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 沈泡 口唇・ヨコナダ	良好	12b	386	558	248	
32	558	實形土器 板片	口縁部~ 実物	5YR4/3	7.5YR4/3	7.5YR4/3	砂利を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 白・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・ハケメ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 突・ヨコナダ	良好	12b				
33	211	實形土器 板片 1/2残存 剥離	口縁部~ 実物	5YR4/3	2.5YR5/5	5YR4/3	砂利を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 金・黒 赤・黒	内・工具によるナダのちナダ 外・工具によるナダのちナダ ハケメのちナダ 口唇・ヨコナダ 突・ヨコナダ	良好	12b				
34	247	實形土器 板片	口縁部~ 実物	5YR4/4	2.5YR5/6	5YR4/4	砂利をわずかに含む 黒砂利を含む 黒砂利を含む	カ・セ 白・黒 金・黒 赤・黒	内・一部ユオサエ 工具によるナダのちナダ 外・ハケメのちナダ ハケメ 口唇・ヨコナダ 工具によるキ サギ 突・ヨコナダ	良好	12b	275	318	711	759

表6 弥生時代遺物観察表2

品目	上位ID	階級	種別	外色	内色	固色	加工	調査用	その他の候補	適合
35	1124	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/1	3IV4/3	T.3IV1/3	細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・工具によるナラのちナラ 黒・金・ナラ・ホ・工具によるナラのナラ ナラ・白・金・ナラ 黒・白・コナラ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
36	730	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/1	3IV4/1	T.3IV5/3	砂粒をわずかに含む 細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・ハメのナラデビビズ 黒・金・ナラ・ホ・工具によるナラのナラ ナラ・白・コナラ 黒・ヨコナラ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
37	1265	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/1	3IV4/1	T.3IV1/3	細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・工具によるナラのちナラ 黒・金・ナラ・ホ・工具によるナラのナラ ナラ・白・コナラ 黒・ヨコナラ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
38	787	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/2	3IV5/3	1IV4/2	細緻部を若干含む 微細部を若干含む	カ・セ・黒・内・ビオラテ・ナラ 黒・工具によるナラのナラ ナラ・白・コナラ 黒・ヨコナラ・工具による ナラ・ホマツ 黒・ヨコナラ・一葉ケヤク	良好 候補 モゼン
39	202	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/2	3IV5/2	1IV4/2	砂粒をわずかに含む 細緻部を若干含む 微細部を若干含む	カ・セ・白・内・工具によるナラのナラ 黒・工具によるナラのナラ ナラ・白・コナラ 黒・ヨコナラ 工具による ナラ・ホマツ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
40	1126	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/1	3IV4/2	T.3IV1/2	砂粒をわずかに含む 細緻部を若干含む 微細部を若干含む	カ・セ・白・内・ニコチナ・ナラ 黒・工具によるナラのナラ ナラ・白・コナラ 工具による ナラ・ホマツ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
41	337	復元土器	破片	口縁部	1IV3/4	5IV1/1	2.IV4/2	砂粒をわずかに含む 細緻部を若干含む 微細部を若干含む	カ・セ・白・内・ナラ 黒・白 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ホマツ 工具による ナラ・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
42	276	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/4	1IV4/1	1IV4/2	砂粒をわずかに含む 細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・工具によるナラのナラ 黒・白・工具によるナラのナラ 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ヨコナラ 工具による ナラ・ホマツ 工具による ナラ・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
43	1124	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/1	3IV4/3	1IV4/2	砂粒をわずかに含む 細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・ナラ 黑・白 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ホマツ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
44	985	復元土器	破片	口縁部 約1/3既存 既元132.2cm	2.IV3/2	3.IV5/2	T.3IV3/2	砂粒を若干含む 細緻部を若干含む 微細部を若干含む	カ・セ・白・内・ナラ 黒・白 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ホマツ 工具による ナラ・ヨコナラ 工具による ナラ・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
45	1099	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/3	1IV4/2	3IV3/1	細緻部を含む 微細部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・工具によるナラのナラ 黒・白 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ホマツ 黒・ヨコナラ 黒・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
46	102	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	1IV3/3	1IV5/3	2.IV3/1	砂粒をわずかに含む 細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・ナラ 黒・白 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ヨコナラ 工具による ナラ・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
47	1030	復元土器	破片	口縁部～ 空巣部	T.3IV3/2	3IV5/1	T.3IV5/3	細緻部を含む 微細部を含む	カ・白・黒・内・ナラ 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ヨコナラ 工具による ナラ・ヨコナラ	良好 候補 モゼン
48	1249	復元土器	破片	口縁部	3IV5/2	3.IV5/3	1IV5/2	砂粒をわずかに含む 細緻部を含む 微細部を含む	カ・セ・白・内・工具によるナラのナラ 黒・白・ビオラテのナラ ホ・ナラ 工具による ナラ・コナラ 工具による ナラ・ヨコナラ	良好 候補 モゼン

表7 弥生時代遺物觀察表3

表8 弥生時代遺物觀察表4

表9 弥生時代遺物觀察表 5

品名	底上/底	器形	残存量(cm)	部位	色	外	赤	内	色	肉	色	基	断面	断面	断面	その他	局地	種類	同一
75	216	雙形土器	破片 1/1残存 復元底7.0cm	酒器	10YR4/2	10YR5/1	10YR4/2	灰	砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ナダ 黒・他	白・ナダ 黒・他	良好	12b					
76	509	雙形土器	破片 1/1残存 復元底3.5cm	武器	7.5YR4/3		2.5YR4/4	灰	砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ナダ 黒・他	白・ナダ 黒・他	良好	12b	526				
77	865	雙形土器 重形土器	破片 1/1残存 復元口10.8cm	口縁部 ～頸部	7.5YR4/2	5YR5/4	7.5YR5/4		砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ミガキ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	一般				
78	53	雙形土器 重形土器	破片 1/1残存 復元口14.3cm	口縁部 ～頸部	7.5YR4/4	10YR5/3	10YR5/4		砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・工具によるナダ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	141				
79	644	重形土器	破片	口縁部	10YR4/2	10YR5/2	2.5YR4/2		細砂粒を多く含む 粗砂粒を多く含む	カ・セ・白	内・ミガキ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	525				
80	一般	重形土器	破片 1/1残存 復元口18cm	口縁部 ～頸部	7.5YR5/4	5YR5/4	10YR4/2		砂粒をわずかに含む 細砂粒を多く含む	カ・セ・白	内・工具によるナダ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	526				
81	1250	重形土器	破片 1/4残存 復元口19.5cm	口縁部 ～頸部	2.5YR4/2	5YR5/6	7.5YR5/4		砂粒を若干含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ミガキ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	1418				
82	145	重形土器	破片 1/2残存	11縁部 ～頸部	7.5YR4/3	7.5YR5/4	10YR4/3		砂粒を若干含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ナダ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	160				
83	817	重形土器	破片	11縁部	5YR4/3	7.5YR4/3	7.5YR4/3		細砂粒を若干含む 粗砂粒を含む	カ・セ・白	内・工具によるナダ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	470				
84	439	重形土器	破片	口縁部	5YR4/4	5YR5/4	10YR4/2		細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ミガキ 黒・他	白・ミガキ 黒・他	良好	12b	525				
85	132	重形土器	破片 1/1/2/1/5残	口縁部 ～頸部	7.5YR5/3	7.5YR5/3	7.5YR4/3		砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ミガキのちマダ 黒・金・他	白・ミガキ 黒・金・他	良好	12b	231				
86	807	重形土器	破片	口縁部 ～頸部	5YR4/2	7.5YR4/2	7.5YR4/2		砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ナダ 黒・他	白・工具によるナダ 黒・他	良好	12b	251				
87	369	重形土器	破片 1/1/2残存 復元口20.5cm	口縁部 ～頸部	7.5YR4/2	5YR5/4	7.5YR4/3		細砂粒を含む 粗砂粒を含む	カ・セ・白	内・ミガキのちナダ 黒・金・他	白・ミガキ 黒・金・他	良好	12b	717				
88	1102	重形土器	破片 1/1/2残存 復元口18.8cm	口縁部 ～頸部	10YR3/2	5YR5/3	10YR4/3		砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・工具によるナダ 黒・金・他	白・ミガキ 黒・金・他	良好	12b	404				
89	438	重形土器	破片	口縁部	7.5YR4/2	7.5YR4/3	7.5YR4/3		砂粒をわずかに含む 細砂粒を含む	カ・セ・白	内・ミガキ 黒・金・他	白・ミガキ 黒・金・他	良好	12b	443				
90	129	重形土器	破片 3/5残存 復元口21.7cm	口縁部	5YR4/3	7.5YR5/4	7.5YR5/6		砂粒をわずかに含む 細砂粒を若干含む	カ・セ・白	内・工具によるナダ 黒・他	白・ミガキのちナダ 黒・他	良好	12b	892				
																		一般	
																		507	
																		1246	

表10 弥生時代遺物観察表6

番号	断面上の%	器種	現存状況(m)	縦幅	横幅	高さ	内深さ	外深さ	色	形	鉢	軸	柄	脚	輪郭線	調査	その他	部位	組合	四一
91	1325	直形土器	破片	直縫部	SYR4/4	SYR5/6	7. SYR5/4			砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・工具によるナデの ちり・ダ・マツツ 外・工具によるナデの チリ・ダ	良好	12b						
92	46	直形土器	破片	齊藤部 ～縫隙	7. SYR5/3	10SYR5/3	2. SYR4/1			砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・ユビコサエのちり・ 良好 工具によるナデの チリ・ダ・マツツ 外・工具によるナデの チリ・ダ・マツツ 外・ナデ 良・ヨコナデ	良好	12b						
93	517	直形土器	破片	縫隙～ 肩部	SYR5/6	SYR5/4	SYR4/4			砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・ナデ 外・ミガタ・ナデ 良・ヨコナデ	良好	12b	675	196				
																854	197			
																1265	1537			
94	212	直形土器	破片	底部 底1/2既存 底元約6.4cm	10SYR4/2	7. SYR5/3	10SYR4/2	底		砂粒を若干含む 無砂粒を若干含む 無砂粒を若干含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・工具によるナデの チリ・ダ・ 外・ナデ 良・熱調査	良好	12b						
95	21	直形土器	破片	底部 底1/2既存 底元約6.5cm	2. SYR4/3	SYR1/3	10SYR4/2	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・工具によるナデの チリ・ダ・ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ 良・工具によるナデの チリ・ダ	良好	12b						
96	975	直形土器 等?	破片	底部 1/2既存 底元約6.3cm	SYR4/2	7. SYR5/2	10SYR4/2	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒・他	内・工具によるナデの チリ・ダ・ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ 良・熱調査	良好	12b						
97	1482	直形土器 等?	破片	底部 1/2既存 底元約6.3cm	SYR4/3	10SYR4/2	7. SYR5/2	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・ナデ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ナデ 良・熱調査	良好	12b						
98	12	直形土器 等?	破片	底部 1/2既存 底元約6.8cm	7. SYR4/2	10SYR3/1	10SYR4/2	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・工具によるナデの チリ・ダ・ 外・ナデ 良・工具による ナデのち・ナデ 良・ナデ	良好	12b						
99	9	直形土器	破片	3/4既存 底元約6.4cm	SYR4/3	7. SYR5/4	2. SYR4/2	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・マツツ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ 良・ナデ	良好	12b	965					
100	528	直形土器	破片	底部 1/2既存 底元約7.3cm	SYR4/3	2. SYR4/3	SYR4/3	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・工具によるナデの チリ・ダ・ 外・ナデ 良・熱調査	良好	12b						
101	183	直形土器	破片	底部 1/2既存 底元約6.4cm	SYR5/4	7. SYR5/3	10SYR4/2	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・金・パ・ 他	内・工具によるナデの チリ・ダ・ 外・ナデ 良・ビオサエ	良好	12b						
102	249	直形土器	破片	底部 1/2既存 底元約8cm	7. SYR5/4	10SYR4/2	10SYR4/2	底		砂粒を含む 1. SYR5/6 無砂粒を多く含む 無砂粒を多く含む	カ・セ・白・ 黒・金・パ・ 他	内・マツツ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ 良・無葉態	良好	12b						
103	62	直形土器	破片	底部 1/2既存 底元約7.4cm	SYR5/4	10SYR4/2	7. SYR5/3	底		砂粒をわずかに含む 無砂粒を含む 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・マツツ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ 良・無葉態	良好	12b						
104	1047	直形土器	破片	底部 底1/2既存 底元約7.4cm 底元約6cm 底元約12.1cm	7. SYR5/4	4.7. SYR5/4	4.7. SYR4/2	底		無砂粒を含む 7. SYR5/2 無砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内・工具によるナデの チリ・ダ・マツツ・ 工具の 上・ナデのチリ・ナデ 外・ミガタのチリ・マツツ 工具のヨコナデ 良・ナデ	良好	12b	1948					
															1953					
															1066					
105	94	高所原土 器	破片	脚部	2. SYT7/3	10SYE6/4	SYT7/1	脚部		無砂粒を若干含む 10SYE6/4 無砂粒を若干含む	カ・セ・白・ 黒・他	脚・マツツ 外・工具によるナデの チリ・ダ・ 良・マツツ 脚・ヨコナデ	良好	12b						

表11 弥生時代遺物観察表7

品番	出土位置	器種	残存状況(cm)	部位	熱	然	色	内	色	肉	色	施	加工	説明	その他	場所	適合	同一
106	215	高坪形土器	破片	脚部	脚部	10YR3/2	10YR3/2	7.5YR3/2	7.5YR3/2	7.5YR3/2	7.5YR3/2	無砂粒を含む 2	無砂粒を含む 10YR3/1	カ・白・ 黒・他	内・ナゲ 外・ナゲ 焼内・ナゲ	良好	12b	
107	1037	コップ形土器	破片	脚部	5YR5/4	5YR4/3	5YR4/3	無砂粒を含む 1/4段存 復元脚8.3	無砂粒を含む 5YR5/1	無砂粒を含む 5YR4/2	無砂粒を含む 5YR4/1	カ・セ・ 白・黒・ 無・他	内・マツブ 外・工具によるナゲの 他	良好	12b	1049 1052 1054		
108	96	彌形土器 (山頂式)	破片	口縁部	7.5YR5/7	7.5YR5/7	7.5YR4/7	無砂粒を含む 2	無砂粒を含む 3	無砂粒を含む 1	無砂粒を含む 5YR5/2	砂粒をわずかに含む 無砂粒を若干含む 無砂粒を若干含む	カ・白・ 黒・他 ナゲ	内・工具によるナゲの 他 外・工具によるナゲ ナゲ 口縁・ヨコナゲ ヨコ ナゲのちキザミ 奥・ヨコナゲのちナゲ	良好	13b		

品番	出土位置	器種	残存状況(cm)	部位	熱	然	色	内	色	肉	色	施	加工	石材	説明	その他	場所	適合	同一
109	76	扇平盤型 片刃石斧	破片	刃部										流紋岩 質実用 剝			12b		
110	312	打製石斧	長12.6cm 幅5.0cm 厚1.9cm 重140g	完形										流紋岩			12b		
111	1339	扁平打製 石斧	長12.3cm 幅8.3cm 厚1.8cm 重192g	完形										流紋岩			12b		
112	70	横刃形 石器	長7.6cm 幅10.5cm 厚1.6cm 重108g	完形										流紋岩			12b		
113	621	打製石器	長9.5cm 幅1.8cm 厚0.6cm	完形										安山岩			12b		
114	980	磨製石器	長4.9cm 幅1.8cm 厚0.4cm	先端部										安山岩			12b		
115	13	磨石	長9.3cm 幅8.6cm 厚3.2cm 重140g	完形										安山岩			12b		
116	894	圓石	長10.9cm 幅8.2cm 厚3.5cm 重500g	完形										安山岩			12b		
117	172	軽石製 加工品	長11.3cm 幅5.6cm 厚2.6cm 重50g	完形										軽石			12b		
118	590	軽石製 加工品	長7.6cm 幅5.6cm 厚2.4cm 重30g	完形										軽石			12b		
119	349	軽石製 加工品	長10.6cm 幅6.2cm 厚3.5cm 重40g	完形										軽石			12b		
120	104	怪石製 加工品	長2.5cm 幅7.0cm 厚1.0cm 重28g	一部欠 損か?										怪石			12b		

表12 弥生時代遺物観察表8

4トレンチ												同一		
地名	出土位置	品種	保存状態(cm)	剖面	芯	外	色	内	色	肉	皮	部位	その他・類似・場合	同一
1	3	扁平打鑿石斧	完形									複数枚		13
			縦片 長さ 16 cm 幅 4.4 cm 厚さ 1.1 cm 重さ 170 g											
5トレンチ												同一		
地名	出土位置	品種	保存状態(cm)	剖面	芯	外	色	内	色	肉	皮	部位	その他・類似・場合	同一
1	27	深鉢形土器	破片	口縁部～ 底部剥離	7.5H3/4	10H3/3	10H3/2	側壁板を若干含む 側底板を若干含む	カ・白・ 黒・桂	カ・白・ 黒・桂	内・工具によるナゲの らナゲ 再・工具によるナゲの らナゲ に碧・ヨコナゲのち キザミ 突・ヨコナゲのちキザ ミ	内・工具によるナゲの らナゲ 再・工具によるナゲの モソ に碧・ヨコナゲのち キザミ 突・ヨコナゲのちキザ ミ		13
2	28	深鉢形土器	破片	口縁部～ 底部剥離	10H3/3	10H3/3	10H3/3	側壁板を若干含む 側底板を若干含む	カ・白・ 黒・桂	カ・白・ 黒・桂	内・工具によるナゲの らナゲ 再・工具によるナゲの モソ に碧・ヨコナゲのち キザミ 突・ヨコナゲのちキザ ミ	内・工具によるナゲの らナゲ 再・工具によるナゲの モソ に碧・ヨコナゲのち キザミ 突・ヨコナゲのちキザ ミ		13
3	22	深鉢形土器	破片	口縁部	10H3/2	10H3/2	7.5H3/2	側壁板を含む 側底板を含む	カ・白・ 品・桂	カ・白・ 品・桂	内・工具によるナゲの らナゲ 再・工具によるナゲの モソ に碧・ヨコナゲのち キザミ 突・ヨコナゲのちキザ ミ	内・工具によるナゲの らナゲ 再・工具によるナゲの モソ に碧・ヨコナゲのち キザミ 突・ヨコナゲのちキザ ミ		13
4	30	深鉢形土器	破片	底盤	10H3/3	10H3/3	2.5H3/2	底盤	側壁板を含む 側底板を含む	カ・白・ 白・黒・ 桂	カ・マメツ 内・工具によるナゲの らナゲ 黒・マメツ	内・マメツ 再・工具によるナゲの モソ に碧・マメツ		13

表13 4・8トレンチ出土遺物観察表

第3章 まとめ

弥生時代

第12層a¹は、入来式土器群を直接被覆していた火山灰層である。灰ゴラと暗紫コラ間に降灰した開闢活動起源の火山灰と考えられ、km 7あるいはkm 8と呼ばれるテフラに該当する可能性がある。第12層a¹は暗紫コラ同様、弥生中期の土器編年を考える上で重要な鍵層となる。今後の事例に注視していただきたい。(文責 渡部)

古墳時代

調査区一帯は、古墳時代においてU字形の谷地形であり、古墳時代の遺物包含層が確認されるとともに、1基の竪穴住居が検出された。包含層中の遺物は少なく、集落の中心部分は南側の丘陵上に位置することが想定できる。

住居跡については、本文で紹介したとおり、本来建築するのに不適当と思われる谷の傾斜部分に造られている。調査範囲に限りがあることは言え、遺物の出土状況から、この住居は集落から離れた位置に単独であったものとの印象が強い。同時期の橋牟礼川遺跡等の例では、竪穴形態が方形を基調とした定型的な様相を呈することからも、この住居はいかにも奇異な印象を持たせる。

住居には、埋没後に埋納遺構が設けられている。本文中では触れるに留めたが、埋土中に埋納遺構中の土器に、受熱によって一部が変色するものが含まれている。埋土中に含まれるカーボンは、床面直上ではないから、家屋の焼失によるものではない。受熱痕跡のある土器については、住居が廃棄された後に埋没途上であった竪穴内で火が使われた結果、受熱し変色したことが想定できる。この住居では、主柱穴が埋納遺構に転用されているが、竪穴がほぼ埋没した後の行為である。このような場合の埋納遺構の設置は、柱が現地に残されている段階で、柱の除去行為とともに行われたと考えるのが妥当であろう。とすれば、この遺構は住居廃絶後の何らかの祭祀によるものと考えることができる。埋納遺構中の高杯の杯部も受熱していることから、火の使用は、上器埋納の際に行われた可能性を考えておきたい。

住居内の土器埋納遺構の先例は、始良町の萩原遺跡にある。萩原遺跡では、上器埋納遺構が2基検出されたが、いずれも土器を4段重ねにしたものである。67号住居に帰属するとされる1基は、ビット内に上器を埋納している。最上段の腹が、住居埋土の除去中に検出されたことから、上器の埋納は、新番所後遺跡同様に、住居が埋没途上にある段階での行われた可能性が考えられ、注意したい。ちなみに、埋納遺構は2例とも窓が用いられ、同時に高杯の脚部を器台として利用し、窓の脚部のみを2個用いるという規則性が見受けられる。一方、新番所後遺跡と向吉遺跡では自然窓が使用され、高杯の杯部を伏せて利用するという共通点があることも注目できる。これらは、祭祀における儀礼形態の地域性の可能性があるが、今後の課題である。

さて、萩原遺跡では古墳時代(5~6世紀)の住居が76基検出された。内、埋納遺構は2基であり、住居内に上器埋納を行うのが一般的な行為であったとは考えにくい。古墳時代の住居が多数発見された橋牟礼川遺跡では事例がなく、廃棄後の住居への上器埋納を作つ祭祀が非日常的な行為であったことを示していると考えられる。新番所後遺跡の住居が居住不適地と思われる谷部分にあり、形状も特異であることなど見ると、祭祀の実施理由は、住居の用途もしくは、居住者に求められるかもしれない。例えば、疫病の発生に伴う忌避の祭祀等である。ただし、これは推測の域を出ないため、今後事例を待つて検討すべき課題である。(文責 中摩)

(参考文献) 平田信芳・青崎和憲・中村耕治 1980 『萩原遺跡(II)』 始良町教育委員会

第12b層出土石器について

第12b層出土の石器組成は、打製石器、磨製石器、扁平打製石斧、片刃磨製石斧、横刃形石器、凹石、砥石、輕

石製加工品、剥片、調整剥片、分割縫片、礫から構成されている。未掲載石器は、取上げ番号を記載する。

打製石礫、磨製石礫は各1点づつ出土しており、石材はいずれも砂岩である。

扁平打製石斧は9点である。図示した完形品のNo.110(96)、No.111(1339)以外に、先端部や基部が欠損している扁平打製石斧が312、736、796、1015の4点であり、いずれも、両側の肩部に抉りが認められる。また、基部と思われる欠損品が、738、850、1441の3点である(写真34参照)。石材は、流紋岩製が4点、砂岩製が6点である。また、扁平打製石斧を製作する際の調整剥片と考えられる剥片も出土している。流紋岩製は、88、1444、1448などの6点がある。砂岩製は、321、800、906、954、1016などの12点がある。

片刃磨製石斧は、いわゆる大陸系磨製石器群のひとつである。指宿市内では初例となる。石材は流紋岩であるが、扁平打製石斧のものとは質が異なるようである。遺跡内では他に同質の流紋岩がないことから、推測の域は出ないものの、製品として遺跡地内に搬入されたものと考えられる。

凹石は10点である。図示しているNo.115(13)、No.116(594)以外に、694、701+1303、708、908、982、1083、1237、1313の6点がある(写真35参照)。石材は全て安山岩製である。素材の形状は、円縫を素材としたもの(908、982)、扁平な円縫を素材としたもの(701+1303、708、1083)、扁平な角縫を素材としたもの(1237)、板状の分割剥片を素材としたもの(694、1313)である。

砥石は308の1点である。安山岩製の扁平な円縫を素材とし、平坦面の側縁よりに鱗状の底面が認められる。

軽石製加工品は、図示した4点のNo.118～No.120である。出土した軽石は53点あり、その中には扁平で梢円形を呈したもの認められる。

第12b層の石材組成は、安山岩、砂岩、流紋岩、黒曜石などである。安山岩が全体の半数以上を占める。安山岩は、凹石や砥石の素材とされている。しかしながら、敲打痕や使用痕のない拳大前後の円縫や角縫も多く、また、重量が重い分割縫や板状縫もあることから、凹石や砥石の素材以外の利用も考慮する必要がある。

安山岩は、遺跡内に搬入された形状で大きく6つに分類が可能であろう。円縫、扁平な円縫、角縫、扁平な角縫、角縫でブロック状の分割縫、板状縫である。扁平な円縫は、長さ4～15cm、厚さ1～2.5cmのものや、最大長16cm、厚さ5cmのものもあり、凹石や砥石の素材となっている。

角縫でブロック状の分割縫は103、345、913、1096、1281の5点がある(写真36参照)。その内、345、1096、1281は10cm前後のサイコロ状あるいは五角形を呈し、その平坦面中央部に薄い剥離痕が認められ、一見すると四石のようであるが頗著な敲打痕は認められない。103は、5.2kgを測る。

用途不明の角縫は30数点ある。板状縫は、接合資料(38+176+301+344+1261)によると(写真37参照)、長さ44cm+α、幅11cm、厚さ3.5cmのものがある。安山岩の原産地から節理に沿って剥落したものをそのまま搬入したものと推測できる。この接合資料は、被熱により一部が黒色に変色しており、被熱後、意図的に少なくとも6個体に分割されているようである。また、593や847のような長さ20cm以上、厚さ4cm以上、重量26kgの大型なものもある。遺跡周辺での安山岩の原産地は、竹山が最も近く直線距離で約4.5kmである。

砂岩は、打製・磨製石礫と扁平打製石斧の素材として利用されている。調整剥片や剥片などがあることから、遺跡地内で製作されたものと考えられる。

流紋岩は、扁平打製石斧、片刃磨製石、横刃形石器の素材である。砂岩と同様に調整剥片が認められる。

黒曜石は3点のみである。自然面をもつ剥片、剥片、二次加工剥片であり、製品は認められない。

これらの石器は、集落地内での出土遺物ではなく、埋没谷内からの出土遺物であることから、先述した石器組成や石材組成が本来の姿ではないものと考えられる。しかしながら、意図的な遺棄や廃棄も含め、大型な安山岩分割縫、板状縫の搬入などの様相は、集落内での組成の一部として垣間見れるものである。

(文責 錦田)

写真図版



写真1 指宿市全景



写真2 1トレンチ掘削状況



写真3 2トレンチ掘削状況



写真4 3トレンチ掘削状況



写真5 4トレンチ掘削状況



写真6 4トレンチ縄文時代晩期ピット断面



写真7 5トレンチ掘削状況



写真8 6トレンチ掘削状況



写真9 7トレンチ掘削状況

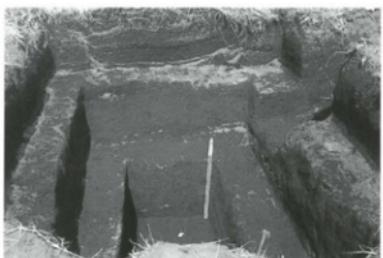


写真10 8トレンチ掘削状況

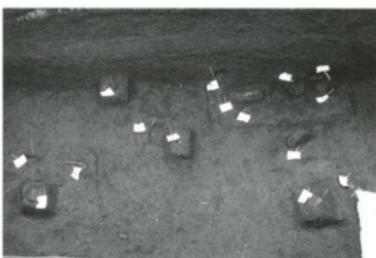


写真11 8トレンチ遺物出土状況

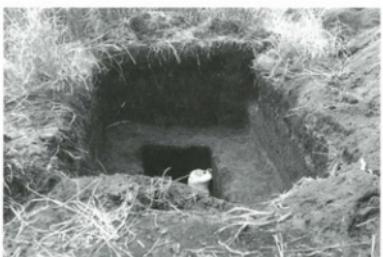


写真12 9トレンチ掘削状況



写真13 調査区全景（12層a直下の旧地形）



写真 14 作業状況 1



写真 15 調査区東壁層位 (10 トレンチ)

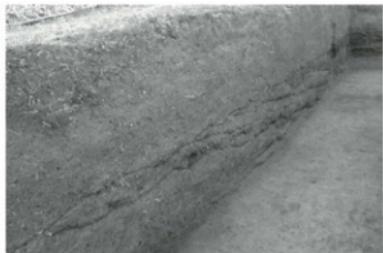


写真 16 調査区北壁層位 (10 トレンチ)



写真 17 調査区南壁層位 1



写真 18 調査区南壁層位 2



写真 19 古墳時代竪穴住居検出状況



写真 20 埋土遺物出土状況 1



写真 21 土器埋納遺構遺物出土状況

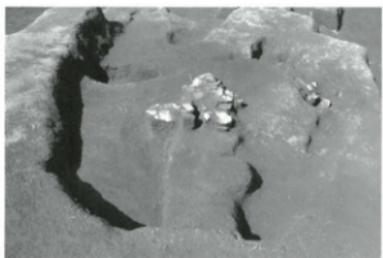


写真 22 埋土除去状況

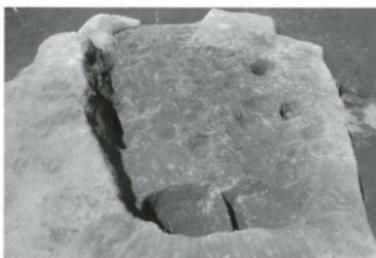


写真 23 古墳時代竪穴住居完掘状況



写真 24 炭の集中部

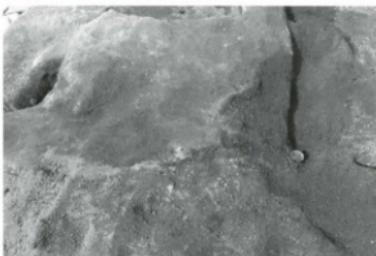


写真 25 土坑炉



写真 26 付帯土坑（完掘状況）



写真 27 付帯土坑（検出状況）



写真 28 主柱穴 A（埋納遺物除去後）



写真 29 主柱穴 A（完掘状況）



写真 30 主柱穴 B

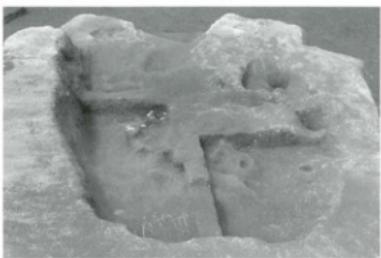


写真 31 掘形確認状況



写真 32 弥生時代遺物出土状況遠景 1



写真 33 弥生時代遺物出土状況遠景 2

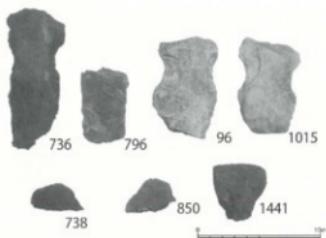


写真 34 第12層b出土の石器 1

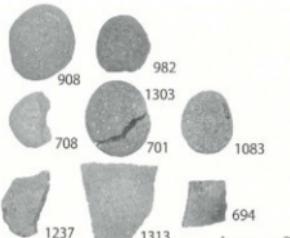


写真 35 第12層b出土の石器 2

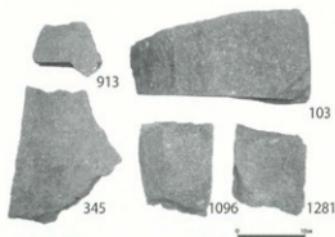


写真 36 第12層b出土の石器 3

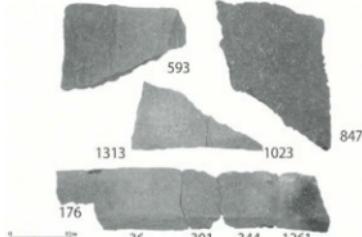


写真 37 第12層b出土の石器 4



写真 38 ピット 1



写真 39 ピット 2



写真 40 ピット 3



写真 41 ピット 4



写真 42 ピット 5



写真 43 ピット 6

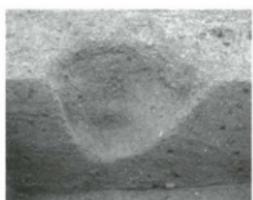


写真 44 ピット 7



写真 45 ピット 8



写真 46 ピット 9

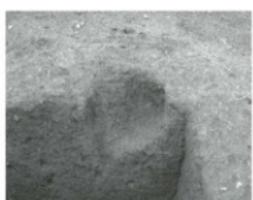


写真 47 ピット 10



写真 48 ピット 11

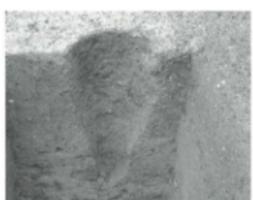


写真 49 ピット 12



写真 50 ピット 13



写真 51 ピット 14

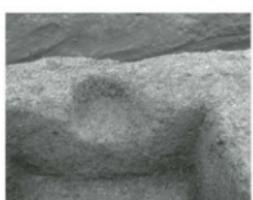


写真 52 ピット 15



写真 53 ピット 16



写真 54 ピット 17



写真 55 ピット 18



写真 56 ピット 19



写真 57 ピット 20



写真 58 ピット 21



写真 59 ピット 22



写真 60 ピット 23

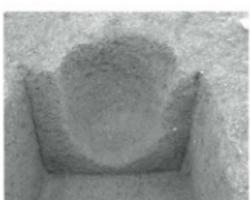


写真 61 ピット 24



写真 62 ピット 25

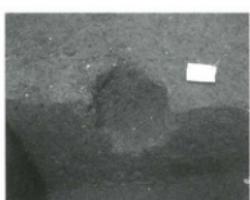


写真 63 ピット 26

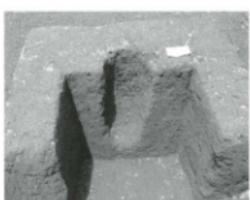


写真 64 ピット 27



写真 65 ピット 28

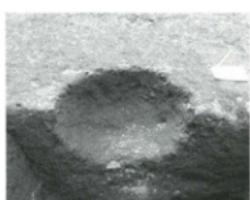


写真 66 ピット 29

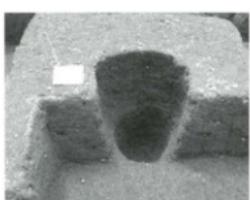


写真 67 ピット 30

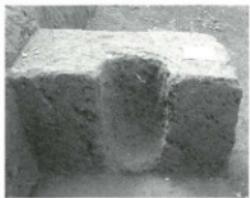


写真 68 ピット 31

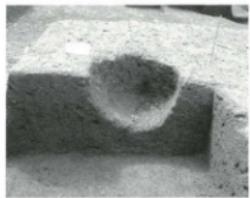


写真 69 ピット 32



写真 70 ピット 33



写真 71 ピット 34

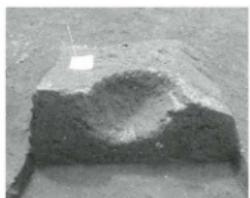


写真72 ピット35



写真 73 ピット 36



写真74 ピット37



写真 75 ピット 38

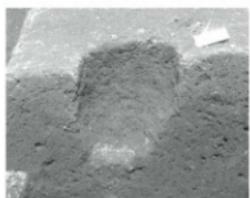


写真 76 ピット 39



写真77 ピット40

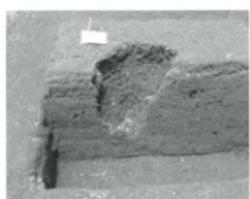


写真 78 ピット 41

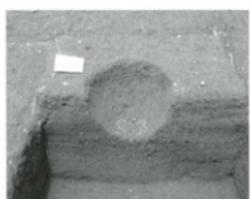


写真 79 ピット 42



写真 80 ピット 43



写真 81 ピット 44



写真 82 ピット 45



写真 83 ピット 46



写真 84 ピット 47

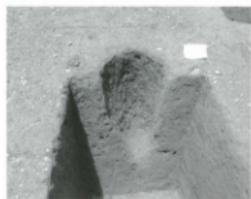


写真 85 ピット 48



写真 86 ピット 49



写真 87 ピット 50



写真 88 ピット 51

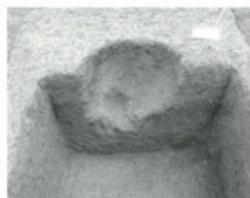


写真 89 ピット 52

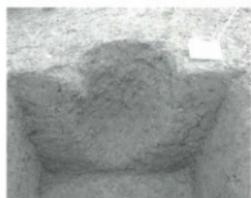


写真 90 ピット 53



1



2



3



4



5



6

写真 91 出土遺物写真 1

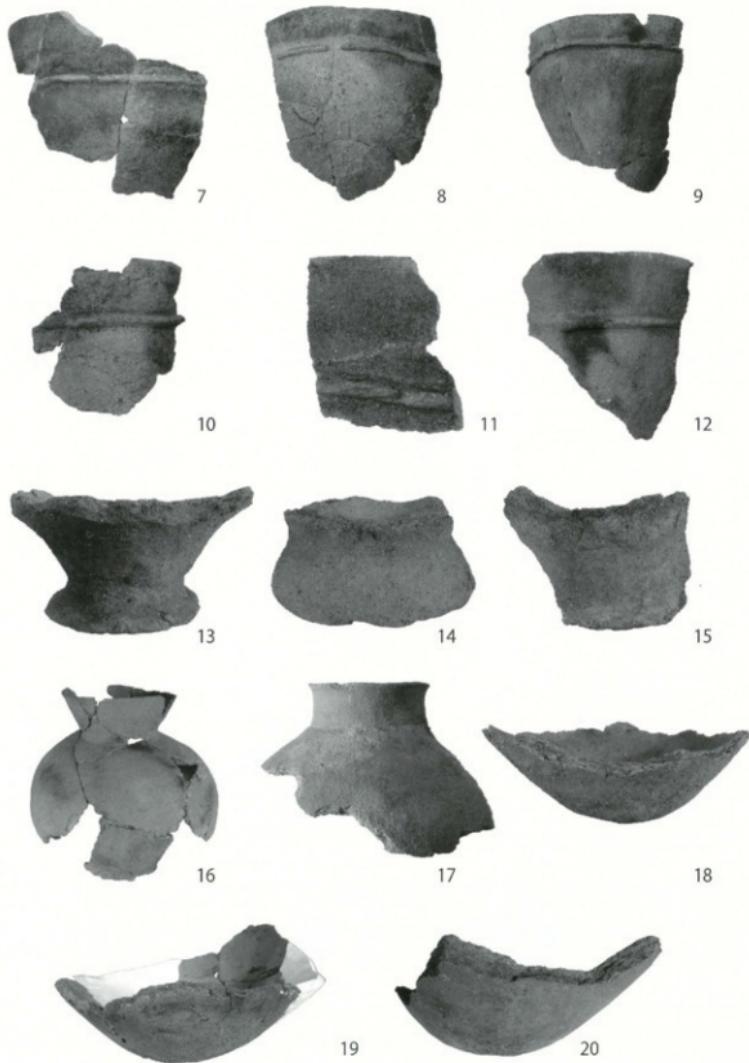


写真 92 出土遺物写真 2

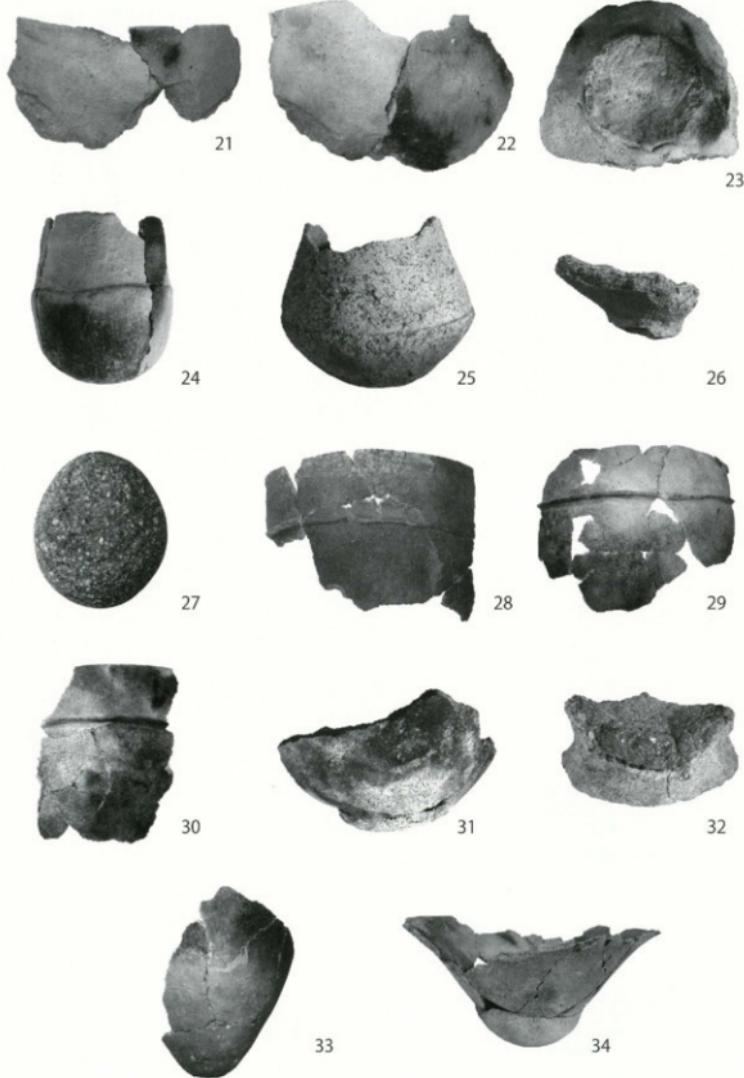


写真 93 出土遺物写真 3

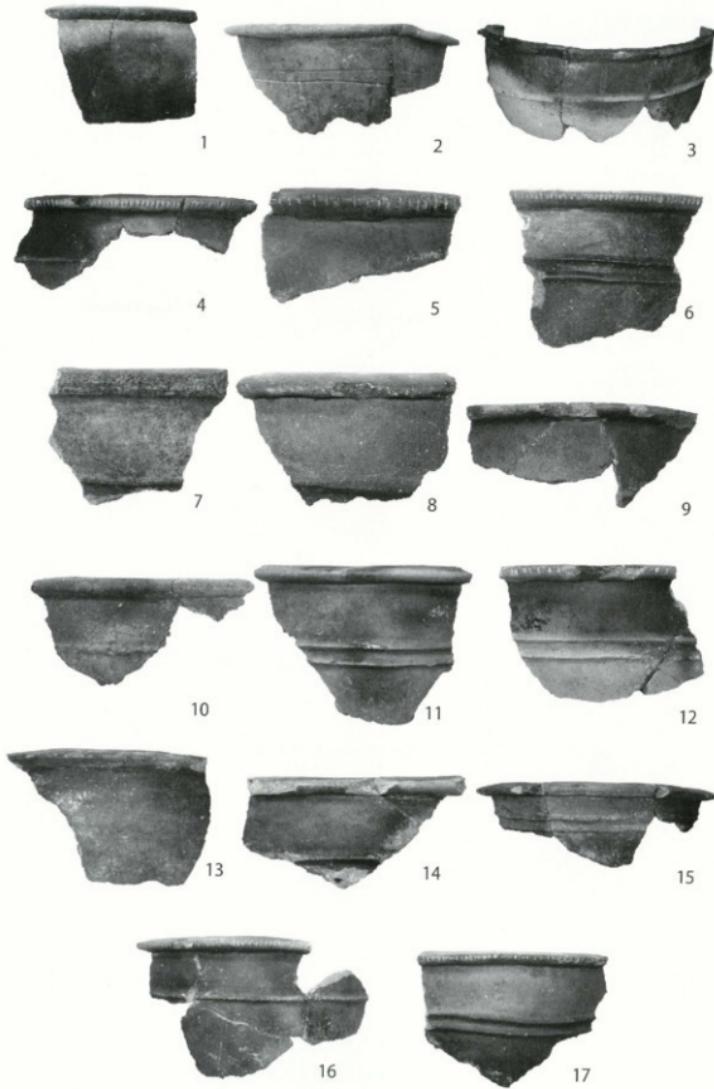


写真 94 出土遺物写真 4

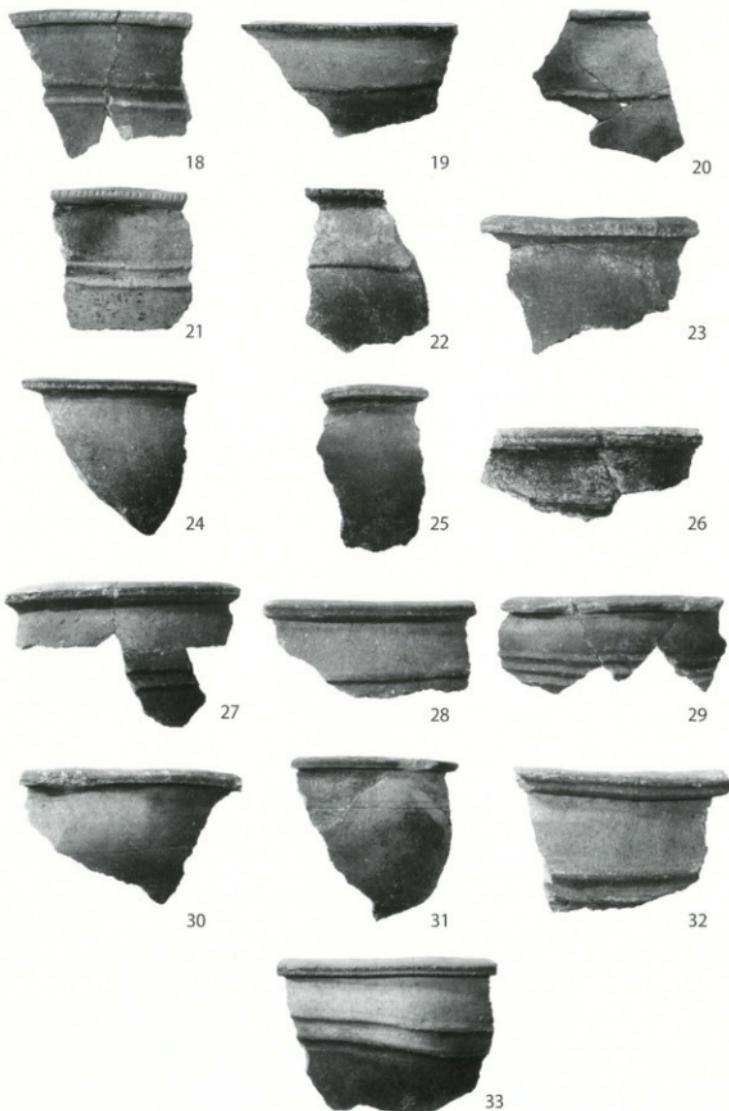
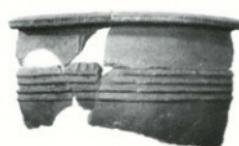


写真 95 出土遺物写真 5



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49

写真 96 出土遺物写真 6



50



51



52



53



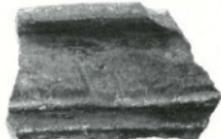
54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64

写真 97 出土遺物写真 7



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80

写真 98 出土遺物写真 8

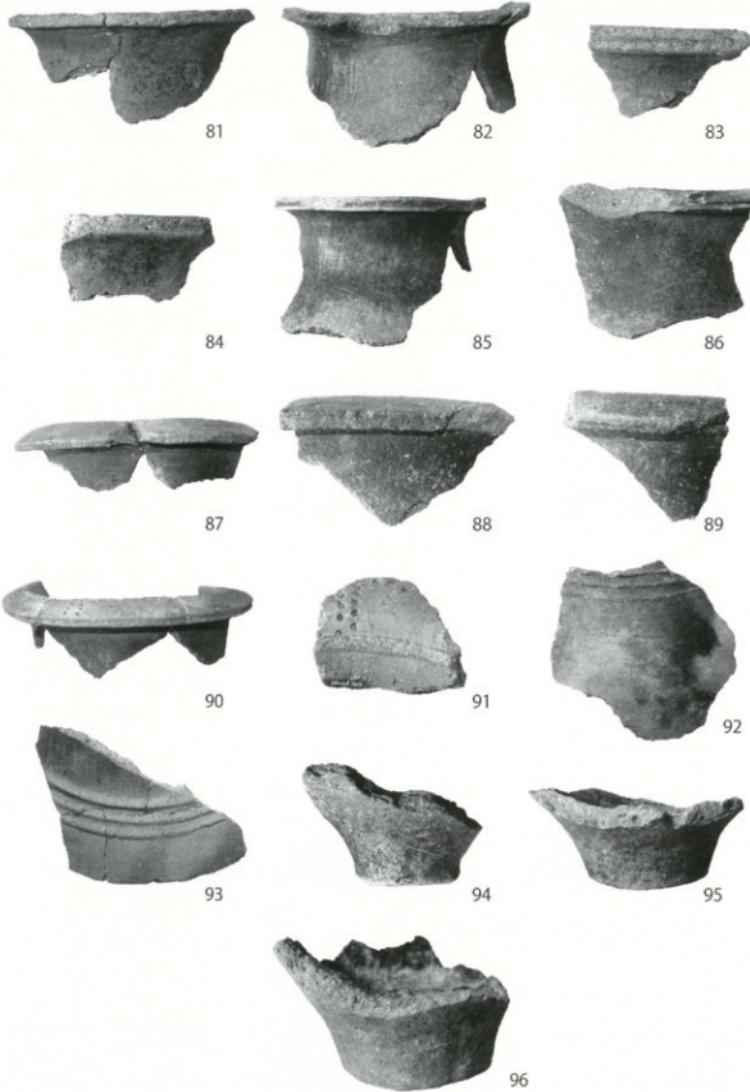


写真 99 出土遺物写真 9

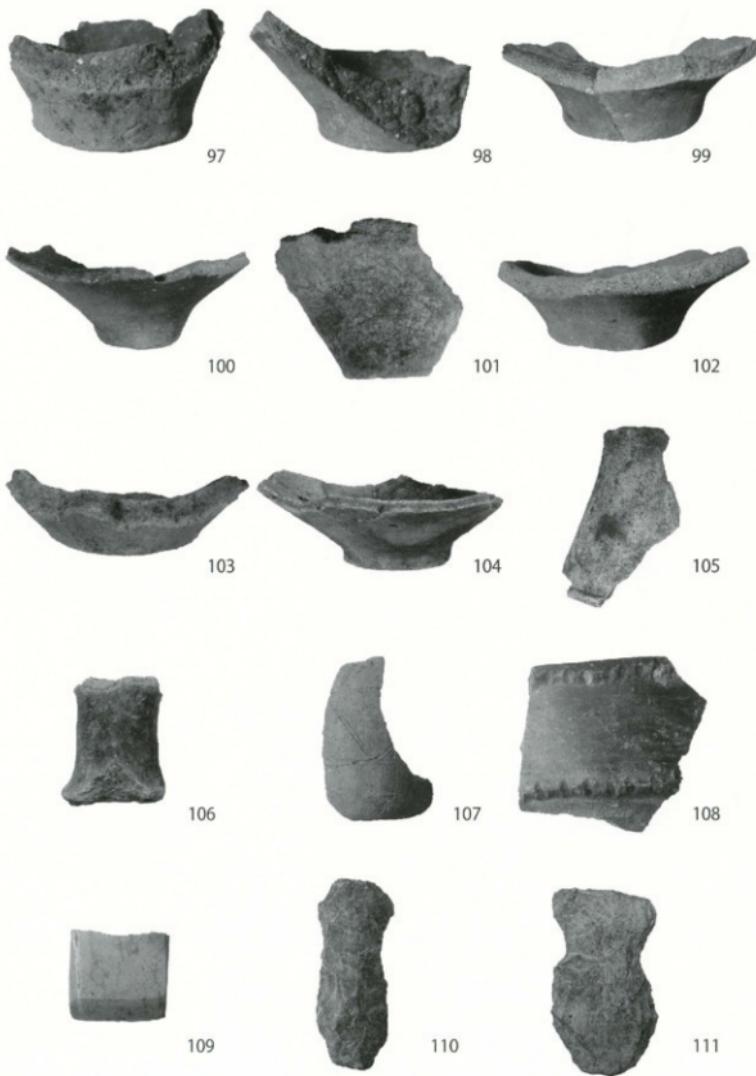


写真 100 出土遺物写真 10

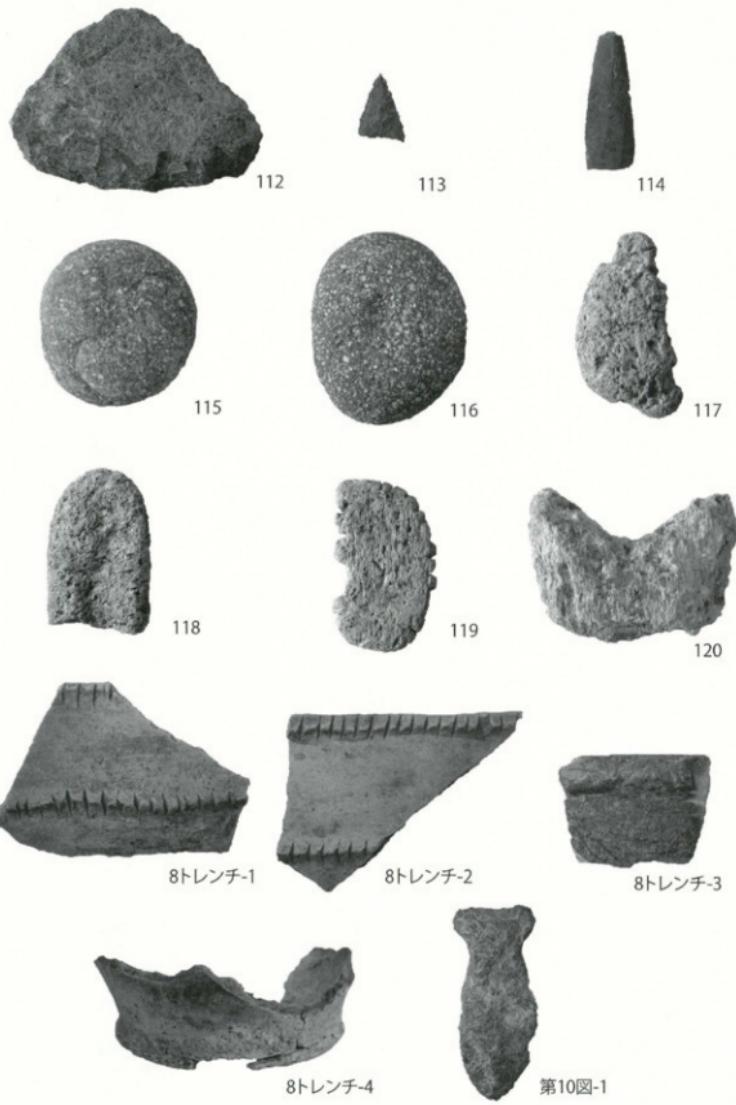


写真 101 出土遺物写真 11

表 10 報告書抄録

ふりがな	しんばんしようしろ							
書名	株式会社ニシムタ店舗建設に伴う発掘調査報告書 新番所後遺跡							
副書名	-							
卷次	-							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	中摩 浩太郎 渡部 徹也 鎌田 洋昭							
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館 C O C C O はしまれ）							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町 2290 TEL: 0993-23-5100							
発行年月日	平成19年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新番所後遺跡	指宿市十二町 字尻垂ノ上	46210	2-58			2006.5.10 ～ 2006.6.27	840 m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新番所後遺跡	集落	縄文時代	ピット	刻目突蒂土器 ・打製石斧				
		弥生時代	ピット群	入来式土器・高橋式土器・扁平片刃石斧・軽石製加工品				
		古墳時代	竪穴式住居1基	成川式土器				

新番所後遺跡

Shinbanseyoushiro Archaeological Site

2007年3月

2007 March

発行

指宿市教育委員会

The Ibusuki Board of Education

鹿児島県指宿市十二町2290

Junichi2290 Ibusuki-city, Kagoshima Pref. Japan

TEL 0993-23-5100

印刷所

株式会社 イースト朝日

East Aomori Co.,Ltd.

鹿児島市南栄3丁目30-7

Nansei3-30-7 Kagoshima-city, Kagoshima Pref. Japan

TEL 099-266-5522

